
あんこたっぷり千雨ちゃん（魔法少女まどか マギカ×魔法先生ネギま！+魁！！男塾）

ちゃくらさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あんこたつぷり千雨ちゃん（魔法少女まどか マギカ×魔法先生ネギま！+魁！！男塾）

【Nコード】

N9244V

【作者名】

ちゃくらさん

【あらすじ】

「よく分からない理由」で《佐倉杏子》は《長谷川千雨》に憑依した。全く違う魔法がある世界で、無茶苦茶な連中に鍛えられた彼女（達）はどう生きていくのか？そして彼女（達）に希望は？救いはあるのだろうか……

10/30副題のズレは、色々修正している内に、揃えるのがメンドクセ！となり、見苦しいと判っているながらも放置していました。

ご指摘有難う御座います。せっちゃんのgggd感は、千雨と対照的に描く為、自分でもやり過ぎと感じていますが、中1ならこんなもんかとお考え下さい。ここからの成長物語をお楽しみに……でも原作的にはこの位でも問題なさそうなのは、どうしよう……代わりに千雨にキツイ展開が（ry

序

雨の中で遭ったような

あんこたつぷり千雨ちゃん（魔法少女まどか マギガ×魔法先生ネギま！+魁！！男塾）

土砂降りの中、叩きつけるような雨音の向こうから、サイレンが聞こえる。音量は大きくなっているから、此方に向かっているのは確かだろう。流石にドップラー効果と共に通り過ぎられたら、自分はジエンドだ。

雨で地面が濡れていたとはいえ、トラックに撥ねられ50メートル吹っ飛ばされるという『小学2年生女子にはありえないだろう』Kレベルの不幸は、雨が降った位では庇いきれない。

「畜生」

どこぞのさとり大輔作品っぽい台詞を吐き、氣力が萎えないような悪態をついていた。

氣を失ったら、眠ったら死ぬんじゃないか？という恐怖と戦いつつ頭を働かせ、こうなった原因を思い出す。なんてことはない、雨の中、信号が青なのを確認して横断歩道を渡っていたら、トラックがノーブレーキで突っ込んできただけである。吹っ飛ばされている時に運転手の顔が見えたが「ん？なに？」という顔をしていた——しかも真っ赤な顔をして——間違はなく飲酒運転だろう。

「畜生、いつか殺してやる」

どこぞの中村三等陸曹っぽい台詞を呟きながら、身体の状態もチエックする。

あまりにも強烈だったせいか痛みは感じない——それが逆に怖くはあるのだが——雨が体温と共に生命を奪っていくのを何となく感じている。それなのに身体は痺れているのか思うように動いてくれない。目の前にある腕を動かそうと意識を集中するのだが、ただ痙攣しているようにしか見えない。

「動け、動け、動いてよ！」どこぞのサードチルドレンっぽく脳内で叫んでいた時

カチリ

かすかに金属音がした。本当にかすかな音だったのだが、どうにも気になる音だった。まるで光と影、裏と表が擦り合わされたような感覚に意識は吸い込まれていく。

カチカチ

震えている掌の中に何かがあるのだろう、その正体を突き詰めようと全神経集中する。最早サイレンも救急隊員の声すら耳に入っていない。

「なに？これ……」

緊張の糸が切れ、急速に視界がブラックアウトしていく。それと共に頭の中に色々な映像と感情が浮かんでいった。

貧しく空腹だった記憶 謎の生物と契約した記憶 親を喜ばそうとして頑張った記憶 全てが無駄となり一人になった記憶 そして自分の為だけに戦いながらも誰かを助けたり助けなかったり……助けられなかったりした記憶。

それらの記憶や感情が自分の中に浸透していくのを感じていたが、拒絶する気概は沸いてはこなかった。ついさっきまで死の恐怖で一杯だったのが嘘のように落ち着いていく。

薄れいく意識の中その眼に映ったものは、紅い石が埋め込まれている指輪と、ガノタが見たら「ELSキター」と言いたくなるような丸い金属のアクセサリー——この世界の者は知らないであろうが、これら二つのモノは

ソウルジェム

グリーンシード

と呼ばれるモノであった。

『希望』と『絶望』を象徴する二つのモノを手に入れた事が、彼女——長谷川千雨の運命に如何なる変化をもたらしたのか——この世界に知る者はいない。

第1話

これはとってもややこしいかって

彼女が退院できたのは事故から1ヶ月後だった。最初の一週間で、大した怪我が無いことを確認出来たのだが、記憶の混乱が診られたので、医者に安静にするよう言われた為だ。

実際、記憶が混乱していた千雨としてはありがたい話であった……確かに《長谷川千雨》としての記憶に《佐倉杏子》が歩んできた『色々な』記憶が流入していた状態では、まともな判断や行動は出来なかったであろう。

だが一番厄介だったのは記憶の整理が終わった後だった。事故の時に手に入れた《ソウルジェム》《グリーンシード》この二つが悩みの種だった

「シード（種）だけにな」

小学3年生にしては上手い事を言えるまで回復したが、それまでが大変だった。

ソウルジェムがあり佐倉杏子の記憶まである。試しに変身してみたら真つ赤なコスチュームに槍という姿になったからさあ大変。ソウルジェムは魂の在処、そしてこのソウルジェムは佐倉杏子の物……つまり《佐倉杏子》の記憶と能力がある《長谷川千雨》なのか《長谷川千雨》の記憶と容貌がある《佐倉杏子》なのか……アイデンティティーが崩壊しかねない事態に陥った。

違和感を与えないよう振舞おうにも、自分の嗜好や価値観だけな

ら兎も角、癖や利き腕がどっちかまで考えながら行動するなど不可能である。いくら両人が慎重な性格でおませさんだとしても限度がある。

この危機を乗り越えられた理由は、三週間に及ぶ長考の結果

「Let it be」

という賢者の言葉による悟り（匙を投げたともいうが）と、ずっと傍で看病してくれた両親からの愛情だろう。

「まあママがプレシアじゃなくてラッキー」

育児放棄↓鞭打ち↓全力全壊SLB のコンボにならなかった事を、良かったと言いたいのだろうが、発想と比較対象がもう既にアしなだけに「全然余裕じゃねえか」と何処からか突っ込まれそうな発言でもあった。流石は魔族にリア充呼ばわりされただけはある。

千雨の出した結論は『基本長谷川千雨、佐倉杏子としての考えも尊重する』となる。まだ一人で生きていく必要もないし、元気な家族を捨てられない。魔女等の障害が無い限り、日々平穏な人生を送る……まあ世の中そんなに甘くはなかったが……

退院祝いのささやかなパーティーの後、一人自室で『長谷川千雨』は色々と考えていた。

自分の状況を簡潔に説明すると『色々な『佐倉杏子』の記憶がある』という状態だ。其々違う流れに、違う終わりを迎えた記憶が残っている。

円環の理（藁）に従いまどかに逢った記憶すらある……当然ながらマミに撃ち殺された時のもある（怒）

そして《佐倉杏子》の記憶の影響か、間食が明らかに増えた。小遣いに上限がある為、無茶な買い食いは出来ないが、うんまい棒やお徳用を買い溜めして、チビチビ食えることでなんとか凌いでいた。経済活動を通さずに直接調達する方法もあるのだが、《長谷川千雨》としての倫理観と《佐倉杏子》としての苦い記憶により否決された。

「おいおい……マジで無いのかよ」

知人がいるかと思いい見滝原市について調べようとしたが、そんな都市は存在してなかった……まあ群馬県なら、地図に載っていない町の一つや二つ有っても不思議ではないが、あの規模の都市だとそれもありえない……もしかすると全く違う世界に来てしまったのだろうか……最悪の事態も想定しておこう。

次に考えた事は『どうしてこうなった』のだろうか？である。色々考えた結果、理由としてありえそうなのは二つ

・あの相打ちの結果、発生した爆発によってこうなった

・ネ申まどかが気を利かせてこうなった

前者だとしたら本当に奇跡のような事象であり、まだ後者のほうが有り得るのだが、グリーンフィードは旧バージョン（魔女）のもの

である。纏めると物証からは前者、確率と状況証拠としては後者になる。

「まったく、訳が判らないよ」

一回言ってみたかった台詞を呟いてみたが、キュウベイに対する怒りが沸々と湧いてくるだけだった。脳内で劇場版のEVA弐号機ぐらいにグツチャグチャにすること六回「よく考えてみるとアタシが弐号機で、アイツが量産型じゃねえか!! クソー!!」と再沸騰すること一回

「あーイライラする。それもこれもあいつのせいだ!」

一寸理不尽なことを言っていると頭は冷静になっていった。

「まあいいか。生きているだけでもアタシ等にとってはトゥルーエンドみたいなもんだし」

ソウルジェムが終わる時、どうなるのか……答えが出るのはおそらく自分が最期の時だから、一時保留とした。

「……出来れば普通の人間として復活したかったなあ……」

それが過ぎた願いだとしても、これを言わずにはいらなかった。

最後に考えたのは『これからどうするのか?』である

「どうしたもんかねえ……まあ魔女を狩るのは確定なんだけど」

それは魔法少女である以上、避けることが出来ない。自分が生きて(？)いく以上、ソウルジェムを保つためにはグリーンフィードが必要だ。

だが今までのような戦い方は出来ないとも思っている。千雨は唯一となったグリーンフィードを眺めながら呟いた。

「さやか……」

千雨はこのグリーンフィードを知っていた。正確に言えば判った、というべきだろう。

オクタヴィア・フォン・ゼッケンドルフ——《自分》が相打ちにした魔女、そして助けられなかった魔法少女の成れの果て……

基本、千雨はこのグリーンフィードは使う気はない……家族や友達に危険が迫ったりしない限りは。

『またアイツを呪いに染まらせたくない』

できることなら、と後に続くのは彼女らしいとも言える。

だがそうなるとソウルジェムを消耗させない戦闘術を編み出さなくてはならない。

真っ先に思いつくのは、曉美ほむらのスタイルなのだが、あれは『時間操作』と『アイテムBOX』があつての戦術であつて、基本前衛タイプの自分とは相性が良くない。武器を強奪するにも一苦労、持ち歩くにも一苦労であらう。銃刀法違反に窃盗容疑で指名手配なんて本末転倒である。

「試しに爆弾位は作ってみようかな……」

参考になるのはこの程度だろう。

「となると、身体能力を上げるしかないか……」

佐倉杏子時代には武術など習わずに、身体強化と経験だけで動いていた。ガチンコの殴り合いが信条の自分なら武術による恩恵はかなりあるはずだ。

「思い立ったが吉日と言うし。そういえば近所に槍術道場があったな」

これもまどかの思し召しか、と感謝しつつ両親に許可をもらい3年進学と同時に入門することができた。

伊達槍術道場

千雨が道場の門をくぐると、中でマッチョな男が仁王立ちで待ち構えていた——半裸で。

頬に6つの傷がある男は、歴戦の勇者というべき覇気を纏いながら、良く通る声で静かに言った。

「よく来たな、長谷川3号生」

「いやいやいや只の3年生です!」

こうして中学校入学までの3年間、長谷川千雨最大の黒歴史とも

いえる修行時代が始まった。

個人的感想　今のネギまの混迷は、まどマギの12話に「やられた！」からなのだろうか……

第2話

もう何がなんだか分からない

不愉快な表現あり（前書き）

千雨ファンの方々には不愉快な表現があります。第2章の内容は『千雨パワーアップする話』ですので、不愉快な思いをしたくない方はスルーされる事を推奨します

第2話

もう何がなんだか分からない

不愉快な表現あり

修行は順調に進んでいった。プラスαで色々と習得することができた。非常に有意義な日々だった。

千雨は日記にそう書いた。そうとしか書かなかった……あんなもん記録に残しておけるか！ とソウルジェムが濁りそうな呪詛を吐きながら日々修行に邁進していた。

「畜生、いつか殺してやる」

これが完全に口癖として定着してしまい、両親が心配してやたらと「大丈夫か？ 何か嫌な事でもあるのか？」と話しかけてくるようになった。千雨は「大丈夫だよ」と言って誤魔化すのが大変だった……もし道場に抗議に行つて、出てきたのが雷電と丸だったら卒倒しかねない。

修行は基礎体力造りから始まり、体術、槍術とステップアップしていった。千雨は最初から魔法で身体強化しておいたので習得はスムーズに進んだ。特に槍術は蛇轍槍という伸縮自在の槍を使っているのです、千雨自身の戦い方に応用し易かった。『槍を回転させて竜巻を起こせ』と言われたときは「馬鹿かお前は」と言いそうになったが、無事に渦流天樓嵐もマスターできた。

「本当に、こいつはまどかの申し召しだぜ」この時はそう思っていた……この時まででは。

ある程度経つてくると、伊達師範不在の時が出てきて、代わりに部下の三人に教えてもらう事が多くなった。

その部下を簡単に説明すると『美形、ハゲ、一寸エキセントリックなタトゥーのオヤジ』である。

「なあ飛燕師範代、伊達師範はなんで最近留守が多いんだ？」

千雨は少し気になったので美形（飛燕）に尋ねてみると

「ええ、本業の方が忙しくなってますので」

飛燕は千雨からの質問に何も隠さずに答えた。

「本業？」

「はい、ウチのシマにちょっかいを出してきた組がいましたので」

「……」

逃げよう、さっさと技を習得して逃げよう——千雨は思った——
曉美はむらじゃあるまいし、こんなヤヴァい所から早くフェードアウトしないと

入門↓交流↓盃↓バッチ のアウトローまっしぐらコースになるかもしれない。

千雨は今まで以上に修行に力をいれ、打ち身と筋肉痛に耐える日々が続いた。その結果、雷電からは大往生流と武術の知識、飛燕からは鳥人拳と手芸、月光からは？家流とゴルフをマスターしていき、そろそろ卒業しようと思っていた時、道場に来客が。

「フフ、如何したのですか」、あなたが来るなんて珍しい」

「いや、伊達の所に面白い奴がいると聞いてな。一丁揉んでやろかと」

千雨の前にはTVで何回か見た事のある、アメリカのVIPが立っていた……コイツも半裸で。

「女子を揉むなんてセクハラだぜ……」

流石に千雨のツツコミにも力が無い。

「しかし貴方が此処にいと、アメリカが戦争になった時に危ないのでは？」

「問題ない。何かあったらICBMをブチ込めと指示してある」

「おかしくね！優先順位がおかしくね！！そんなの絶対おかしいよ！！」

当然ボクシングも練習させられた。千雨も熱心に練習した……主に世界平和の為に。

「もっと腰を入れて撃て！そんなんじゃあヘビー級チャンプにはなれんぞ」

「いやいやいやアタシはストロー級ですから！アトム級（女子最軽量）ですから！一生アトム級だっつうのー！！」

千雨は少し見得をはった。ここまで来たら千雨にも今後の展開が読める。このままだと変人師匠がエンドレスに現われ、変態技を教えられる。だから早く習得して合格すれば I C A N F L Y！頑張れ！千雨は自分を奮い立たせようと心の中で叫んだ。

結果、彼女の予想は半分当たった……

「飛燕、邪魔するぞ」

警察官が遭遇すれば、職務質問か目線を逸らすかの二択だろう怪しい4人組が現われたのは、ジェット・ソニック・マッハ・パンチをなんとか習得できた直後だった。

「フフ、死天王の方まで来るとは、千雨は可愛がられていますね」

「どう考えても角界レベルの可愛がりじゃねえか！飛燕デメエ、判つてて言つてんだろー！」

千雨は師匠にタメ口になる迄やさぐれていた。

「まあ落ち着きなさい千雨。確かに今は絶望的な状況かもしれないが、禍福は糾える縄の如く、何時か貴方に希望が訪れる日が来るでしょう。それで差引きゼロになりますよ」

「誰が言った！？何時言った！？何時何分何秒に言ったー！！」

重要な事なのでもう一度言わせてもらうが、彼女はかなりやさぐれていた。それでも修行を続けていったのは、自分が強くなっているのがはつきりと自覚できたからだ。今ならば使い魔位は徒手空拳で倒せる。魔女にだってダメージを与えられるだろう。

まあその成長の結果、修行内容が技の習得から実戦組み手に移っていたのは想定外だった。

一度手製の爆弾が見つかった時には「流石だな千雨『爆挺殺』を習得する為に態々爆弾まで作るとは」といわれ爆弾を身体に括り付けられそうになった……その後泣く泣く爆弾を処分する羽目になった。

『あんたは自業自得なだけでしょう』

どこからか聞こえた声に、千雨は何も言い返せなかった。

小学校六年生の夏には魍魎拳、戮家、鞏家、愾塵流とマスターしていき、千雨自身も貪欲に覚えていった。

「だが毒手、テメエはダメだ」

死天王筆頭は少し落ち込んでいた。

夏休みが始まったある日、千雨の師匠達が集まり、今後の方針について話し合っていた。

「千雨もそろそろ死合に挑んでもいい頃合だな」

「試合で充分です」

「そういえば今週末、喊烈武道大会が開かれるそうで」

「聞けよ！」

「参加者は百人と聞いていますので、丁度良いかと」

「何がだよ！」

「では卍丸よ、仔細任せたぞ」

「承知した」

「畜生、いつか殺してやる」

「フッフ、長谷川千雨よ、その気概やよし」

「聞こえてんじゃねえかー！」

長谷川千雨に訪れた最後の試練は、本人の了承無く始まった。

週末、千雨と卍丸は喊烈武道大会の会場で、周りを見渡していた。

「どうだ千雨、勝てそうか？」

「何か（1対1なら）チヨロそうじゃん。瞬殺っしょ」

「そうか（まとめて）瞬殺とな」

ガリガリくんを食いながら千雨は何も考えず返答し、卍丸は弟子の成長に感慨深く頷きながら今後の予定について話し合った。

「で？何処で参加登録するんだよ？」

「登録なぞせん。まずは千雨よ、この茶を飲め」

「……ああ」ガリガリくんを啜えたまま千雨は身構えた。

千雨はこれまでの経験から『何かヤバそうな雰囲気』を察していたのだが、そこは敵もさる者、長年の付き合いから『茶を飲め』と食い物であるかのように言えば、拒否出来ぬと踏んでいた。事実、不承不承ながらも千雨はその液体を飲み干し「で？」と尋ねた。

「それには遅効性の毒が入っている。当然致死量だ」

「……なにがどう当然なのか理解できねえんだが……」千雨はガリガリくんを胃に流し込み、バーを投げ捨てながら呟いた。

「そして解毒剤を手に入れるには、あそこにいる百人を倒すことが条件となる」

「……」

何とか状況を飲み込んだ千雨は、眼鏡越しに殺気がジリジリと滲み出る眼を卍丸に向け、生命に関わる説明を聞いていた。

「これぞ魍魎拳における最終課題『百人毒凶』心して挑めよ」

「……確か百人毒凶って……十人十組ごとに解毒剤が与えられるんじゃないかったっけ？」

尋問するような千雨の質問に、卍丸は目線を合わさずに

「ああ、それはめんど……諸事情によって省略する」

嗚呼、憎しみで人が殺せるなら……今、千雨の心を占めているのは純粹な殺意だった。それを知ってか知らずか卍丸は飄々と逃げ道を塞ぐように言った。

「それと俺は解毒剤を持っていない。俺を倒しても無駄だぞ」

「……………ちっ」

退路を断たれた。その事を理解した千雨は、この理不尽な扱いに対する『憤り』をぶつけるべき『獲物』を睨み付け、憂さを晴らす覚悟を決めた。

「説明は以上だ。急がねば毒が全身に回るぞ」

「言われなくても!!」

そう叫びながら千雨は武道家達の集団に飛び込み、雑魚を片付ける為とっておきの大技をぶち込んだ。

「長谷川流魔体術奥義！幻瞑分身剥ジェット・ソニック・マッハ・パンチ!!」

この長谷川千雨、ノリノリである。遠くからこの様子を見ていた雷電（解毒剤所有）は唸りながら

「うぬう……あれは当に『厨二病』この目で見える事が出来るとは……」

千雨はこの後、無事『拳聖』の称号を手に入れたが、この日の事を思い出す度に、恥かしさで身悶えるようになった。

「それでは！長谷川千雨 拳聖襲名を祝して………カンパーイ！！」

虎丸龍次の音頭で皆が祝杯をあげた。流石に千雨はスルメをしやぶりながらジュースを飲んでいる………こっそり毒見をした事は内緒であるが。

その日の夜は『長谷川千雨 拳聖おめでとう祝賀会』となり関係者一同が集まった。千雨にしてみれば酒を飲む口実にされたのだが、そう悪い気分ではない。自分の努力が評価されたのは嬉しいし、死の恐怖を克服し、全力全壊で大暴れ出来た事により所謂『サイコーにハイ』な状態になっていた。

「なに！桃太郎が来てないだと！！折角虎丸とコンビで『丸・丸・桃・桃』歌わせる予定が……じゃ卅丸で『丸・丸・丸・丸』で逝けやー！！」

「……おい誰だ、千雨に酒飲ませたのは？」

「どうやら千雨が毒見で色々やっている隙に、ゴバルスキーの奴が持ち込んできたスピリタスを……」

「……まあ折角の吉日だし大目にみて……」

「よし虎丸、お前トウと組め！ これで『タイガー＆ヘビー』だヒヤヒヤー！！ 虎丸、お前が『攻め』だぞ！」

「……………」

中々カオスな空間になってきたと思ったら、ついに最強のトラブルメーカーが動き始めた。

「よし長谷川千雨よ、折角だから貴様に猛虎流奥義を授けよう！」

「は！ 虎丸師匠！ 謹んでお受けいたしまゝす」

「おいばかやめろ」

「行くぞ！ 猛虎流……」

「ギャハハ！ 虎丸くせゝぞ！！」

「おめゝのもナニ食ってんだよ。それじゃあいくぞ！！ 猛虎流奥義……」

流石に放置できるレベルではなくなった為

「影慶、頼んだぞ」

「……任せろ」

影慶はヨッパライどもの前に立つと、手に巻いていた包帯を解き

ながら回転させた。

「慄慄流——眩蜻蛉」

「ん？なんだ」影慶 そんな技に、この私がかk…… z z z」

「流石は影慶、死天王最強の男よ……」

釈然としない表情で、影慶はその賞賛を聞いていた。

翌朝目を覚ました千雨が見たものは、皆の生暖かい視線だった。

「おはよう、猛虎流師範代」

「昨日はお疲れ様。猛虎流師範代」

「猛虎流師範代（藁）」

「イヤ——！！」

全てを思い出した千雨は、激しい頭痛を物ともせず絶叫した。暫くは頭痛と羞恥心でのた打ち回っていたが、やがて精も根も尽き果て、力なく笑いながら呟いた。

「もう何も怖くねえ……」

少しづつ頭がK O O Lになってきた千雨は『どうやってたら全員の口封じが出来るか？』を考え始めた。そして色々と言わう方法し

か思いつかなくなった頃

「千雨、話がある」

伊達師範が真剣な表情で話しかけてきた。呼ばれて道場の方に行ってみると、全員が整列して待っていた。

何人かはニヤニヤしていたり、必死に笑いを堪えていたので、その連中を『いつかぶっ。すリスト』に加えながら全員の真ん中に正座した。

千雨の心中を察したのか、頬を弛ませながら伊達は爆弾発言をしました。

「千雨よ、俺達は此处を離れる事にした」

突然の宣告に、千雨の頭は真っ白になった。その発言の意味が少しづつ染込んできた位に、伊達は話しを続けた。

「元々この道場は半分暇つぶしのつもりだった。そこに千雨、お前がやってきた」

伊達は千雨と始めて会った時を思い出していた。

「正直一日持たんだろうと思っていたのだが、お前は俺の想像を超えて成長していった。そうすると色々欲が出てくる」

伊達は周りを見渡してから満足げに言った。

「お前が何処まで強くなれるか見てみたい、とな」

女に言う台詞じゃねえよな、と思いつつ千雨は続きを聞いていた。

「此処にいる沢山の戦士から技や教えを受け、結果的には百人毒凶を最年少、最短記録で達成した。」

そりゃ不意打ちで半分を文字道理『吹っ飛ばした』んだから最短記録にはなるだろうよ……

「見事だ長谷川千雨、もう教える事はない。これからは長谷川流魔体術の創始者として精進するように」

すげえ……こんな名前よく堂々と言えたもんだ。すげえぞ私……ん？

千雨はふと疑問に思った事を聞いた。

「一寸待ってくれ伊達師範、それだけだと『私が卒業』という意味は判るが『皆が居なくなる』理由が判らない」

千雨の質問に『ああ、そんな事か』という表情で答えた。

「前々から続いていた抗争にキリがついたから、本拠地をアチラのシマに移す事にした。剣にも頼んだから後処理がすんなり終わってしまったんだよ」

「総理大臣ナニやってんだ……」千雨は頭を抱えた。

その日の内にトラックがやって来て、荷物をどんどん積み込み、夕方には出発の運びとなった。

伊達からは餞別代りに蛇轡槍をもらった。少し涙腺が緩みそうになったが、表筋を総動員して笑顔で「師匠、お世話になりました」と深々とお辞儀をした。その時に雨粒のようなものが落ちたが誰も何も言わなかった。

伊達は「じゃあな達者でな」とだけ言い、他の連中も一言一言挨拶をかわし出発していった。最後に残ったのは虎丸、田沢、松尾、極小路の四人だった。彼等は今まで通り会社を経営する為、住所は変わらないらしい。極小路とはパソコンを融通してもらった約束なので、丁寧に挨拶して別れた。残りの3人は一緒に帰るらしく、色々と最後まで喋っていた。

「虎丸、何かあったら金貸せよ」

とても小学生らしくない台詞を吐く千雨。

「何言つてやがる、担保がなきゃあ駄目だっつーの」

「担保は…… テメエの命だよ」

千雨の地を這うような声を聞いた松尾は

「やばいぞ虎丸、ありゃマジでやる気じゃあ……」

「な、何ビビッてやがる。力、カ力……」

一寸脅し過ぎかな、と思った千雨は、迎いの車に乗った3人に拳

を突き出した。三人も同じく拳を突き出し挨拶をかわす。最後虎丸に色々言いたいことがあったけど、無難に「じゃあな、元気でな」と言った。虎丸の「お前の方こそ身体に気をつけるよ。あんなくせ……」という返事に、マッハパンチをぶちかましたとしても誰が千雨を責められるだろう。

全員を見送った千雨はため息を吐きながらこの二年を振り返った。

「まさに嵐のような連中だったな……思い出したくねえ事が多すぎだぜ」

そういう千雨の表情は微かに綻んでいた……彼女は否定するだろうが。

その証拠に修行によって彼女のソウルジェムは一切濁らなかった。彼女自身、暫くは認めなかったが、ずっと独りで戦ってきた佐倉杏子にとって『集団でバカをやる』という騒がしい日々は、心の何処かで夢見ていたものだった。

後日この3年間で『かけがえの無い3年間』と供述している。事実この二年間が無かったら、この後の絶望に押し潰されていただろうと。

「さて、そろそろ魔女か魔獣か知らないが、狩りを始めないとな……」

そう、この世界には魔女も魔獣も存在しない事、それでいて怪異は存在するという事に……

第2話

もう何がなんだか分からない

不愉快な表現あり（後書き）

魁！！男塾の後日談としては複数の説を参考にしました。ご了承ください。先の注意事項の内容を理解して尚、精神的苦痛を感じた方は、申し訳ないですが次の言葉を胸に刻み強く生きて下さい。

「認識の相違から生じた（ry」

第3話

特技は『マッハ・パンチ』とありますが？

とある中学校、入学前の面談において「特技はなんですか？」という質問に眼鏡をかけた少女は「……………特にありません」と答えた。彼女の心情を正確に表現すると『色々思いつくけど槍術とか暗殺拳とか、どれもこれもヤヴァいので言えません』となる。

少し前の彼女なら「外で遊んだり、スポーツをするのが得意です」と答えただろうが、もうそんな元気はない。彼女の座右の銘は「生涯之省エネモード」となったからだ……………

道場が畳まれてから、千雨は毎晩街に繰り出した。魔法少女として狩るべきモノを探す為に、そしてパワーアップした自分の力を試す為に。

だが一週間を過ぎた辺りから徐々に焦りが出てきた——獲物が見つからないからだ。一ヶ月過ぎた辺りから危機感を覚え、週一で大都市にも足を伸ばした。交通費と間食代を浪費したただだった……………

千雨は自宅でプリングスをチマチマと食いながら——流石に筒食いは出来ない——『これから』について再度考えていた。

今の状況をアメコミ的に表現すると『エネルギー残量を把握できるスポン』であろう。エネルギーに上限があり、無くなれば即バットエンド。まああそこまでバトルな日々を送らなくていい分、気は楽だ。

だが逆に燃料計がある分、心理的にブレーキがかかってしまう。もうこれ以上増えることは無い、減る一方なのだから。

元々慎重でネガティブな処があるので実質魔法は使用不可となるう。

この時千雨は、自身の身体について新たに気付いた事がある——成長期なので身長体重が育ってはいるのだが、間食が増えた分は力ウントされていないような気がする——つまり人としての成長ではない？ ソウルジェムがカモフラージュとして身体を發育させているのではないのか？ 試しに脂っこいお菓子を食べ続けても、ウエストの変化は無かった——この事をクラスメートに話すと、次の日からばぶられたが——この事実千雨は戦慄した。

自分は妊娠出来るのか？ 人間らしく成長し老化するのだろうか？ もし結婚すれば秘密を隠し通せるのか？ そして寿命というものがあるのか……

「畜生、本当にゾンビになっちまったのかよ……」

ふと、美樹さやかの泣いている姿が頭に浮かんた。

「確かに泣きたい気分だよ。このままじゃあお局様エンドか、結婚しても石女エンドかもしれない……」

……だが彼女は美樹さやかよりもリアリストだった、図太かった。

「同窓会とかで『え〜長谷川さんまだ独身だったの〜 気楽で羨ましいわ〜』って上から目線で言われるのかよ……まあ同窓会に呼ばれる程、友達付き合いはして無かったから……問題ねえか！」

美樹さやかなら即ソウルジェムが濁る位のショッキングな事実も、今の千雨なら心が荒む位で収まっている。猛虎流を習得した成果が早くも出てきたようだ……本人は絶対に認めないだろうが……

流石はHRで『誰か長谷川さんと友達になつてあげようよ』が議題になっただけの事はある。其の時の千雨の反論は、今でも伝説になっている。

「ちがうもん！ 個人として行動しても、結果としてのチームプレーを心がけているもん！ ただのすたんどあるーんこんぷれつくすだもん！！」

閑話休題

千雨は今後の人生設計を、再構成する必要に迫られた。今までは狩り優先だったので、自由時間の多い地元の中学校を目標していたが、狩りが出来ない以上、新たな『生きがい』を探す必要がある。

これまでは彼女の中の《佐倉杏子》だった部分が、生き急いでいるかの如く突き進んでいた。だがもうこれからは《長谷川千雨》としての平凡な人生を求めてもいいんじゃないか？ そう考えた千雨の結論は《麻帆良学園》だった。

カオスでリベラル（思想ではない）でアナキーであり、レベルが高い。自分の可能性を探すにはピッタリだと判断した。おまけに家から遠く寮生活になるのもプラス要因だ。自立心を養うことも出来る……決して学校で奇異な目で見られることは関係ない、街中でチンピラに『姐さん』呼ばわりされてる事も関係ない……

この事を両親と相談したら、2人とも同意してくれた。娘の交友

関係の狭さと歪さに頭を悩ませていたようで、寮生活にも賛成だった。元々勉強は出来た方だったので、2学期を受験勉強に費やせば、問題ないレベルまで上がっていった。

結果、試験と面談を無事クリアし、千雨は晴れて麻帆良学園本校女子中等学校に入学出来た。「これからは普通の長谷川に戻ります」
こうt w i t t e rに書きたくなる位喜んでいた。

「ふう 身辺調査があつたら、どうやって口封じするか悩んでいたが、杞憂だったな」

合格通知が届いた第一声がコレな現状、普通までの道のりはかなり遠そうではあるが。

麻帆良学園入学式終了後、両親とは写真をとってから別れた。泣いて喜んでいる両親に照れながらも、千雨は学園全体に漂う異様さに慄いていた。試験も面談も学園の敷地外だったし、下見もしていなかった……その事を後悔しつつ自分のクラスに向かった。

「この結界、魔女のものとは違う……外部から隔離している様でもあるし、意識を微かに誘導している様でもある……おまけにヤバそうな先生がいるし、学園長は魔女並みの容貌だし……」

ここは危険だ。千雨の本能はそう叫んでいた。魔法少女としての経験が即時転進と警鐘している。入学式当日にここから出る方法を必死で模索するも、今の彼女は一つしか案が浮かばない。

「ここで二、三十人病院送りにすれば、退学出来るんだろうけど……」

ついさつき別れた両親の事を思うと、躊躇してしまう。真に不本意ながら解決策は見つからず現状を保留する事にした。

「最近一時保留てことが多いな。何とかしねえとな、このままだとアカギに負けて指潰されちまうぜ……」

相変わらず中学一年らしからぬ発想だ。

ヤバイ。一年A組ヤバイ。マジでヤバイ。先ず担任がヤバイ。というか無精髭で入学式やクラス担任とかマジありえない。おまけに漂う気配が超ヤバイ。こいつ塾長とタイマンできるんじゃないかと思える位ヤバイ。

次にクラスメイト、こいつ等マジヤバイ。先ず統一感がない。

身長差がヤバイ。下は幼稚園から上はBBAがマジありえない。

板■友■の公開処刑なんか目じゃない。おまいらは離島の分校かと、矢■真理の結婚記者会見かと言いたい、声を大にして言いたい。

次に人種がヤバイ。留学生ヤバイ特に金髪ロリが激ヤバイ。人間のカテゴリーじゃないのが明らかで、どうみても天災レベルです『舞台装置の魔女』レベルです本当に（ry ついでに隣にいるロボがヤバイ。何がヤバイってデザインがヤバイ。どうみてもセリオっぽいのが減点だ。入学式だぞ、初顔合わせだぞ、そこはマルチをもってこいと言いたい。小一時間問い詰めたい。

中国人がヤバイ。古って奴、かなりデキル。『油断したらアタシでも危ない』レベルなのは確かだ。だがそれ以上に超って奴がマジヤバイ。漂ってくる雰囲気超ヤバイ（超だけにな！）こいつは

常に隠し玉の二つ三つもっているタイプだ。暁美ほむらのような静かなる狂気すら感じられる。こいつが何かしでかしたら即逃げた方がいいだろう……

最後に人外っぽい奴等がヤバイ。サイドテールの奴がヤバイ。何がヤバイって普通に段平を持ち歩いているのがヤバイ。そんなのが許されるのは『コーターマかりとおる！』か『Muv-Luv』『天上下』位だぞと言いたい。こいつからも暁美ほむらのような狂気を感じる。只一つの事を願い、あらゆる犠牲を問わない狂気が龍宮つてのがヤバイ。おまい偽名だろ！年齢詐称だろ！と問いたい。おまけに漂ってくる硝煙と死臭がヤバイ。むせる。銀■万丈のナレーションが聞こえてきそうでヤバイ。

ピエロっぽい奴が最高にヤバイ。何者が判らないのがヤバイ。『魔法少女』つぽく『魔女』つぽく、おまけに『キュウベい』つぽくもある。色んな意味でケンカ吹っかけてたくなるのがヤバイ。それをあっさりと見抜かれ、「……？」って言いたげな表情で振り向かれたのが激ヤバである。

まあだから、おまいらも麻帆良に来るときは気をつけるんだな、と言いたい。誰かに言いたい……

ああ だが……神がいた ここに神がいた 《まどか》 間違いない《まどか》だ。 四葉五月と名乗ろうがお前は《まどか》だよ……その髪型、輪郭、体型 どう見てもまどかだ！ 髪の色は違うが、黒髪だったって可笑しくない ここは日本なんだから……ああ《まどか》あたしを導いてくれ！！

——数日後、千雨は彼女が全くの別人である事を知り血涙を流したが、その料理の腕前と人間性を知り、改めてネ申認定したそうな

そんな事を考えている千雨だが『日本だから忍者いたっておかしくねえだろ』と考え問題視しない位には常識から外れていた。おまけに

チュポッ

「長谷川千雨です。特技とか趣味は……ありません。よろしく御願います」

自己紹介する為、口から出したチュッパチャップスを再度啜え、長谷川千雨は腰を下ろした。一応は授業中なのに平然と飴を舐めている彼女を見て、皆は「変な奴だ」と思ったそう。

日本人の自己紹介が終わり、留学生の番になった時、本日最大の爆弾が落とされた。

「ワタシは古菲アルネ。特技はクンフーアル。日本には修行と有る人物を探しにきたアルヨ」

「古菲さんは、どなたを探しに来られたのですか？」

委員長らしく雪広あやかが質問すると

「それが……顔も名前も判らないアルネ」

「そんなん探されへんのと違うかなあ」

近衛木乃香が尋ねる。（千雨はなぜかこの娘とはシンパシーを感じている）

「そうアルヨ……困ってるアル。判っているのは年が近い女の子で、
喊烈武道大会という大会で見事100人斬りを達成した事位アル」

がりっ！

大きな音がしたので皆が周りを見渡すと、どうやら長谷川千雨が
飴を？み砕いた音らしい。

皆の視線を感じた千雨は気まずそうに残ったバーをしまい、新し
く取り出したチュッパチャップスを舐め始めた。よく見なければわ
からないが、動揺しているのか虚ろな目をしていた。

まだ食うのかよ、と突っ込みたい者もいたが、それよりも古の話
に興味津々であり、古に話しを続けるよう促した。

「どうやら『拳聖』という称号を、2回連続で日本人に取られて中
国武術の関係者皆カンカンアルネ。ソイツ倒したら500万円の賞
金出るアルヨ！」

その賞金額に驚いて騒ぎ出す者多数、興味なさげな顔をしている
者少数。そして、冷や汗をダラダラと流している者 一人。

「女子に『100人斬り』なんてセクハラだろ……」

こう呟くのが精一杯だった。

第3話

特技は『マッハ・パンチ』とありますが？（後書き）

PS 今までのエンディングテーマは「また あした」でお送り
いたしました

第4話

千雨が飲む、麻帆良の珈琲は苦い

それは寮の食堂で起こった。これから始まる寮生活への不安を払拭させる為、ささやかながらパーティーが開かれた。各クラス其々集まりお菓子やジュースが振舞われていた。

一年A組も、最初は会話もギクシャクしていたが、徐々に持ち前の押しの強さで打ち解けていった。そうなると暴走していくのがこのクラスだ。

鳴滝姉妹のおふざけがお菓子の投げ合いになった時、ぶち切れた人間がいた。当然、彼女である。

「食い物を粗末に扱うんじゃないー!!」

千雨は殺すぞ　　と言いつうになったが、それは何とか飲み込んだ。賑やかな空気は霧散し、時が凍りついたような静粛に包まれた。

怒鳴られた鳴滝姉妹は完全にびびってしまい、涙目になっている。危険な空気を察したのか、那波が鳴滝姉妹を宥める形で割って入ってきてくれた。

那波は非難がましい視線を向けてきたが、千雨にそれを気にする余裕はなかった。怯えた泣き顔を見て、《佐倉杏子》の過去……妹とゆまの事を思い出し動揺してしまったからだ。頭から血の気が引いていき、言い訳しようにも上手く喋れない。

この状態でアウェイの空気は仕方ない。正論を吐くにもやり方、
というものがある。今何を言っても、何をやっても逆効果だろうから、
三十六計逃げるにしかず——千雨は戦略的転進を決定した。

「わりい、一寸疲れているみたいだわ……部屋で休んでくるから、
後は皆で楽しんでくれ」

そう言い残し、千雨は逃げるように自室に戻っていった。

「ちょ、一寸長谷川さんってば！」神楽坂明日菜が呼び留めようと
するが、千雨には届かなかった。

腫れ物が無くなった事によって、会場の空気は緩やかに融解して
いった。とはいえ会話の内容は当然先程の騒動がメインになる。

「いやーすげー迫力だったね。もーなんつーかカミナリ親父？」

「長谷川家 家訓！——とか言いながらジャイアントスイングとか？
マジうける……」

「同情するなら……麦を食え？」

「佐々木さん、それを言うなら『金をくれ』じゃあ……」

何気に酷い奴等である。

頃合をみて雪広あやかは「はいはい、皆さん少し落ち着きましょう。
確かに長谷川さんの言い方は少し……いえかなり荒っぽいもの

でしたが、間違ったことは言っておりませんわ」とその場を締めようとした。

一拍間を明け、神楽坂明日菜の方に一瞬視線を向けて「周りの方々がしつかりと教育されたのでしょね」と続けた。「ご両親に」と言いそうになったのを、長年の腐れ縁に気を使い訂正しつつ話す彼女は、当にリーダーたる資質を持っているといえよう。

それを肌で察しながらもアスナは照れ隠しに悪態をつく……この2人の口喧嘩によって場の空気は完全に回復し、この場から消えた者のことは忘れ去られていった。

千雨は独り、自室でやさぐれていた。20km先に落ちた針の音を聞き分けられる彼女にとって、食堂の会話など筒抜けである。馬鹿言っている奴等を『何時かシメるリスト』に記入しつつ、雪広達のフォローには感謝していた……その優しさが逆に千雨を痛めつける事になるのだが……

「ふう……もつと積極的に話しかけていれば良かったかなあ……『今日はいい天気ですね』とか『外は暑いですね』とか『髪切った?』とかさ……」

とりあえず彼女が立てた『中学校で友達何人かできるかな?』作戦は大幅な変更を余儀なくされた。まあそもそも『ぼっちでいる処に、誰かが声を掛けてきて、何と無くグループの輪に入れてもらう』というドクトリン自体「女子中学生なめるな」と小一時間説教コースである。某スーフアミで例えると「あんた春麗ね。あたし待ちガイル」となる。これで友達になれという事自体が間違いであろう。

千雨は明日以降の周りが、どう振舞うかを考え少し鬱になった。遠めで自分を見ている視線、一挙手一投足を探る視線……そして聞こえないように喋っていても丸聞こえなヒソヒソ話……ストレスマッハである。

尊敬する吉良吉影師匠に習い、三位狙いだつたが、五位狙いにしておかないと大変な事になりそうだ。

「あー明日学校行きたくねー　ゼッテー浮きまくりだよなあ……」

千雨は、会場から持ち帰った金鰐とゴルフを食べつつ、窓の外を見て黄昏ていた。

「いつその事、スケ番キャラで売り出すとか……いや、どう考えても表番で噛ませ犬ポジになりそうだな」ふ、私ごときに梃子搦るようでは……あの御方には……ガク」って……そうなれば裏番はエヴァンジェリンか龍宮か近衛ってところか……ん？」

八方塞な現状から現実逃避していた千雨は、窓の向こう側で『何か』が起こっているのを察知した。

眼前の森の中で、何かが揺れているのが見える。金属が打ち合う音、銃声音が微かに聞こえてくる。間違いない——戦場音楽だ。」に連れて行かれた某国で、耳が麻痺する位聞いた音だ……畜生。ペンタゴンに行った時、憶えているよ……

本来なら、余計なトラブルに首を突っ込まないのが心情なのだが、ムシヤクシャしていた事と、ここの謎を調べてみたかった事もあり「千雨、敢えて火中の栗を拾うか（キリッ）」という運びとなった。

塾生っぽい長ランを羽織り、パンチラ防止のスパッツを穿き、おやつをポケットに入れて

「長谷川流魔体術、バラン拳！」

と叫びつつ窓からジャンプした。この技は羅刹の技が元になっているが「IMEウゼー　どんだけ」と叫んで改名した。流石に羅刹には内緒であるが……

人間離れたジャンプ力で木々の間を飛び交い、目にも止まらず、にもかかわらず音もなく、目的地まで進んでいった。

戦場が視界に入り、気配を消し静かに観察していると、色々と驚愕の事実が明らかになっていった。

戦っているのはウチの先生、生徒達だ。何と無く顔と制服に見覚えがある。千雨と同じ麻帆良本校の制服まであった。戦い方も特殊で、ゲームの魔法っぽいものをバンバン撃ちまくり、必殺技っぽいのをガンガン揮っていた。そして戦っている相手は、RPG的に言うところの『モンスター』と言わなければならない奴等——土地柄なのか矢鱈と和風なデザインが多かったが——がこれでもか、という位うじゃうじゃと

だがそれ以上に驚いたのが戦っている奴等の中に見覚えのある、どころかクラスメイトが2人いたことだ。

（段平サイドテール）桜咲刹那と（年齢詐称戦隊　鯖読みブラッ
ク）龍宮真名

桜咲刹那はそのまんま日本刀でテイルズ顔負けのエフェクトをかまし、龍宮はガンカタで無双技をゲージ気にせず使いまくっていた。

「エヴァンジェリンがここにいないってことは、奴が裏番キャラなのか？」

何気に真実に辿り着いた千雨は、倒されていくモンスターに目を向け、嘆くように呟いた。

「やはりグリーンフィードは落とさない……か」

そう倒されたモンスターは、全て崩壊するように消失していった——何も残さず

戦闘は20分程で終了した。学校側の犠牲者はゼロである——千雨は目の前の戦闘から色々な情報を手に入れた。

先ず『魔法』が存在する。しかも自分達と違い、システムチックでフォーマットがあるような『魔法』だ。これは『魔法』というものが『ある程度』社会に浸透していて、組織的に教育、運営されてきたことを意味する——組織——今の自分にとってこれ程厄介なものはない。

個々の能力ならさほど問題にならない。目の前の連中も、龍宮以外なら魔法全開でぶつかれば勝てるだろう。だがそれは一過性のモノでしかない。数で押されれば負ける、絶対負ける、必敗である。

しかもどうやら連中の魔力は『MMORPGの魔力の回復』だとすれば、自分は『旧式のコンシューマーのRPG、しかも宿屋は閉店中』である。

「納得いかねえ……」

ギリツ 齒を食い縛りながら千雨は一瞬、彼等を嫉妬した。この世界が理不尽なまでに優遇された、楽園のような処に感じた為だ。自分達の努力や犠牲を「効率悪いよねえ」と一蹴された気分だ。

それと同時に自身の将来に恐怖した。自分が彼等にとっても異質な存在であると実感した。一般人にとっては同じでも、当事者にとつては同様に扱われたくない事がある。大阪人と京都人を「関西人」として括るようなものだ。

そして自分が『少数派』であることは確かだろう。だが問題は『どの程度の少数化』なのか、だ。

『たまに見かける』と『歴史上初めて』では扱いが違う。最悪『《チサメデバイス》を手に入れました』とか『鑑純夏in甲22号ハイブ』なんて事にも成りかねない。《佐倉杏子》としての経験から『初見の魔法関係者は信用しない』は心に刻み込まれていた。

「流石に触手はカンベンしてくれ……」

全員知っていると思うが、彼女は中学一年生である……

戦闘後の反省会でもしているのか、魔法生徒、先生達は一箇所に集まって話し合っていた。千雨が耳を澄まして情報を集めると

- ・この戦闘は新入生の顔見せも兼ねている
- ・このような戦闘はたまにある
- ・交代でパトロールしている
- ・一応、一般人には秘密。ばれると『オコジヨ』という何らかのペ

ナルティがある

・やはりエヴァンジェリンは学園の裏番

・TOPは学園長

・魔法には属性があり、呪文がある

こんな処だ。これらの情報を手した千雨は、有体について気が抜けた。自分が戦う必要性を全く感じなくなった。

化け物がいるが、正義の味方もいてくれる。これなら彼女自身が魂を懸けて戦う事はない、そうこれからは『（ちよっと）腕っ節のたつ女の子』として生きていけばいい。その為にも魔法少女であることは隠し通す必要があった。

「もう魔法は絶対に使わない」

そう彼女は誓った。

ミーティングが終わり、皆々この場所から離れていき、最後に残った龍宮と桜咲も身支度を始めた。

こいつらがいなくなってから帰ろうかな、と思った時、龍宮が振り返り、こう言った

「いるんだろ？ 降りてこいよ 長谷川千雨」

第5話

RIDE ON THE EDGE

「いるんだろ？ 降りてこいよ 長谷川千雨」

ばれた！！ 何故！？——体中の毛穴から汗が吹き出るのを感じながら、千雨はどう対応するか考えた。

向こうの様子を見てみると、龍宮はまっすぐこちらを見ている。場所も特定出来ているのだろう。桜咲の方は、よく判っていないように、龍宮のほうを不思議そうな顔で見ている。

しらばつくれるのはもう不可能、逃げれば要注意人物としてマークされかねない。ならばこれは新たな情報を得るチャンスと、開き直るしかない。

「覚悟をきめるか…… 虎穴に入らずんばコージィを得ず とも言っし」

そう言つと千雨は体術などお構いなしに飛び降りた。龍宮に『どの程度の実力か』を判らなくさせる為だ。

ドスン 千雨は大きな音をたてて、木々の間から姿を現した。

「なっ！！」動揺した桜咲は仕舞った野太刀を再び取り出し、構えながら叫んだ

「何故ここにいる！？ 答えろ！ 長谷川千雨！！」

しめた 千雨は心の中で叫んだ。 この情報戦が龍宮とのタイマ

ン勝負だったら、こちらが払うチップも馬鹿にならない。

極力此方からは話さず、向こうが焦れてくるのを待つつもりだったが、桜咲を間に入れることで、この場の流れをある程度コントロールできるだろう。どうやら龍宮はこの会話に入るつもりは無いらしく、黙ってこちらを見ている。

とりあえずはぐらかす為「いや……新観パーティーで一悶着あつてな、頭を冷やすつもりでぶらついていたら……」と話しを始める

「パーティーで……だと……貴様、お嬢様に何をした!!」

えー 何この子 会話が成り立たたねえ……

「答える!!」さらに追い討ちを懸ける桜咲に

「……お嬢様ってだれだよ?」千雨は冷静になる事を期待しつつ質問するが

「貴様に話す事など無い!」

だめだこいつ——何この狂犬—— 千雨は絶るような目で龍宮を見た。「何とかしてくれ」と。

龍宮は『やれやれ、仕方ないな』と言いたげな表情で桜咲を諷めた。その表情に千雨はムカついた。

「落ちて着け桜咲、近衛に何かあれば、お前にも連絡が来る筈だろう?」

「な！何を落ち着いているのですか龍宮！！　そもそも貴方が早く帰ろうとする私を引き止めて……」

「近衛なら同室の神楽坂と宜しくヤッテいたぞ」

龍宮のさり気無いアドバイスのおかげで、千雨はやっと《お嬢様》の正体を把握できた。そして桜咲を落ち着かせる為、知っている情報を披露した……言い方はかなりアレだが……

聞く人が聞けば逆上しかねないセリフなのだが、初心でネンネな桜咲は、文字通りにしか受け取らなかった。

「そ、そうか……それなら……まあ、いいんだ……」桜咲は顔を真っ赤にして俯いた。やべえこいつマジかわいい。

どうやら近衛の事がずっと心配だったが戦闘に参加する事となり、終了後早く帰ろうとしたのに龍宮に引き止められてしまい、そこにノコノコと怪しい奴（千雨）が現われ、そいつが『近衛がいた』処で一悶着起こした、と。うん、まあキレても仕方無いかと……つまり近衛〓まどか　桜咲〓ほむら　千雨〓QB　と考えると、撃ち殺されなかっただけマシだろう。

千雨はどうか《近衛〓上条　桜咲〓さやか》にならないよう心から祈る。

どうでもいい処で要らぬ労力を使っしまい、千雨は「やれやれだぜ」と呟きたい気分になった。とりあえず桜咲の弱点を把握できたぜ、と思った時に龍宮から質問があった。

「ところで長谷川、なんでこんな処に来たんだ？」

「ん？ ああこの辺でドンパチやってるのが聞こえ……」

千雨は迂闊にもあつさり答えてしまった。

——やられた！ 馬鹿かアタシ！ つい昔を思い出して油断してしまっただのか？—— 龍宮自身こんなにもあつさり引っ掛かるとは思わなかったようで「なにこのウロヤケヌマ」と言いたげな顔をしていた。

「馬鹿な！ 人避けの魔法には防音効果もあるのに、どうやって聞こえたのですか！？」

……ここにもウロヤケヌマが一人……貴重な情報をありがとう。
—— 龍宮の顔も若干引き攣っていた。

知的な情報争奪戦が始まる筈だったのだが……どうしてこうなった。

龍宮の方もこのグダグダ感は予想外だったらしく、ヤケクソになつて尋問を始めた。『グッドコップ・バッドコップ』でいう処の超バッドコップと化した。

「吐け」

「ざっくりすぎるぞ！ もっとジャブ撃つ様にトラップをしかけながら、少しづつ外堀を埋めろよ！」

龍宮の雑な問い掛けに、何故か長谷川が採点とアドバイスしつつ突っ込む、というとんでもなくカオスな遣り取りが始まった。

「アンブツシュにクレイモア!？」

「そのトラップじゃねーよ！ 子供かよ！ 古畑見ろよ！コロンボ見ろよ!！」

「貴様には黙秘する権利はない。供述はこちらの都合で採用される……」

「非道え！ 弁護士さんこいつです!！」

「さあ、吐け!! 今考えている事全て話せ!」

「今か?……埼玉県の県庁所在地は池袋だよな、とか 戦国■TVのモスクワは夏どうしているのかな? とか……」

「よし、桜咲、殺れ、無礼講だ」

「両方とも、落ち着いてください……」

結果的に桜咲刹那がグッドコップと化していた。

「って言うか、こちらら只の一般人だと言ってるだろーが! 何だよこの扱いは!! どうしろって言っただよ! 『自分が怪しくない事を』証明しろとも言っつか!!!」

いけしゃあしゃあと言っただのける千雨に、これまた いけしゃあしゃあと龍宮が返した。

「いや、別にお前の正体なんぞもつどうでもいい」

「……………は？」

「元々この学園には出自不明、正体不明の輩がごまんといるのでな。一々気にしておれん」

ぶつちやけ過ぎだろう、と思いつつ千雨は理不尽な扱いをつける訳を尋ねた。

「……………じゃあこの圧迫面接に何の意味があるんだ？」

「『おまえがどういう奴なのか？』を調べたかったんだよ。すぐに力に訴えてくる奴かどうか、をな。別にこのグダグダ感にイラついていたとか、お前の見事なツツコミに惚れ惚れしていたとか、そういう事は一切ない」

あるのかよ…………

「後は実力の程だが……………まあそれは」

そう言いつつ龍宮は振り向き、自然な感じで銃口を向けた。

「これで判断する」

パスッ

銃口を向けられた瞬間、ああやっぱりと千雨は思った。鉄火場

に身を置いている以上「敵か味方か」「どれ位強いかな」は避けては通れぬ道である。『とりあえず敵ではない』とされたのは僥倖だ。後は『実力をバラさず、舐められず』を通すだけだ。お互い実力の底が見えない間は、対等でいられるのだから……

「残念だったな龍宮、アタシは銃口を向けられるのは慣れてんだよ」

千雨は心の中でそう叫び、どう打破するか一瞬で考察した。

銃口——バレルにライフリングなし、ABS樹脂の中央に金色の環を目視。火花なし——結論 これはエアガンである。殺傷能力はかなり低い。

弾丸——充分目視可能、形状は球状、口径はおそらく6mm、弾丸に魔法的な加工は……なし——結論 負傷する恐れなし。よって身体を反応する必要はない。堂々と待ち構えよう。

命中箇所——胸部中央、問題な……ヤバイ！ ここは……だが……
……畜生、魔女のバアサンに呪われたか！

パキッ

渴いた音と共にBB弾が命中した。この間わずか0.1秒……千雨は内心の動揺を隠し、ドヤ顔で龍宮を見つめた。

この反応に龍宮は満足していた。彼女は千雨の思考と判断をほぼ理解しており「千雨が力を見せびらかすタイプ」ではない事を確認できたからだ。

「流石は拳聖、という処……かな？」

この発言に、千雨は眉を顰めた。この判り易い反応に龍宮は頬を緩め、ネタばらしを始めた。

「やはりそうだったか、昼間の態度からまさか？と思いカマを懸けたんだが、ビンゴだったようだな」

千雨の視線は更に鋭くなった。口元が歪んでいるのは、己の迂闊さを嘲笑しているのだろう。

ちなみに桜咲はこの間『早く帰ろうよ』という顔をして、ずっとふてくされていた……

「それで」

龍宮は総括するように話しを進めた。

「長谷川千雨、お前は どうしたいんだ？」

そのものズバリの質問に、長谷川は正直に答える。あえて言うなら、と

「孤独に歩め。悪をなさず、求める処は少なく……」

「林の中の象のように……か」

千雨の独白に龍宮が続いて喋った。千雨は目線でそれを肯定した。

「中途半端な小物が粹がっても笑い者になるだけさ……ここじゃあ

龍宮、アンタレベルがそこそこいる上、もつとヤバイ裏番が控えているんだろ？」

千雨の質問に龍宮は表情を変えず答えた。

「ああ、超特大級のコワイ魔女がな」

お前も検討ついてるんだろう？ という龍宮からの問い掛けに、千雨は頷いた。流石に《魔女》という言葉が気になったが、この場では聞き流す。

「だから厄介事には首を突っ込まず、学生生活をエンジョイして遊んだり恋愛したり、平和裏に過ごしたいんだよ」

そして千雨は嘘偽り無い本音を吐いた。これは「あたしゃ戦いませんよ」という意味で極論として言えば

「あいつ（龍宮）もこいつ（桜咲）も俺（千雨）の盾になればいい……」

という事なのだが、両名ともその辺は覚悟の上なのか文句はなさそうだった。

「成る程、まあ此方としては其れでも構わないのだが……」何を！
と言いたげな桜咲を無視し、龍宮はこう続けた

「お前のクビに掛かっている懸賞金も、実際は古か超じゃないと意味がなさそうだし……」

「判らんぞ、名前を『龍 真名』とかにすれば誤魔化せるんじゃないな

いか？」

独白する龍宮に対し、悪魔の囁きで揺さぶりを掛けようとした千雨だが

「いや、やめておく。また身分偽造するのも面倒だしな」

「『また』って何だよ……」

千雨のほうがドン引きである。

「こちらの仕事を邪魔しない限り、お互いに『知らぬ存ぜぬ』でいい……これでもいいか？」

龍宮の出した条件に千雨は頷いた——とはいえタダで見逃す気は（龍宮には）無いようだ——

「だが、流石にタダで、というわけにはいかないな」

千雨はこの発言に対する返答に窮していた。龍宮の言った事は『其方もなにか出せ』という意味だ。モノなり金なり……情報なり……

『情報を出すか否か、もし出さないのなら……だが、しかし……』

数秒ほど頭を抱えていた千雨だったが、やがて意を決し、胸元から取り出した何かを2人に差出して、こう言った。

「……食つかい？」

それはオヤツとして持ってきたゴルフであった。

「……」

「……」

これが龍宮と桜咲の反応であつた。『ひよつとしてギャグで言っているのか?』と思つたが、千雨の表情から察すると苦慮の末の決断のようだ。

「しかし折角の銘菓も、粉々になつてしまつと……」

文句を言いながらもパリパリ食べている桜咲に対して

「悪いな、問答無用でエアガン打ち込んできた馬鹿がいたんでね」

千雨はそう言つてジロリと龍宮を睨んだ。龍宮の方は何処吹く風で『腰のポケットの分も出せよ』と言いたげに人差し指をクイツと動かしていた。因みにこの女、桜咲が食べて何ともないのを確認してから、ゴルフを口にした。かなり酷い女である。

「食い意地のはつた奴だぜ……全く」そう言いつつ、隠し持つていた金鎧も差し出した。龍宮はそれを受け取り「これで契約は成立、だな」と言つた。

「ああ、だからこの件はこれで終了、ということ……じゃ」

そう別れの挨拶をして、千雨は龍宮達に背を向けた。そしてスウツと宙に浮くように木の枝に飛び移り、猿よりも速く、ムササビよりも華麗に枝を飛びかつて帰っていく。だが動きからは焦りとか憤

りとかが垣間見え、折角の技のキレが台無しであった。

「龍宮……貴女があんなカツ上げ紛いの事をするから……」

自分も金鰐を食べつつ、桜咲は龍宮をジト目で睨んだ。

「いや、最初にゴルフを差し出した辺りから、既に動揺していたな……そんなに菓子が大事だったのか？ それとも……」我々との会話でトラウマでも刺激されたか？ 後半の呟きは桜咲の耳に入らなかった。

「まあ、もうそれは良いとして……本当に上には黙っておくのですか？」

桜咲はやや不安げに龍宮に尋ねた。下手をすると自分もオコジョになるのだから心配なのは仕方ない。

「まあ約束した事だからな、黙っておくよ……私は、な」

ヒドイ 桜咲はこう思ったが、龍宮は平然と言つてのけた。

「ちゃんと桜咲にも確認しなかった長谷川が悪い。まああの去り際から察すると、そんな余裕は無さそうだったがな。それに何かあっても我々に責任は無いしな」

何故？ という顔をしている桜咲に対し

「この場合、責任を問われるのは『長谷川に気付けなかった』魔法先生方だよ」

あつ　と驚いている桜咲の顔を見つつ龍宮は話を続けた。

「それでも何か言ってきたら、こう言い返せばいい『我々2人だけでは身の危険を感じたので、大人しく従っていた』とね」

「確かにそこまで言えば、責任を問われる事は無いと思いますが、一般人相手に……」桜咲はそれ以上何も言わなかったが、呆れた顔でこう訴えていた——そこまで卑屈にならなくても、と。

「一般人……ね」

龍宮は先程までの出来事を思い出す——魔物達との戦闘中に感じたのは一瞬だけ露になった気配……怒りの感情……戦場での様々な経験が無ければ、見過ごしていたのは間違いない。そして魔眼が無ければ誰か判らなかつただろう……それ程高度な隠行術だった。おまけに武術の腕もたつらしい……だが、龍宮は《長谷川千雨》にそれだけではない《何か》を感じていた。

何より《長谷川千雨》は矛盾していた。魔法について知らない筈なのに、魔法を見て驚いていない。魔物を見ても動揺していない。慎重かと思えば短絡的である。知的に解決しようとしても、ボ口を出し結局力技で押し通す。もし魔法について知識があるとするれば、ここ麻帆良に來た意味が判らない——魔法に関わりたいのか？　関わりたくないのか？　全てが演技だとすると、何一つ意味がある行動に繋がらない……

「まあ、それはともかく……結局、長谷川の奴から魔力はまだしも、気すら感知できなかったな」

龍宮は、魔眼を使っても判明できなかった秘密について考え

「まるで死人のような奴だな」

そう結論づけた。

千雨は帰路の途中、自分の中に湧き上がってきた、奔流の如き感情に戸惑っていた。

抑えきれぬ感情に振り回され、冷静な判断が出来なくなり、口の中に苦味が広がる。逃げるようにあの場を去っていった。

「畜生……アタシは一体どうしたって言うんだ！」

彼女の中で何かが囁く 耳元で囁く 左耳に囁く『同じ人外同士、仲良くやろっ』と。

同じ様に何かが囁く 耳元で、右耳に囁く『こいつ等に心開くな』と。

《左耳》に応じようとすれば《右耳》から染みてくる。《右耳》に従おうとすれば《左耳》が大声で怒鳴る。

「カンベンしてくれよ……どうなってんだよ……どうすりゃいいんだよ！」

そうなった理由も答えも、今の彼女には見つけられなかった。

第6話

未だ木鶏たりえず

千雨の予想通り、翌日からストレスの溜まる日々が続いた。教室では腫れ物のように接せられ、時々教師達からも監視されている感じもした。おそらくあの時、桜咲に口止めできなかったのが原因だろう。

「まあ、しゃあねえか……」

千雨はもうその辺は達観していた。周りも気を使い、鳴滝姉妹との接点は最小限になっているので、騒動が再燃する可能性は低い。此の俚この事件は風化していくんだな、と思っていた……のだが、その流れに反逆する者が2人。

一人は朝倉和美。自称ジャーナリストの卵は千雨の物言いに何かを感じたらしい。曰く「親からの教育の賜物、というよりも実体験によるものっぽいのよねえ……」らしい。中々の洞察力をもっており、将来いいジャーナリストになれそうだ……出来ればもう少し取材対象にも気を回してほしいものだが。

だが千雨にとって朝倉はそれほど問題ではない。最悪鬱陶しい事になったとしても、翔穹操弾を使い公衆の面前で猛虎流させれば、もう二度と煩い事は出来ないだろう。そう、問題なのはもう一人の方だ。

「そやから、折角クラスメイトになったんやから、仲ようせなあかんやん」

昔の自分と同じような声で話しかける少女……もう一人の名前は《近衛木乃香》といった……

千雨は非常に困っていた。近衛木乃香をどう扱っていいのか判らなかつたからだ。

彼女が善意でやっている事は判る。こちらが現状に悩んでいるのは確かだ。だが、しかし、世の中には時間を懸けてじっくりと解決したい事がある。中学一年生にそれを理解しろと言うのも酷な話だ……

また、彼女だけでなく、その背後にいる奴もかなり厄介である……ご存知、桜咲刹那と言うのだが……

近衛が千雨に話しかける度に、刹那がガン飛ばしてくる。しかも野太刀の鯉口を切った状態で。千雨が木乃香を無視しようとすれば「何故無視する！」と怒りの視線を飛ばし、千雨が会話をしていれば「何故話す！」と嫉妬の視線を飛ばしてくる。

「一体どうしろと……」千雨は頭を抱える。最近では朝倉も嗅ぎ付けて『愛憎劇！？ 三角関係！？』とセンサーシヨナルな見出しが学級新聞の一面を飾るようになった。それに合わせて近衛も千雨を何かと構うようになり

「みんなと仲良くせんと、ウチが呪いかけるで」とか言い出した。

それに対し「魔法少女に呪いつて、ひどい罰ゲームだよな……」
誰にも聞こえないよう呟くしかなかった。

千雨としては色々と言いたいのだが、諸悪の根源（近衛）に怒鳴りこめば、殺し合いになりかねない。よって、諸悪の次席根源に全ての怒りをぶつける事にした。

「さくらざきいい！！ テメエ何考えてやがる！！ アタシにどうしろと言っんだ！！」

千雨は桜咲の部屋に乗り込み、腹に溜まっていた憤りをぶちかました。桜咲の方は申し訳なさそうに正座して聞いている。因みにルームメイトの龍宮は何処吹く風でライフルのバレル清掃をしていた。

桜咲の方も色々と言いたいようだが、自分のやっている事が理不尽であることは理解しているので、千雨の怒声を神妙な顔つきで受け止めていた。

「なんでアタシがこんな目に遭わなきゃならないんだ！？ こちらストレスで胃が痛くて、メシも碌に喉通りやしねえ！！」

千雨はカバンから取り出した魚肉ソーセージを齧りつつ、桜咲への文句を綴っていた。

「……」桜咲も流石に文句を言い返そうとしたが 千雨に「ああん！！」と竹■力のようなガンを飛ばされると大人しくならざるをえない。

「第一、近衛がアタシに構うのも八割方は、桜咲！ オマエにかまって欲しいからだろうが！」

桜咲がまだ気付いていない事実を、千雨は指摘した。

「な！！　そ、それは本当なのか！？」とかなり動揺した口調で桜咲は聞き返し、龍宮は「ほう……」と感心していた。

「っていつか龍宮！　知ってたんならルームメイトのオマエが指摘しろよ！」

さすがに桜咲が可哀相になった千雨は、龍宮に矛先を変えた。

「そういうプライベートな事に首は突っ込まない主義なのでな。変にしこりを残すと戦闘での連携に支障がでる」

龍宮は何一つ悪びれず、理路整然と答える。「くっ！！」その正論に千雨は、文句をつける事ができない。やっぱりこいつは苦手だと心底思った……とはいえ、やられっ放しというのも癪なので

「立派だね　大人だね　ヨッ！流石たつみやまなさんじゅうにさい」

とジャブを繰り出すと

パシュ！　パシュ！　パシュ！

三発のBB弾が飛んできた。

「龍宮！　テメエ食い物を的にすんじゃねえ！！　殺すぞ！」

どうやら持っている魚肉ソーセージ（二本目）が狙われたのだが、何とか空いていた左手で全弾防ぐことが出来た。BB弾が人差し指から小指の間に綺麗に収まっているのは、千雨の技量が卓越してい

る証だ。千雨はこの愚拳に怒りを露にし

ピキッ とBB弾を指の挟む力だけで砕いた。

龍宮はこの技量に感嘆し、千雨の評価を上方修正した。だが顔には出さず

「運が良かったな。実銃だったら蜂の巣になってたぞ」

「言ってる！」

一触即発の空気に反応したのは、部外者にされてしまった桜咲だった。

「お、落ち着いて下さい2人とも！今はそんな事で争っている場合ではないでしょう！」

「確かに。今重要なのは桜咲、オマエが近衛とどう向き合っていくか、だよな？」

龍宮のフリに桜咲は ううつ と唸りながら神妙に頷いた。それは桜咲が麻帆良に来て依頼、ずっと抱えていた課題だった。

「私は最初に言ったよな？『護衛対象から離れるなど愚行』だと」

ジリ と顔を寄せ龍宮は話しを続ける。千雨はこのやり取りに、龍宮なりの思いやりを感じた。流石に出汁にされたのはム力つくのだが。

「そ、それは判っているのだが……私などがお嬢様の周りにいても

……」モジモジしながら桜咲は小さく呟く。

「じゃあ代わりにアタシがついてやるよ」

という千雨の提案を

「汚らわしい！ お嬢様に近寄るな！ この野良犬が！！」

とんでもなくヒドイ言い方であるが、千雨は気にする様子もなく

「でもなあ……アタシはどうでもいいんだけど、木乃香の方が離してくれねえんだよなあ……（チラッ）」

千雨はクケケケケと下品な嗤いで桜咲を挑発する。その顔はどう見ても 赤■健というより、どお■まんの作画にしか見えない。顔を真っ赤にして睨んでいる桜咲にトドメを刺す為、意識的に野中っぽい声で喋った。

「もう、せっちゃんなんかボロクズのように捨ててやるわ」

「……………！！ コ、コ、コ、コロスー……！！」

完全に逆上した桜咲は血走った目で太刀を抜き、千雨に斬りかかった。

「甘いぞ桜咲『長谷川流魔体術奥義 拳止鄭』どうだ」

桜咲の斬撃を両拳で挟み、千雨は舌をペロペロ出しながら嘲つ。桜咲の表情が消えていき、その分殺気が増大していく中

「やめろ２人共……長谷川も何にイラついているのか知らないが、挑発するな。桜咲も落ち着け、ソレを斬っても何にもならんぞ」

龍宮は厳しい口調で双方を諫めた。長谷川は舌打ちしつつ、拳を太刀から離し、ゆっくりと桜咲から距離をとった。そして桜咲の方は……

「うつつ……このちゃんに……でも……いっしょにいたいのに……っひぐ」

マジ泣きしていた。

『おい、これどうすんだよ』

『知らん、お前が変に挑発するから……』

『しかし、からかい甲斐があるのか無いのかわかんねえな……』

『確信犯だったという事か？ 死ねばいいのに』

龍宮と長谷川は互いに視線で会話しつつ、場が収まるのを待った。

「そもそも、今の状況をオマエが我慢すれば、丸く収まるんじゃないのか？」

龍宮のぶつちやけた話に

「無茶言つな、アタシはな、ストレスに弱いんだよ！ ストレスが

溜まったら死んじゃうんだよ!」

千雨はある意味本当の事をぶっちゃけた。

「ウサギかお前は……そういうのは桜咲の方が似合うんだがな」

龍宮はそう言って桜咲の方を見た。どうやら、もう泣き止んでおり、恨みがましく真つ赤な顔で睨んでいた。千雨はこの 悩んで無理をして、それでも頑張ろうとしている少女を見て、ココロが痛んだ——まるでアイツのようだ、と

「おい、桜咲よ」

「な、何ですか!？」

千雨はややドスの聞いた声で問いかけ、桜咲はやや気圧されながらも気丈に睨みつけた。

「お前は、近衛に敵対しうる全てを敵に回しても、勝てる程強いのか？」

桜咲は只「……いいや」とだけ答えた。空気が変わったのを察したのか、2人共黙って聞いている。

「森羅万象遍く理解し、人の意識や行動を全てを計算して、近衛に降りかかる不幸全てを回避できるのか？」

桜咲はもう何も答えなかった。千雨もそれを気にせず話を続ける。

「因果律を書き換え、時空を塗り替えて近衛に起こった不幸を無効

化することが……」

「馬鹿を言わないでください！！ そんなこと出来る訳ないじゃないですか！！」

桜咲の絶叫が千雨の話を遮るが、千雨は

「この程度の事が出来ないのに……何故ベストを尽くさねえ！？」

こう言い切った。

「宇宙を再構成できるような存在だろうと、己の全てを懸けた処で救えるのは……ほんの僅かなモノなんだよ……」

「桜咲、アンタが考えている『最悪』など、この世界では木っ端なもんだぜ。セカイの『最悪』ってのはもっと残酷で無慈悲なもんだ。あと一分の猶予、あと一グラムの薬品……あと一步の距離。この差が容赦なく大切な物を奪っていく。アンタは『近衛に嫌われたくない』と『近衛を護りたい』どちらが重要なのか、しっかり考えた方がいいぜ」

顔を伏せて微動だにしない桜咲と、珍しく神妙な顔つきで聞いている龍宮を見て『柄にも無い事を言ってるな』と思った。だが『佐倉杏子』には言わずにはいられない記憶があった——自宅だった教会、そして駅のホームでの苦い記憶が。

「ワリいな、長居しちゃった」

空気を読み、千雨はそう言って帰り支度を始めた。その去り際

「おい、桜咲。とりあえずアタシからは近衛に手は出さねえ、攻撃されても反撃しねえ。これだけは約束する」

と声をかけた。

「……本当か？」

搾り出すような声で桜咲が尋ねると、千雨は厳かに、深遠な教徒の如く誓った。

「ああ、《神》に誓って」

千雨は自室への帰途、先程までの会話を振り返っていた。結局、問題は何も解決していないが、お互いが少しだけ理解し合えた。距離も少しだけ縮んだような気がした。唯一心配なのが最後に龍宮からされた忠告

「初めて会った頃より大分荒んできたな。ガス抜きした方がいいんじゃないか？」

である。それは自分も把握していたので、どうしたものか？と考えていたのだが『何もなければ夏休みまで大丈夫そうだし、何かあってもあいつ等がいるから、一般人への被害は出ないだろう』そう結論づける。

同時に龍宮達の仕事を手伝わないか？と誘われたりしたが、それは辞退した。

「結局、今日も渡せなかったな……」

そう言っ て鞆の中に入っているモノを握り締めた。さりげなく渡したかったのだが、そう考える度に、また左右の耳から異なる指令が聞こえ、心が乱される。

まあ何時か渡せるだろうと思い——うんまい棒コーンスープ味を——再び鞆の奥にしまった。

第7話

First Blood

中間試験が終了した。千雨は調整を兼ねて手を抜いていたのだが、結果は10位止まり。思ったより国語が悪かったようで、解答例を挙げると

・急がば（直進行軍）

・捕らぬ狸の（死亡確認）

・（スパイラル・ハリケーン・パンチで）桶屋が儲かる

流石は『次期三号生筆頭』『田沢二世』と言われただけの事はある。

試験終了後、そのまま『ドンマイ！ 中間試験パーティー』に移行していったのは、このクラスらしいと言えるだろう。

千雨としては出来る事なら、謹んで辞退させて戴きたい処……だったのだが、現状一年A組最大の懸案事項である《長谷川千雨》を早く何とかしたいらしく、有無を言わず出席させられた。状況が固定化する前に手を打つ『鉄は熱い内に打て』ということなのだろう。トラブルの処理方法としては間違っていないのだが、その鍛冶屋の隣には火薬工場が建っていたらしく……全てが裏目に出た。

今、パーティー会場の様子を実況すると

怒髪天の長谷川千雨

顔面蒼白の鳴滝姉妹

そして2人の間に立つ古菲、長瀬楓。当然、鳴滝姉妹を庇う様にして臨戦態勢である。因みに桜咲は近衛と神楽坂の護衛兼抑えに、龍宮は委員長や那波達を抑えていた。エヴァンジェリンと絡繰は出席せず、超は完全傍観、四葉にいたっては食材の購入に出かけ留守、という当に『不運と踊っバッドラックダンスちまった』状態である。

「ふう……」

誰にも聞こえないように千雨は息をついた。俄然やる気にはなっていたのだが、頭では冷静に目の前の2人と、被害を抑える為に動いている2人、纏めて4人に感謝しつつ心の中で詫びていた。千雨自身判っている。これは只の憂さ晴らしであると……。『戈を止める』とされている『武』をストレス発散で使う、しかも無関係な相手に当にモヒカンヒャッハーとも言える状態を、心の中で卍丸に謝罪しながら、そもそもの発端について思い出してみた。

最初、千雨は壁の華と化していた……。小籠包を蒸籠ごと抱えてパクついている様は、華は華でもラフレシアっぽいと言えるのだが……

そこに鳴滝姉妹がやって来て、にこやかな顔をしてプチシュークリームシュークリームの山を差し出した。こういう扱いに慣れていない千雨は、「あ、ありがと……」と少し動揺しながらプチシュークリームを一つ摘んで口の中に放り込み……。声にならない絶叫を挙げた。

「やったー僕の作戦勝ちだー」と風香が言い、「ほ、ホントに成功したんだ」と少しオドオドしながらも史伽はピョンピョン跳ねて

いた。彼女達はトラップ付のプシュークリーム——中にたつぷりとワサビが入っている——を持って来ていたのだった。

ここで鳴滝姉妹を擁護させてもらうと、そもそも彼女達は「普通に遊んでいたら、行き成り怒鳴ってきた相手と仲直り」する為に必要な通過儀式であると認識している。まさかお菓子数個を粗略に扱ったら、殺気向けられるなど想像だに出来ないのだ。

ワサビ入りプシュークリームを食べさせて、これでお互いチャラ、になると判断したのだ。千雨の方もこのレベルの悪戯なら、今後の為にここで手打ち、と判断できるレベルの問題であった……食い物さえ絡んでなければ……そして、さやか達とのトラウマをダイレクトに決る事にならなければ。

今やっと、自分に囁きかける『何か』の正体——うんまい棒をまどかに受け取ってもらえた上に、自分を信じて手を貸してくれた喜び。さやかに林檎を受け取って貰えず、結局救えなかった慟哭。其々の記憶——に気付いてしまった以上、色んな意味で落し前は付けなくてはならない。

また千雨は、師匠達が関わっていた特殊な職業についても薰陶を受けており『クミのカンバンに泥められて、舐められたままでどうするんじゃ!! タマ捕ってこんかい!』という発想が身体に染み付いていたのだった。

ゆらり と千雨は、勝利宣言をしてはしゃいでいる姉妹に近づき、風香が持っていたプシューの山を ガツ と手で掴み、そのまま口に放り込んだ。

啞然とする2人を余所に モニュ モニュ と咀嚼し始めた。だ

がこれはワサビ入りである、それを口一杯に頬張っているのである。当然もう涙目で鼻水もダラダラで、口からは緑色の涎すら垂らしていた。それでいてキラキラした目で2人を睨み、どう見ても赤■健というより平■耕太作画のドスの効いた表情で嗤っていた。

千雨としては今の2人の、驚愕している顔を見たことで溜飲が下がる筈、だったのだが、思った以上に心の傷は深かったらしく、胸の奥がジワジワと滲んでくる。徐々に破壊衝動を抑えられなくなっている。何より酸っぱいのだ、口の中が——あの日、自宅跡の教会で、独り食べた林檎の味と同じように——

もう自分が後には引けなくなった事を理解した千雨は「騒ぎを大きくして他の奴等にも介入してもらわんと、ちとヤバイかな」と半分プチシューが残っている皿を指差し、2人に言った。

「アタシの分は全部頂いたよ。残りは2人で分けてくれ。これで、イーブンっつもんだぜ……」

その台詞の意味に気付いた二人だったが、そんな無理難題どうしと史伽がビビリながらも反論する。

「こ、こんなの食べれるわ……」

「食べねえってんなら……」

史伽の全勇気を振り絞った反論を、千雨は歯牙にもかけずに右拳を頭上に掲げ

「コワイお姉さんの……」

そう言いながら背中の壁面に振り下ろした。

ビキッツ！！！

「お・し・お・き だぞ！」

壁にめり込んだ拳を中心に、直径2mほどに罅が広がる。それをバックに千雨はドスの効いたドヤ顔で優しく睨んでいた……「ケツ捲くるんじゃないぞ」と……どう見ても猛獣が獲物を見る目です。

ノシリ ノシリ と千雨が歩み寄る分、姉妹は後ずさっていく。もう既に皆がこの異様な雰囲気を感じていた。『またか』と頭を抱える者、『こりゃ、ヤバイんじゃないの……』と固唾を飲む者、『……！』と考えるより先に行動する者、『やれやれ、思ったより早くブチ切れやがったか……』と呆れる者一人、ただ状況を傍観する者も一人……だった。

「……では、どうあっても引かぬ、と言うのでござるか？」

という長瀬の問いに千雨はシンプルに答えた。

「ああ、無理」と。 なによりソウルジェムがそろそろヤバイ。今の彼女は『気になるアノ娘の援交現場を見ちゃった豆腐屋の拓海くん』状態である。

『一体自分は何がしたいのか？』

いつまで考えても出ない答えが、行き場を失っている憤りが、溜まりに溜まったエネルギーが、ぶつける相手（指向性）を求めている。いずれこの負の感情が《呪い》になりかねない。

もう、ここまで来ると嗤うしかない。千雨は《佐倉杏子》も含めて己の人生全てを嗤うしかなかった。父親の為に何かしたい、と思ったら家族全てを失う——自分と類似点が多い美樹さやかとはバッドコミュニケーション——助けようとすれば逆に追い詰めてしまう。《長谷川千雨》になっても武術習得の結果、闘争本能が自制心を凌駕するようになって……この有様、である。林の中の象が嗤わせる。

やる事 成す事 全てが裏目

頑張れば頑張る程、魔女に近づいていく——適度に欲があり、適度に強く、過度に自分を追い詰める——これぞ魔法少女に選ばれる要因だ、と思う位の自爆っぷりだ。

荒れ狂っている気配に浮かぶ自嘲が、壮絶な表情となっている。それを見た長瀬は、平和的解決が不可能である事を理解し

「そうなれば、只では済まぬでござるよ？」

そう問いかけた。彼女としては『2対1になれば流石に大人しく引いてくれる』と思ったのだが、逆にヤル気が増えてくるなど完全に計算外だったのだ。

「判ってるって『自分がボコボコにされる』事も覚悟の上だよ」

千雨はそう答える。だがも古菲の方は武術家として納得できないのか、厳しい口調で詰問する。

「だけど長谷川サンのは、一般人に振るっていいモノじゃないアル

「！」

《強さ》というより《凶悪さ》が千雨から感じられるのだろう、力行使する事を咎めるように言った。

「まあ、それが正論なんだろうが……こちらカタギに舐められたら商売あがったり、なんでな。それが問題だって言うなら、お前等が遊んでくれよ……」

一寸中学生らしくない口調で千雨は答える。本当なら龍宮に相手をさせる予定だったのだが……『来いよ龍宮！ 銃なんか捨てて！』こう言つて……この二人でも問題はない。後はヤル気にさせ、逃げ道を塞ぐのみ、である。千雨は突然話題を変えた。

「しかし長瀬よ、喋り方が忍者っぽくねえよな」

急に話を振られ、長瀬は戸惑いつつ

「……何でござるか？ それに拙者は別」……」

千雨はその返事を聞き終わる前に

「そこは『何でござるか？』じゃなくて『何だつてばよ！？』のほうがいいぜ。NINJAっぽくて」

あからさまに挑発した。

「……」

長瀬は何も話さなくなった。よく見ると普段は糸目である彼女が、

目を見開き睨んでいる。かなりお怒りのようだ。

「という訳で古よ、これ以降の説得は　なのは（な：殴る　の：ノックアウト　は：話をする）式で宜しく。判りやすくいえば、肉体言語で、つつこった」

トドメに千雨は古菲も挑発する

「頑張つてアタシをぶちのめすんだな、テメエの華麗な花拳繡腿で、な！」

古もここまで言われては黙ってられない。『初■ミクで大儲けできて羨ましいね』と言われた藤■咲位には喧嘩を売られた状態だし。

緊迫感がミノフスキー的表現でいう処の『戦闘濃度』にまで達し、誰もが息苦しさを感じている。クラスの中で一番大人しい宮崎のどかが、この状態に耐えられなくなったのは当然であろう。

「ああっ……」

そう言つて貧血のようによろめいた時、手に持っていたグラスを落としてしまった。

パリーン

その音をゴング代わりに、戦闘が開始された。

第7話

First Blood（後書き）

挨れて繋がる二重螺旋のように

精妙にして巧緻（藁）、大胆にして細心（?）

練りに練られた謀略が遣伝子の如く自己を複製する……

愈々クライマックス！ 愈々大詰め！！

舞台に立った全ての者がツケを払う時が来た！！

万雷の拍手にも似た轟音と共に、眩しすぎるカーテンコールを受け
るのは誰か！！

次回 ネギま！

真実は何時も残酷だ……

今週のネギま！を読んだ時に、こんな予告を思い出してしまった。
どうしてくれよう……

第8話 第一次スーパー逸般人大戦

開始早々、双方が間合いを詰めるようにダッシュし、そのまま打撃戦となった。最初は五分五分だった流れも、2対1の不利によるものか千雨が徐々に押されていく。よく見てみると千雨の方は主にパンチで対応しており、脚技は防御が精々ローキック位しか使っていなかった。これには勿論理由があり、千雨としてもこれは『ナントコツタイ』な状態だった。今の心境を簡潔に表すと

「パンツしか穿いてないから恥かしいんだよ！」

となる。まさかこんなバトルになるとは思っておらず、スカートの下にスパッツなどを穿いて来てなかったのだ。大股開きでジェット・ソニック・マツハ・パンチなんてぶっ放そうとした時に、朝倉辺りにパシャリとされたら、一生モノの黒歴史だ。

何も気にせずパンチラを御開帳する古や、ちゃっかりスパッツを穿いていた長瀬を嫉ましく感じていた。

それらを抜きにしても、千雨も流石に足技抜きでクロスレンジファイトは不利と感じていた。そもそも彼女の技は技量と比例しても破壊力が強すぎるのである。この二人が相手に大怪我させずに勝つのは不可能だろう。只のストレス発散で血を流させる訳にはいかない。この頭が真っ白になりそうなバトルは名残惜しいのだが、千雨はこのステージに少し手を加えた。

「ハッ！」

千雨は体制を立て直そうとしたのか、バク宙で後方に移動した。

其の時、地面すれすれの位置から千雨の指が《何か》を弾いたのを目視出来たのは、傍観者の中でも三人だけだった。

千雨は長瀬達から少し離れた位置に着地し、その衝撃を脚に溜めた。ギリギリまで高まった処でそれを一気に解放し、超高速ダッシュで一気に間合いを詰めた。その目標は――古菲

「古菲！ 避ける！！」

長瀬の言葉も空しく古菲は動かない、否動けない。

「ダ、ダメネ！ 脚が動かないアル！」

千雨はその間に古菲の眼前まで来ていた。古菲の必死な防御も空しく、千雨の右手に頭を？まれた瞬間、衝撃が走った。

「千雨圓明流奥義 無空掌！！」

……無空掌とは、ぶつちつけ無空波と菩薩掌のパクリである。最初に思いついた時は虎丸を実験d……もとい練習相手として習得した。しかし当初は余りにも殺傷力が高く、手加減の難しい技であった。幸いにも伊達師範の競合他社に属する構成員多数の協力により、正確なコントロールを身に付けることに成功したという。余談ではあるが、この場合の《千雨》は《ちう》と発音するのが正式とされている

《民明書房刊 『ぶつ跳び！ちうちゃん伝説！！』より》

掌から発する ブウン という音と共に古は地面から浮き上がり、

そのまま万有引力に従い ドスン と地に伏した。長瀬が二人の間に入り込むも間に合わず、古は何か呻きながら痙攣している。

「何をした！長谷川！！」

怒気を露に長瀬は叫ぶ。そうしていながらも古を庇う位置に立ち、油断無く千雨を凝視しているのは流石と言えよう。

「安心しろよ、2、3時間で回復する。後遺症も残らないし」

本当なら丸一日動けない筈だったのだが、古は技が極まるギリギリの瞬間、上半身のバネだけで身を捻り、ダメージを緩和したのだ。千雨はこの技量に舌を巻く。コイツには無空掌は二度と効かないだろう。先のクロスレンジにおいてもマツハパンチを撃っていたら、隙を突かれて危なかったかもしれない……だがFPM Pになると殺傷力が高すぎる。その辺の加減が難しい。

「……本当でござるか？」

「ああ、只の憂さ晴らしに無理矢理付き合わせたんだから、せめて軽症レベルに抑えとかないと申し訳ねえ」

「……判ってやっているのなら、今すぐにも止めてもらいたいの
でござるか……」

「ワリイ、無理」

千雨はそう言って長瀬との間合いを詰めようとするが、長瀬も警戒してか千雨を近づけさせない。

そうしている間に龍宮が近づき、古を回収していった。安全の確保というよりも、古の脚に打ち込まれた『何か』を調べる為だろう。

「オイ、素通りかよ、テメエもかかって来いよ！ 龍宮！」

千雨の挑発にも何処吹く風で

「お前が負けそうになるまでは、遠慮しておくよ。だから長瀬、殺る気で頑張れ」

そう言って龍宮は、古の太腿に出来ている小さな傷跡を凝視していた。

「酷い話でござるな……」

長瀬の感想に千雨は同意しつつ話しかける。

「だろ？ 今度アイツをシメる時には手を貸してくれよ……」

「無理矢理ケンカ売ってきた人間の台詞ではござらぬな」

この反論に千雨は何も言えなかった。

「それでは折角アドバイスを貰った事だし」

そう言って長瀬は懷から苦無を取り出し

「少し本気を出すといったそう」

鋭い眼差しで睨みながら、十数本を投射した。

「おわっ！！ テメエ！どこ狙ってやがる！！」

その全てを回避せずに手で捌きながら、千雨は長瀬を怒鳴る。

長瀬はニヤリとしながら答える。当然苦無を投げながら。

「何処と言われても、当然長谷川殿狙いでござる。まあ避けると料理に当たるかも……」

「この卑怯者め！！」

思わず絶叫する千雨は『背に食いモンは変えられない』と隠し玉その1を使う事にした。すかさずポケットから取り出した手袋を左手にはめ、指先から『何か』を放つように腕を揮い、こう言った。

「長谷川流魔体術奥義 戮家ウォルター拳！」

当然これは戮家奥義 千条鏤紐拳なのだが

「Unicodeメンドイ」

ということで改名した。当然センクウには内緒である。

千雨と長瀬の間で『何か』がキラキラと光ったように見えたその直後、投擲された苦無全てが『寸断』された。その破片は慣性の法則に従い飛んで行くも、どれも千雨には届かなかった。

流石にこの『現象』に皆が驚いていた時、中国武術に造詣の深い

古菲がその正体に気付き、やや説明っぽい口調で話した。

「うぬう……まさかアレは、中国拳法史上最強と謳われた暗殺拳
千条鏤紐拳なの力！初めて見たアル！！」

「知っているのか！古菲！？」

そこにツツこむ桜咲、まあ護衛対象と同じクラスに『暗殺拳の使
い手』がいるなど、悪夢でしか無いのだから気にもなろう。

龍宮の方は古の傷口から取り出した礫を眺め

「古菲、これは何だか判るか？」

と尋ねる。頭を振る古菲の代わりに超が

「もしかすると……ソレハ翔穹操弾力もしれないネ……デモ……」

超の歯切れの悪い口調に訝しむ龍宮、超は話を続ける。

「ソノ技は中国の歴史上でも修得者は5人といない筈ネ」

「なんともまあ……色々と出てくるな……アイツ本当に中一か？」

「オメエが言ってんじゃねえ！！龍宮！！」

彼女達の会話は全部千雨に聞こえている。その間も飛んでくる苦
無をバシバシと斬り飛ばしてた。

「ああ！もうこれじゃあ埒があかねえ！」

そう言って千雨は右手で焼き鳥を掴み、一気に頬張る。そして残った串を長瀬に投射しつつ叫ぶ

「ふはっへ はふひへんほん（喰らえ！鶴嘴千本）」

「……！ 危ないでござるな、それに口の中に物を入れて喋るのは、行儀良くないでござる……よ！」

その攻撃を長瀬は紙一重でかわす、だがこれ以降千雨の攻撃をかわす必要が出てきたので、必然的に攻撃が疎かになっていく、それは逆に千雨に余裕が出てくる事を意味する。その出てきた余裕を全て、串料理の収奪に費やしているのはどうかと思われる。『目的の為なら手段は選ばない』という言葉があるが、この場合どちらが目的で、どちらが手段なのか判らなくなっている。

このままでは……長瀬は焦り始めていた。あの鋼糸を防ぐ為には、千雨を防御に追い込む必要があった。だが攻守が交代しつつあり、苦無の残りも少ない。

千雨同様、長瀬も『このままでは埒があかない』と感じており、一か八かの勝負も考えていた。だが自分から動く隙が出来るので千雨が焦れてくるのを待っていたのだが、もうそんな余裕は無い。長瀬は覚悟完了した。

「長谷川千雨！！ いざ尋常に 勝負！！」

そう叫んだ長瀬は会場のテーブルクロスを一気に引き抜き、千雨に向けて投げつける。平面状になるよう投げられたテーブルクロスは丁度千雨の視界を遮るように広がっていた。

「無駄な足掻きだぜ！」

千雨は勝利を確信し、テーブルクロスを鋼糸で切り裂いた。そしてその切れ端から覗く光景を見て……千雨は青褪めた。

「そんなモン、何処から出したんだよ！！」

そこには……直径2M位の巨大な十字手裏剣が4つ、千雨に向かって不規則な軌道で飛んでいる。長瀬はその後ろを同じ速度で向かって来る。

「畜生！」

千雨は焦っていた。あの質量で高速回転する手裏剣に、鋼糸が絡み捕られたからだ。これで戮家ウォルター拳は使えない。実質左手は封印されたも同然だ。逃げようにも鋼糸の長さが逆に行動範囲を狭めていく。下手に手裏剣を回避しようとしても、後ろにいる長瀬がそれを見逃す訳がない。

「畜生！ 分の悪い賭けは大嫌いだったのに！！」

こうなればもう、と千雨は隠し玉その2をぶちかます覚悟を完了する。

「後はもう……刺し穿つのみ！！」

最早、回避不可能な距離になるも、千雨は微動だにせず構えている。長瀬は相手の出方が判らず迷いが生じていたが、こちらも引く訳にはいかず、一分の隙もなく千雨の動きを凝視している。

千雨は振りかぶった右手を手刀の形にする

「長瀬！ 避けるんだ！」

何かを察したのか龍宮がそう叫ぶ、長瀬が反射的に身を振ったその直後、千雨の技が炸裂する。

「長谷川流魔体術奥義 フラッシュ・ピストン烈舞硬殺指！！」

ババババババリン

超高速で撃ち出された手刀が当たる度に、巨大手裏剣が粉碎していった。これを全員が啞然とした表情で見ていた。当然コレを喰らう処だった長瀬もだ。

「間違いないネ、あれは伝説の暗殺拳、魍魎拳の奥義『烈舞硬殺指』ならやはり彼女が『拳聖』アルカ……」

古の独白を聞き、千雨は眉を顰めた。覚悟はしていたが、ついにばれてしまった。賞金額がヤバ目なので色々と手を打っておかないと、後々危険なことになりそうだ……

「だがまあ今は、コイツと決着をつけねえと、な」

そう言って振り返ると、倒れていた長瀬が起き上がってきた処だった。無理な状態での回避だった為、上手く着地出来なかった為だ。

「んじゃあ、仕切り直した」といって千雨は構えた。左手の手袋を投げ捨て、手を手刀状にして。

「やれやれ、でござる……」そう言っただけ長瀬は苦無を持って構えた。どうやら『まだ』隠し玉がありそうだ。

そして再び緊張感が高まっていく中、このバトルは最終局面に達した。

「史伽！し、しっかりしろ」

緊迫した状況下、風香の音が響き渡る。何だ？と思ひ声のした方向を見るとそこには……責任を感じたからかワサビ入りプチシユーを食べようとしている鳴滝姉妹の姿があった……

なんとか一つは食べれたのだろうが、そのままダウンしている史伽と、口の周りを緑色にして史伽を起こそうとしている風香。

このなんとも言えない空気が漂う中、長瀬は千雨の方を見て目で尋ねた——どうする？——と。

千雨も完全に毒気を抜かれたようで、長瀬に背を向け姉妹の方に歩いていった。両手を肩幅に広げているので一応暴れる気は無さそうだ。

千雨は半泣きになっている風香の頭を撫でてこう言った。

「ワリイな、アタシの分がまだ残ってたわ」

そして皿を持ち上げ、殆ど減ってなかったワサビ入りブチシユーを口に流し込む——今度はワサビの辛さしか感じなかった。

千雨はそのまま手を振りながら会場を後にする。

この乱闘事件は千雨の今後に大きな影響を残した。まずは「食い物が絡むと洒落が通じない」「キレると始末に終えない」「どう見ても893」等の畏怖の念。またそれとは逆に「カタギには手を出さない?」「生き様に一本スジが通ってる」「漢の中の漢」「長谷川のアニキ!」「『お姉さま』と呼ばせてください」等の敬意……本人が聞けば頭を抱えるようなモノだが……少し変わって食欲旺盛な処から「ギャルちうちゃん」「食欲魔人」「魔神ちう」「女将を呼べ!」等本人が聞いたら只じゃあ済まないモノ。

最後に、その強さは万人に賞賛されていた。後に

龍宮真名

桜咲刹那

長瀬楓

古菲

そし

て長谷川千雨

この五人を称して

武道四天王

と呼ばれるようになる。

この呼称に奮起する者一人、「やれやれ、困ったでござる」と呟く者一人、特に気にせず振舞う者二人、そして「何処からツッコミやあいいのやら……」と頭を抱える者——ご存知一人

以上が今回の第一次スーパー逸般人大戦の結果である……あくまで『表側での』と付くのだが……

所謂『裏側』の方はまだ継続中である。そう、誰もいない筈の会場跡でも……

「ほう……ここまで《気》を使わずに破壊出来るとはな……」

「まあ、ウチのクラスには元気な子が多すぎるからね」

紛争跡地のように破壊し尽くされた部屋を調べ回っている二人。
『多い』じゃなく『多すぎる』と言ってしまふ辺り、それなりに苦労しているようだ。

「この切り口は……まさか戮家の千条鏤紐拳か？ それにしては断面が荒い。鋼系の切れ味に頼りすぎだ！ コレだから最近の若い者は、直ぐ道具に頼る……私が修行中の頃は、絹糸で巨岩を切り裂く者がゴロゴロと……」

年寄りの長話が始まったか、と男の方は思った。勿論その事を口にも顔にも出すことは無かったが……

「ククク……おい見てみる、この手裏剣の破壊部分を。こいつはおそらく魍魎拳の烈舞硬殺指だ。純粋なスピードと肉体の強化で鉄塊すら粉碎する、まさに邪拳……」

女の方は面白い玩具を見つけたように上機嫌で喋り続ける。

「戮家と魍魎拳。 武術史上燦然と輝く二大暗殺拳を修得、 おまけに邪法といわれる翔穹操弾か……これは将来が楽しみだな」

「僕は逆に…… 将来が不安なんだけどね……」

クラス担任は至極当然な事を言った。

「で、私に毒見をしろ、と？」

女の方は ニヤリ と笑う。 男の方は不本意そうな顔をしながらも何も言わない。 つまり…… 是 であると。

「彼女自身、少し情緒不安定な処があつてね、衝動的に暴力を揮いかねない……」

「だから、深層心理にまで恐怖を植え付け、暴力に嫌悪すようになるればと？ 何とも、教育熱心なことだな」

「…… 矯正が出来ないようなら、此方側に引き込む事になる。 本人の希望は兎も角ね……」

女の皮肉を男は否定も肯定もせず、只起こりうる未来を語った。

「まあいい、長谷川千雨が只の阿婆擦れだろうと、腹に一物持つている裏の関係者だろうと……」

オイル・ウェボンス・フリー

久々に学園公認で暴れられるのが嬉しいのか、全身から気力と魔力を滲ませつつ豪語する。

「このエヴァンジェリンA・K・マクダウェルが、真の恐怖という

ものを教育してやるわ!!」

エヴァンジェリンの興奮振りに、タカミチ・T・高畑は心中で長谷川に詫びつつ、この問題が収束してくれる事を願った——その期待は見事に裏切られる事になるのだが——

何と無く寒気を感じつつ千雨は自室に向かっていた。とりあえず一暴れ出来たせいか、心身ともにスッキリしている。暫くは普通に生活できるかな?と思いつつ階段を上っていくと、踊り場に誰かがいた。

千雨は誰だろ? と思いつつその人物を凝視し、眉を顰めた——そこにいたのはクラスメイトのザジだった。よく考えてみると寮内で会ったのは初めてだし、先ほどのパーティーにもいなかった。

彼女の存在に訝りながらも、社交辞令として「おやすみ」と言いそうになった時、ザジが話しかけてきた。

「この世界のエネルギー濃度は低い」と

千雨は「はあ?」と思いながらも聞く。何故かそうしたくなったから。ザジは話を続けた。

「この世界は魔法の乱発、特殊空間の維持などで、世界を構築するエネルギーが常に不足しています……」

「いきなりかよ……もうちょつと伏線無かったのか?」

こう呟く千雨だったが、話が進むにつれ徐々に血の気が減ってい

った。その内容の衝撃に。

「……よって並列世界よりエネルギー状のモノが流れ込み易くなっているのです……川が山から海に流れるように、台風の中心に向かって風が吹くように……」

千雨はもう何も言えない。彼女が言っている事の大きさ、自分にとっての重大さが理解出来た。口の中がカラカラで、目の前が真っ暗になりそうだった。それでも千雨は耐え、一字一句聞き漏らさぬよう全神経を集中させる。そのような状態を知ってか知らずかザジは爆弾を投げ込む。

「よく流れてくるのはエネルギー、情報などで、時々生物や物質が来ることもあります。そして極最近ある変わったモノが並立世界から流れてきました。それは――」

千雨の心拍音が跳ね上がる。ザジの口から確かに聞こえてきたのだ。

――魂――と。

第8話

第一次スーパー逸般人大戦（後書き）

この世界観は作品独自の設定になっております。

第9話

Salve, terrae magicae

あの大乱闘事件について処罰等は一切無かった。「これでいいのか麻帆良学園……」一番頭を抱えていたのは千雨だった処が、この事態の異常さを表している。

クラスの皆も反応がソフトになっていた。結果的にはいえカタギ衆には手をださなかった事と、朝倉が超辺りの入れ知恵だろう

「いざとなれば食い物で買収すりゃあ大丈夫じゃね？」

という誰もが納得の解決方法があるからだろう。

とは言え、それでクラス全員が納得する訳もなく、雪広や那波や四葉さんからは小言を言われたりした。まあ言ってることは真に正論である為、千雨は反論もせず、大人しく聞いている。その態度から反省の意を感じ取ったのか、叱責の回数は減っていき、それを見てクラスメイトも態度を軟化していく……もしかして雪広達はこうなるように振舞っていたのか？ 千雨は気になったが聞くのも野暮な気がしたので、大人しく恩恵を受け取った。

まあ、全てがプラスに働く訳もなく、以前と比べてマイナスな関係の者もいた。一人は古菲、あのバトルの後、千雨は彼女にはつきりと宣言した「アタシの力はアタシの為だけに使う」と。その言葉に反感があつたのだろうか、態度が硬化している。それでいて本国に千雨の事を報告したようには見えないし、食って掛かる事もなかった。『敗者は勝者に敬意を』ということなのだろう……その代わり、修行に一層力を入れるようになったのは痛し痒しだ……千雨は何時追いつかれるか戦々恐々である。

だが古菲が微減だとすれば大幅減の奴もいる……大体想像ついているだろうが、桜咲の事である。千雨の技が暗殺拳だとバレた以上仕方ない事だろう。近衛の護衛を命じた奴に『近衛お嬢様に知り合いが増えました。経緯は不明ですが暗殺拳の使い手です』と報告したなら『桜咲、テメエ一寸待てや』となるのは必至だ。千雨も正直に拳法修得の経緯を、桜咲に話したのだが「道場に通っていたら、ついでに教えてもらった」といつても「嘘をつけ！」と言われる始末である。中々疑り深い性格のようだ。

前に説教垂れた効果だろうか、千雨が近衛の近くにいる時は、必ず桜咲も傍にいろようになった。まあ正確にいうなら、近衛の近くというより『一足飛びで千雨をぶった斬れる』距離と言うべきか。近衛の方も桜咲が近くに来てくれるので、積極的に千雨の傍に行く様になる……どう考えても千雨にメリツトがない。あるとすれば近衛の純粹さに心が洗われる事位か……

「『三解のフェイスレス』の『三解』とは『分解』『溶解』そして『卍解』なんだぜ」といえば

「すごいな、あのおじさん、じつは死神やったなんて」とあつさり信じてもらえた。似たような事で

「三池 ■ 史監督で『Fate/stay night』の実写版が撮影中らしいよ」というものある。

そうやって嘘をつい遊んでいたのだが

「■界 ■ 上のホライゾン」は実は 上 中 下 の三部構成だったんだよ！」

という嘘に、現実が追いついてしまった……笑えねえ

もう一つマイナスではないのだが、斜め上にぶっ飛んだ奴もいる……早乙女ハルナの事だ。何か変なスイッチが入ったらしく、トンでもない薄い本を製作中らしい……又聞きで知った内容だと『TS

した千雨と桜咲、近衛の801本』だそうだ……その発想はなかった……

おまけに千雨のすかした態度にもインスピレーションを刺激されたようで

「一輝ポジキター！ 普段は全然興味無さげにしながらも！ いざ皆がピンチになれば颯爽と駆けつけ……うおー燃える！ 萌える！！」

だめだこいつ、早くなんとかry

千雨は車田タッチの自分を想像し吹き出しそうになるが、正直そういうスタイルに憧れもある。

「その必要はないぜ！」とか「それには及ばないぜ！」とか言つて颯爽と現われてみたいと……だが早乙女にはどう対応すればいいのか悩んでいる。凹って大人しくさせようか、とも考えたが、ネット住人の基礎知識『既女と801には手を出すな』に従い今は保留している。

まあ実際、千雨の方はそんな事気にしてられない状態だ。その理由の一つは皆もご存知、ザジの爆弾発言である――

「……本来、そのような事は起こりうる訳がなかった……」

ザジは話を続けた。

「魂が肉体から容易に離れられる形態、世界を震わせる重大な出来事、それに受け入れ側の容態、そして……特殊な環境設定。これらそろっても尚……奇跡といえるでしょう」

千雨は色々と聞きたい事はあった、だが何も喋れなかった。脳が全能力を思考と記憶に振り分けたのか、肉体への命令、支配を放棄したかの如く指一本動かさなかった。

だがそれでも判った事がある。こいつ（ザジ）は千雨の秘密を知っている。自分が《ここ》にいる理由は《向こう側の事情》ではなく、《こちら側の事情》であること……そしてザジが言った『特殊な環境設定』という言葉。言い換えれば、環境を何かしら変更することで、自分が流れてくる確率がアップしたという意味……これはつまり『何らかの意思でここに呼ばれた』という事だ。

千雨は冷静であろうとした、だが自分の中で膨れ上がるマグマのような憤りを抑える事は出来なかった。徐々に感情が肉体を支配し動かそうとしている。

「……誰だよ」

震えるような声で千雨は呟く。だがザジは何も反応しない。その態度に切れた千雨は、絶叫するように問う。

「誰だって聞いてんだよ！ アタシをココに呼んだのは！ アタシに何をしろっていうんだよ、どうしろというんだよ！！……………アタシは何だっていうんだよ……………」

「それを決めるのは貴女」

千雨の恫喝に何一つ怯む事無くザジは答える。

「貴女という世界の生殺与奪は、貴女が握っている。貴女という王が決める」

千雨の命運など気にもしていないような、それでいて一字一句はつきりとした口調で、詠うように話を続けた。

「私が貴女に言えることは、あまりありません……ただ、『自分』を見失わないこと、『自分』が何者なのかしつかりと考えること、そして『自分』に執着しないこと……」

そう言うたザジは階段を上っていった。余りにも自然な振る舞いだったので、千雨は声を掛けるタイミングを失っていた。

「お、おい！ 一寸待てよー!!」

千雨はそう言いザジを追いかけたが、踊り場を超えてみると、ザジの姿は何処にも無かった……

「くそっ!!」

千雨としては辺り構わず探し廻りたい処だが、先程大暴れしたばかりなのでそれも難しい。

「まあいい……クラスメイトなんだから、2人つきりになるチャンスなんて幾らでもあるさ……」

そう言うって不本意ではあるが今日の所は諦めた。だが結局この日より2年以上、そのようなチャンスは現われなかった。そして最終局面になってから、のこのこ現われたのを見て

「テメエ！ これで『伏線回収終了』なんて、思ってるんじゃないやねえだろうな!!」

千雨がこう叫んだのは仕方が無い事だろう……

だが千雨にとって、この事件が最大の懸念ではない。確かに難しい問題ではあるし、将来に不安を残すことになるのは確かなのだが、今すぐ自分に何かある、という話ではないのだ。

つまり言い換えれば、千雨に今すぐ降りかかろうとしている最大の問題が、眼の前にあるという事だ。正確に言えば左斜め後ろから、獲物である蛙をジッと睨んでいる大蛇の目線——そうエヴァンジェリンの事である。

あの日以来、エヴァンジェリンは隠す事無く、熱い眼差しを送っていた。

勿論色っぽさは欠片もなく、どちらかと言えばサバイのような、ゴンを見つめるヒソカのような、グリフィスを見つめるガッツのような、アニマル繋がりで言えば相川摩季を見つめる坂本ジュリエッタのような視線である。

見られる方からすればマジキモイ と言いたくなるような、ノクターンっぽく表現すれば『千雨の未だ誰にも見せた事のない処……日焼けのない、透き通るような白さの奥にポツリと、ほんのりと薄く、ピンク色に染まっている■■■にツララを突っ込まれた気分』と言えよう……マジ勘弁してほしい。

蛇 蛙 ときたら当然蛞蝓である。千雨は『蛞蝓』役をやってくれる人を探した——担任の高畑先生の方を見て『助けてくれ』と目で訴えたのだが、苦笑いでスルーされた——畜生、憶えてろ。千雨

は早乙女を脅して『高畑×ガンドル』『高畑×ヒゲグラ』の薄い本を大量配布してやると、心に誓った。じゃあ桜咲は……ダメだ、奴なら喜んでエヴァンジェリン側に付かねない。色々考えた結果……

「という訳で龍宮、私の盾になってくれ」

最期的手段として龍宮にお願いしてみた。『この馬鹿なに言っている?』と言いたげな顔をして龍宮は

「とりあえず1000万」

と吹っかけてきた。

「\$でいいか?……………ジンバブエの」

「ケツ拭く紙にもなりやしねえよ」

千雨の価格交渉はイキナリ頓挫した。

「しかし何故私に頼むんだ? 最近は長瀬や古の方が仲良くやっているだろうに?」

という龍宮の質問には素直に答えた。

「あいつ等はいいい奴っばいからな……盾として使い潰すのは申し訳ない」

「……長谷川、お前助けてもらっ気があるのか?」

そういつて龍宮は千雨の額にエアガンを突きつけた。玩具だと思

うのだが、千雨は額の金属っぽい感触を気にしながら

「って言うかあいつ等はまだ『裏』の人間じゃないんだろう？ 巻き込む訳にはいかんだろう」

と龍宮に問いかけた。龍宮もそれには同意なのか、銃をしまい千雨に忠告するように返答した。

「そうだな、『私達』とは違うのだから、今回はお前一人で何とかしろよ」

千雨はその返答に眉を顰めながらも呟く。

「ああ、出来ればアタシも除外して欲しかったぜ……『お前ら』と違って一般人なんだからな」

未だ現状を認識しようとしないうちに千雨を見て、龍宮はため息をついた。それを気にせずに千雨は、自分を助けようとしないうちに担任に噛み付いた。

「それにしても畜生、高畑の奴、可愛い生徒を見棄てやがって……憶えてろよ」

「その高畑先生なんだが……この間お前がぶっ壊した会場の修理をさせられたらしい……全額自費で、な」

あちゃ…… 千雨はその話を聞いて頭を抱えた。やや上擦った声で

「まあ、担任なんだし、そういう苦勞は付き物、なんだろう……」

「言い切りやがったな、長谷川」

龍宮のツッコミを無視し、千雨は高畑に心の中で謝った。『瀬流彦×高畑』で勘弁してやろう、と。

「しかし、1000万か……」

「なんだ、当てがあるのか？」

「いや、特に無い……か？ 虎丸は海外出張中だからなあ……アイツを通さないと只の脅迫罪になるし……なあ龍宮、現金輸送車の巡回ルートって判るか？」

「……長谷川、お前は『目的』と『手段』の間に『常識』というフィルターを付けたほうがいいぞ。今後生きていく為にも……」

このように千雨と龍宮がバカ話をしていると

「もう戦う準備か？ 気の早い連中だな」

乱入者が話しかけてきた。当然諸悪の大根源——エヴァンジェリンである。なんか死合する事前提で話しかけてくるエヴァンジェリンに、頭を抱えつつ千雨は

「何故バトル前提で話てんだよ……」

とエヴァンジェリンに質問すると、意外そうな顔で答えた。

「なんだ長谷川、お前はサンドバックにされるのが趣味なのか？ その年でそんな性癖を持つのは関心せん……」

会話が噛み合っていない。エヴァンジェリンにとって、千雨を凹める事は最早確定事項であり、千雨がどうするかなど些細な事のようにだ。千雨は自棄になって

「なんでこんな酷い事を？ 暴力では何も解決しないわ！！」

聞けば誰もが『おいおい』と突っ込むような事を、千雨はオーバーアクション気味に真顔で言っただけだ。龍宮ですら一瞬唖然とした発言に、エヴァンジェリンはニヤリと晒い、静かには右手を挙げ指を微かに動かす。自分とエヴァンジェリンの間でキラキラ光る『何か』を見た時、千雨は思わず叫んだ

「戮家 千条鏤紐拳！ ま、まさか……」

千雨の表情に満足したのか、エヴァンジェリンは問わず語りに

「後進の成長振りを把握しておく事も、先達としての義務だからな。200年前とどう変わっているのか、じっくり見させてもらおうかと話を続けた。

「大人しく草葉の陰から見ていればいいものを……」

千雨の後輩にあるまじき発言を気にもせず

「まあ、それは飽くまでも表の理由だ」

そうエヴァンジェリンはぶっちゃけた。

「……じゃあ本音は？」

勘弁してくれ、という表情で問う千雨に対し、エヴァンジェリンはゾクリとする笑みを浮かべ

「それは決まっております」

そう言っただけでエヴァンジェリンは、グウの音も出ない理由を答えた。

「私のストレス発散の為だ」

畜生、何も言い返せねえ、千雨は平和的解決を断念した。その表情を見て満足したのか、エヴァンジェリンは強者の貫禄を見せつけた。

「今度の満月の夜だ。逃げてもかまわんが、只の引き伸ばしにしかならん事を理解しておけ」

「そっちの都合だけで考えられても……その……なんだ……困る」

機嫌を損ねない様、控えめに反論したのだが、エヴァンジェリンはフンと鼻で笑い

「バカを言うな、何故強者が弱者に配慮せねばならぬのだ？ 第一これは長谷川、お前もやっていた事ではないのか？」

その言葉に千雨は顔を歪めるが、何も反論しなかった。それを見たエヴァンジェリンは滲み出てきた怒りの感情も露に

「この際だからよく聞け。いいか、堅気には堅気のルールがあるよ

うに、任侠にも任侠のルールがある！　そして極道の住人にとって一番許せないやつは、堅気と任侠の境界線上を自分の都合で行ったり来たりする輩だ——お前のことだよ　長谷川千雨！！」

冷や汗を流し、齒軋りしながらも黙って聞いている千雨に、興味を無くしたかの如くエヴァンジェリンは、一言言い残してこの場を去って行った。

「お前に残された選択肢は三つ。黙って殴られるか、逃げた処を殴られるか、生意気にも楯突いて殴られるか、だ。さつさと覚悟を決めておくことだな——」

何も言えずその場に立ち尽くす千雨に、龍宮は声を掛けた。

「長谷川……」

「……なんだよ」

突き放すような千雨の口調も気にせず、龍宮は真顔で質問した。

「私とお前の間柄だと……三千元でよかったんだよな？」

「縁起でもねえよ！　もっと奮発しろよ、この守銭奴！！」

第9話

Salve, terrae magicae (後書き)

ミタキガハランジョーク

QB「さあ、あんこ。君の『願い』を言ってごらん」

あんこ「さやかを、さやかを生き返らせてくれよ!」

QB「残念だが僕には不可能だ」

あんこ「それじゃあ、ネギ先生の言っていた『私に良い考えがある』
っていうのを誰もが納得できる形で説明してくれ!」

QBは少し考えた後

「……………美樹さやかの遺体は何処かな?」

御願いだから、良い意味で驚かせてくだせえ 赤松先生エ…………

第10話 容赦もなく 慈悲もなく

満月の夜、千雨は一人自室のに籠っていた。今日自分の『どうするか？』が、今後自分が『どのように』生きるのかを決めるのだから、悩みもしよう。千雨にも判っている、最善の選択は大人しく凹られることだと。そうすれば明日からは『ちよつと強い女の子』として生きられる。結果、争い事に関わることなく、問題なくここを卒業できるだろう……だが

「気にいらねえ……」

最良の選択肢を取ろうとする理性を『何かが』妨げる。『異議あり！』と叫ぶ。『一寸待ったー』と叫ぶ。『だが一寸待つて欲しい』と書き込む。それは決して清らかな想いとは言い難く、寧ろ汚泥の中から湧き上がるメタンの如く尽きる事は無い。

千雨はザジの言っていた事を思い出す。

——『自分』を見失わないこと、『自分』が何者なのかしっかりと考えること、そして『自分』に執着しないこと——

「何が言いたんだよ……第一、一番目と二番目が矛盾してんじやねえかよ……」

千雨は思った。とりあえず一番目と二番目について考えよう、と。これ等が片付いて初めて三番目が理解出来そうな気がした為だ。

——『自分』は何なのか？ 自分は『長谷川千雨』だ……そんな問題じゃない。もっと根源とも言つべき『自分』とは——

「キヤー——！！」

突然、悲鳴が聞こえる。千雨は何事か、と思考を止め声のした方——窓から外を見てみると寮から100メートル程離れている樹木の上に誰かが立っていた。誰だ？ とよく見てみると、そこに立っていたのはクラスメイトの絡繰茶々丸だった——両脇に鳴滝姉妹を抱えて——

絡繰は千雨と目が合うと、軽く会釈して林の方に消えていった。

千雨は数瞬何が起こったのか理解出来なかったが、暫くして我に返り

「野郎！！」

と激昂した。おそらくエヴァンジェリンとグルだ、一緒にいる処をよく見かけるし……奴の目的は理解出来る、千雨に『さっさと来い』と言いたいのだろう……だが

「流石のアタシも……こいつは我慢が……ならねえ」

極道だ任侠だと言いながら平然と堅気を巻き込むなど、随分と舐めた真似をしてくれる。まあ問い詰めたとしても、エヴァンジェリンは意にも介さないだろう。強者のみ許される傲慢を、彼女はよく理解しているのだ。

エヴァンジェリンとの力量の差は隔絶している、といっても良いだろう。千雨はこの世界に来て、自分がどの位強くなったのかはまだ把握していないが、運良く勝てたとしても、結果は魔女化か円環の理行きだろう、と認識している。

一応この学園に属しているのだから鳴滝姉妹を誘拐したとて、彼女達に危害が加えられる可能性は皆無だろう。だから慌てる必要はない……のだが

「畜生！　どいつもコイツも人のトラウマぐりぐり抉りやがって！　あのクソ餓鬼、やりやあいんだろうが！　やりやあ！！」

千雨の頭では『この件は保留して遺憾の意を伝えればいいだろ』と思っているのだが、身体の方は正直で服装を戦闘用に換え、今にも窓から飛び出そうとしている。

千雨は激怒していた。必ず、かの邪智暴虐のエヴァンジェリンを×なければならぬと決意した。何よりもあの余裕ぶっこいた面が気に入らない。まるで昔、調子に乗っていた自分を思い出してしまう。同じ穴の貉の分際で、偉そうにさやかに対して慢言を放っていた自分と重なってしまう。それだけならまだしも、先程の誘拐もどきが、この下らない挑発が、さやかを挑発して決闘寸前までいったあの出来事を彷彿とさせる……あれさえ無ければ、さやかは説得にに応じてくれたかもしれない……今更言っても詮無い事と判っていても、思わずにはいられない。

「覚悟きめろよ、アタシ　気合入れるよ、アタシ！！」

そう言って千雨は窓から飛び出し、絡繰の後を追跡していった。

「やっと動いたか……手間をかけさせる」

遠くからこの一部始終を見ていた龍宮が口を開いた。横に立っている桜咲は結果は兎も角、この一連の流れに不快感も露に話し掛ける。

「だが、このやり方はマズイだろう、アイツをおびき出す為とはいえ、曲がりなりにも一般人を人質とするなど……高畑先生、この件はどう処理されるつもりですか？」

桜咲の詰問に高畑・Ｔ・タカミチはネタばらしを始めた。

「実の処、この方法を思いついたのは学園長なんだよ。正直、長谷川くんへの不信任が、ウチのクラス以外ではドンドン上がっているようなんでね、この状況下で風香くんたちを助けに行く姿を見せれば、少しは安心するんじゃないか？」

つまり『何をするか判らない』奴でも『義侠心があつて弱者を助ける』のであれば敵愾心が薄れるだろう、と考え、そう皆に考えてもらおうと舞台を設置した、という事だ。とはいえ、自分の生徒を生贄として差し出すなど、到底承諾できる事ではない。学園長に『戦闘後に長谷川君を傷一つ残さず治療する』ことを確約させて始めて承認したのだった。

「後は長谷川君がエヴァに負けてくれれば、全てが丸く収まる……
……長谷川君には……申し訳ないけどね」

『申し訳ない』の言葉に複雑な感情を滲ませながら、高畑は呟く。龍宮は『長谷川もその事は理解している』と思いながらも自分の抱いた懸念を皆に言った。

「だが万が一好勝負になれば、最悪逆効果になりかねない……それにしても長谷川の奴、かなりヤル気になっていたな……あいつのトラウマは不発弾かよ……あっちこっちにばら蒔かれてやがる」

「自爆、誘爆、ご用心……だね」

「というか 対人地雷？」

ネタに気付かない桜咲は龍宮の懸念に反論する。

「龍宮、それは穿ちすぎだぞ。いくらなんでもあの――」

桜咲は畏怖の念を滲ませながら続ける

「――『闇の福音』に対抗できるなどありえない」

龍宮は桜咲の意見を否定はしなかったが

「桜咲、長谷川については常に最悪の状態を想定した方がいいぞ……奴は何時も其の斜め上を行っているじゃないか」

その言葉に反論出来ない桜咲、龍宮は話を続ける。

「恐らくアイツにはまだ『奥の手』が残っている。それが何か判らん内は、慎重に動いた方がいい」

幾多の戦場を生き抜いた者特有の『勘』ともいふべき洞察力で龍

宮は語る。高畑もそれに共感する『なにか』を感じたのか、携帯を取り出し何処かと連絡をとっていた。

「さて、長谷川よ、今回も吃驚させてみるよ……だが、その前に……」

龍宮はどのタイミングで桜咲に『三池 ■ 吏監督の話が嘘である』ことをカミングアウトしようか思案した。

鬱蒼とした森の奥にある、少し開けた場所にエヴァンジェリンが立っていた。虚ろげな表情で髪を風に靡かせ、首をシャフ度に傾け佇んでいる姿は、当に絵画のようであり見る者を魅了するだろう……
……周りに従者である絡繰しかないのが残念な位だ。

ビクン

何かを察したのかエヴァンジェリンが反応した。表情に喜悦が浮かび、気配に禍禍しさが滲んでくる。そうしてある一点を見つめている——千雨が向かって来ている方向を。

ヒュッ

《何か》が森の奥から飛び出し

ストッ

エヴァンジェリンの眼前に着地した。

「遅いぞ」

眼前の少女から漂う闘争心に意外そうな、そして嬉しそうな表情でエヴァンジェリンが囁く。

「時間を指定しなかったテメエが悪い。サカッてんじゃねえぞ、この阿婆擦れが」

エヴァンジェリンは、この千雨の暴言も楽しそうに聞きながら

「そうだ、それでいい。狼は犬になれるが、犬は狼になれぬ。そして狼は犬でい続けることなど……出来やせぬ」

千雨はエヴァンジェリンの話を黙って聞いていた。まるで相手の一挙手一投足を探るかのように――矢張り鳴滝姉妹はこの辺りにはいないようだ。途中で誰かに預けたか、最初から偽物だったのか――

「無謀と思われようが、前進できぬ者に勝利と栄光は訪れぬ。ゴルディアスの結び目を解くことが出来たのは、アレクサンダーだけだったようにな……だが！」

エヴァンジェリンは殺気を開放し千雨を睨みつける。千雨は萎えそうになる心を奮い立たせ、睨み返す。

「貴様如きがこの『闇の福音』に楯突けると思ったか！ 身の程を知れ！！」

そう叫びエヴァンジェリンは手を揮う。千雨もそれを察して同じ

く手を動かすが

「無駄だ！ この未熟者が！！」

エヴァンジェリンの台詞に千雨は眉を顰める。自分の《鋼糸》がエヴァンジェリンの《糸》に全て切断されたのだ。《糸》は見えろし動きも読める、だが動きの精密さと切れ味が段違いである。予想していたとはいえ、この実力差に驚愕してもいた。

「やはり……修行不足なのか体質なのか……お前は《気》が使えんだな、折角の戮家の奥義もそれだけなら、私には勝てぬ」

まるでつまらないモノを見るような目で、千雨を見つめるエヴァンジェリン。その眼が、その態度が千雨の神経を逆撫でする。

「スカシてんじゃねえぞ！！」

そう言っただけ千雨はエヴァンジェリンに突撃する。一見自暴自棄にも見えるこの攻撃に

「フン、つまらん。これで終わりか……」

そう言っただけエヴァンジェリンは両手を振り、全方位から《糸》を繰り出し千雨を絡め捕ろうとした……が

「させるかー！ 長谷川流魔槍術！」

そういって千雨は腰から蛇轍槍を取り出し、一気に引き伸ばす。

「ぬ！？」

急に出現した槍にエヴァンジェリンは驚いたが、それだけでは収まらなかった。

千雨はその槍を両手で回転させた。すると徐々に徐々に風が起り、それが疾風となり……竜巻が吹き荒れた。

「長谷川流魔槍術奥義！ 渦流天樓嵐！！」

威力だけなら伊達師範以上であるこの技、槍の巻き起こす突風が《糸》の軌道を狂わせ、穂先が《糸》を切断していく。流石にエヴァンジェリンも初めての経験らしく

「何だこの馬鹿げた技は！！ 非常識にも程があるぞ！！」

怯んだエヴァンジェリンを見て『ちゃくんす』と思った千雨は一瞬で槍の穂先をエヴァンジェリンに定め

「隙あり！ タマ盗ったー！！」

叫びながら瞬動にも劣らぬ速度で、エヴァンジェリンに向かって突撃する。完全に隙を突くことが出来たのか、抵抗や防御をする素振りも見えない——『勝った！』——と千雨は確信した……のだが

キーン

——エヴァンジェリンの眼前に現われた魔法陣によって、必殺の突きは防がれた。

「……だから言っただろう、私には勝てぬ、と」

先程までの嘲りの表情は消え、心底残念そうにエヴァンジェリンは言った

「あの無茶苦茶な大道芸は兎も角……技のキレ、スピード、突く時の躊躇いのなさ、どれも合格点……だが」

そう言いながら懷から試験管を取り出して放り投げる。

「……リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……」

エヴァンジェリンが呪文を唱えると、試験管の中から魔力が増幅していき、十本位の氷柱に変化していった

『魔法の射手・連弾・氷の１１矢』

そう唱え終わると、１１本の氷柱は眼にも留まらぬ速さで、千雨に向かって行った。

千雨は近い順に叩き落そうとしたのだが、氷柱が微妙に軌道を修正していくのを見て

「クソッ！追尾機能付かよ！」

千雨はそう言うつと槍を分離させ鞭状にし、それを振り回して氷柱を叩き落としていく——無事全弾防ぐ事が出来たが、蛇轍槍自体が急速に冷やされ、持つ手が悴む。

エヴァンジェリンは千雨の槍を見て『南京玉すだれかよ！』と突っ込みたくなつたが、それを我慢して話しかける。

「鍛錬による肉体強化を《足し算》だとすれば、《魔法》や《気》による強化は……《掛け算》といえるものだ……」

それ以上、エヴァンジェリンは喋らなかつた。だが千雨は『何を言いたいのか判る——千雨の積み重ねてきたモノを『取るに足らぬ』と断言したのだ。』

千雨にもそれは理解出来ていた——だが、『自分で考える』と『他人に言われる』のでは怒りの度合いが違う。

「ウルセー！！ 調子こいてんじゃねえぞ！！ エヴァンジェリン・A・K・マクスウェル！！」

「誰が13課だ！ ブチ殺すぞ、ヒューーマーン！！」

「長谷川流魔槍術！ 渦流回峰嵐！！」

キーン

こうして千雨が魔法障壁を突き、エヴァンジェリンが魔法で攻撃する、というパターンが10分程続く。この場に倦怠感が漂うようになった時に、状況は変化した。

カカカーン

何度目か判らない千雨の攻撃は、全て魔法障壁に防がれた。

「おい長谷川、もういい加減にしろ……」

エヴァンジェリンは半分ダレていた。右手を腰と言うより尻の上に置き、左手だけで魔法を射出し千雨を攻撃していた。

「……構造は理解出来た……後は……」

千雨は何か呟き、エヴァンジェリンの攻撃を防ぎつつチャンスを伺っている。槍は完全に凍りつき、持つ手が張り付いてしまう。早く何とかしないと、槍を持つことも俟たなくなるだろう。千雨は腹を括り気合を入れる。

「必殺必中！ 核砕孔粉碎！！」

そう叫び……数歩下がって助走をつけて、突撃した。

「だから無駄だといっている……」

パリーン

一瞬エヴァンジェリンは、なにが起こったのか理解出来ないような表情をした——状況から判断すれば、これはエヴァンジェリンの魔法障壁を粉碎した音だ。

「ザマアミロ！ これぞ《纏効針点》！ 憶えたか！！」

千雨は完全にドヤ顔で言い放つ。エヴァンジェリンは状況を把握し、そして驚愕の表情を見せた。

「ま、まさか魔法障壁の構造的弱点を突いたというのか！針の穴程の大きさだというのに……貴様！！『コレ』をずっと探す為に突いていたというのか！！」

千雨はエヴァンジェリンの問いに答えず、只 ニヤリと笑った。

最期の抵抗とも言うべき障壁が破壊されたことにより、エヴァンジェリンを護るモノは無くなった。槍の穂先が徐々に心臓に近着いていく——30センチ——20センチ——10センチ——後5センチ——
『今度こそ——！』と叫んだ千雨の槍は……

ガクン！！

……残り1センチで千雨の身体ごと止まってしまった……

「な、何が！？」

何故！？ 千雨には訳が判らない。最早、最期のチャンスとばかりに全力を注いだ攻撃が、未遂に終わってしまった、今度は千雨が危機的状况になってしまったのだ。

「本当に……惜しかったな……あと数秒差だったのに……」

そうエヴァンジェリンが賞賛が滲み出るような口調で話す。千雨は何が起きているか調べようとすると、自分の身体のあちこちに、細い線が入っているのが見えた……《糸》？ おかしい どんなに細い《糸》だろうと、自分が見間違っ誤がない そう考えた千雨は対戦相手を凝視して——気付いた。

「デメエ！右手から地中を通って——」

タネを明かせば、エヴァンジェリンの右手の《糸》が腰の所から脚の後ろ側を通って地中に入り、千雨の後ろ側から顔を出し、そのまま千雨を拘束してのだ。

「キサマの敗因は『私が油断している』と思つたことだ。私がうろたえている、と思い周囲の状況確認が疎かになつた……覚えておけ、キサマのような体力のみの一点突破型は 一瞬たりとも気を抜くな、敵の息の根を止めても気を抜くな、それが幻術でない確証を得ることが出来るまではな」

エヴァンジェリンが講義するように喋っている間も、千雨は《糸》の拘束から逃れようと足掻いていた。だが微妙に関節を極められ、上手く力が入らない。

「畜生！ テメエ三味線引いてやがつたな！」

千雨の絶叫をニヤニヤしながら聞いていたエヴァンジェリンは、千雨を更に貶める為に、恥部を抉るように話を続ける。

「あんな演技に引つ掛かるとは……ププッ あのだや顔で『おぼえたかー』って道化にしては一生懸命だつたな……ククッ」

思い出し笑いで肩を震わすエヴァンジェリン。千雨はもう顔を真っ赤にして何を言ってるか判らない。

思ふ存分笑い続けたエヴァンジェリンは、気が済んだのか徐々に

表情を引き締めていき、千雨に問い質した。

「で、長谷川千雨よ、お前は如何したいのだ？」

その問いに千雨は、今まで何回言ったのか判らない答えを述べる。

「何時も言っただろうが、只普通に……」

その言葉を、エヴァンジェリンが妨げる。

「そんな寝言を……まだ自分の立場を理解出来てないのか？」

諭すように喋るエヴァンジェリンの貌から表情が消えていた。千雨はそれに気付かず反論する。

「アタシは……お前らと違う！ アタシは……」

「まだ言うか！ この外道が！！」

堰を切ったように溢れるエヴァンジェリンの憤怒に、その迫力に、千雨は何も言えなくなった。

「私には判るぞ、キサマは人殺しだろうが！ それも一番最低な『殺し』……生きる為でも、憎しみによるものでも、又は仕事としてでも無く、只単に『このほうが楽』という命に対する尊厳をもたない理由で……《人》を肉の塊と認識してするその目、誤魔化しきれぬモノではないぞ！！」

千雨はエヴァンジェリンの言っている事が判らなかった、だが身に覚えがあった。《佐倉杏子》としての体験が、その身に染み付い

ていたようだ。千雨が動揺しているのが明らかに見て取れる。その表情が更にエヴァンジェリンをイラつかせる。千雨の髪を掴み、その首筋に牙を突き立てた。千雨は恐怖に顔を歪め、エヴァンジェリンは嫌悪感に顔を歪ませる。牙を抜き、口中の血を汚物を捨てるが如く吐き捨てた。

「クソ、矢張り精気の欠片も無い血だ、キサマは死人か！？ ゾンビか！？ キサマのような奴が堅気の中で生きていくと？ おぞましい化物の分際で！！」

そう言うなりエヴァンジェリンは渾身の力で千雨の顔面を殴りつける。プチプチ と《糸》が切れる音と共に千雨は10メートルほど吹き飛ばされる。《糸》が食い込んだらしい数箇所から、うっすらと血が流れていた。そこに畳み掛けるようにエヴァンジェリンが近づき、腹部にトゥーキックをぶち込む。

「ガハッ……」

千雨が呻いているのも構わず、頭を踏みつけ、激昂しつつ言い放つ。

「屍肉を喰らい、親兄弟すら生贄とし、只感情のままに牙を剥く！ そのようなキサマが幸せな人生だと！？ 普通の生き方だと！？ 反吐がでるわ！！」

「……！！」

この叫びに何か琴線が触れたのか、千雨は唇を噛み、涙を堪える。

「何で眼から水が出るんだ？ グール無勢が！！」

千雨の慟哭も無視してエヴァンジェリンは再度千雨の髪を掴み、今度は地面に叩きつける。

エヴァンジェリンは困惑していた。何故自分が此处まで《コイツ》を痛めつけるのか？ 何故言っても詮無い事を延々と喋り続けるのか？ だが《コイツ》を見てみると、何でだろうか苛苛する。言い聞かせ、殴つてでも骨身に染込ませようとしてしまう……

エヴァンジェリンは長谷川千雨を始めて見た時から『コイツは人間じゃない』という事は察していた。まあそんな奴等は見渡しただけでも5人はいるので、あまり気にせずにいた。後でタカミチから聞いたら、どうやら有名な広域指定 ■ 団の準構成員扱いになっているらしい。まあその位なら、この麻帆良では気にする程の問題ではない……たとえばあの『前世界大戦における最強の人型汎用決戦兵器』の孫弟子だったとしても……だが、その後の《コイツ》の態度が癪に障る。

変に一人で突っ張っている癖に、妙に人恋しそうな表情を見せ、それでいて詰まらぬ事で暴力を揮う……見る人が見ればこう言うだろう——『まるでナギと出会った頃のキティのようですね フッフッフ——』と。本人は絶対認めないだろうが……

詰る所、自分の一番無様だった時期を見せつけられ『私はあんな情けない顔をしなかった！』とか『あんなウジウジした態度をとっていたのか！？』とか無意識に考えてしまい、それを全否定しなくて、湧き上がっていく怒りをぶつけてやるっ、というのが『本

音』である。

嘗て愛を求めた自分、温もりを欲した自分、そして願いが適うと信じて待ち続け……何一つ得られなかった自分……幸せを夢見て浮かれている《コイツ》に骨身に染みるまで叩き込んでやる——この世界の非情さを、冷酷さを。

流石にそんな『本音』を言える訳も無く『自分が辿った不幸への道を味合わせたく無い』ので『《コイツ》の矯正が必要だろう』と考え凹っている、という建前で覆い隠しているのが今の状況である。

また、千雨にとって不幸なことにエヴァンジェリン自身が、自分の中に生じている矛盾を見抜き始めており、それが更にエヴァンジェリンの神経を逆撫でしている。

「キサマにあるのは、何にでも噛み付く牙と、触れるもの全て傷つける爪だけだ！ キサマ自体が不幸と絶望を呼び寄せる存在だと、何故気付かぬ！？」

自分の髪を掴んでいる手を払い除け様と、千雨は手を動かすが、その手をエヴァンジェリンに捻られ、身動きが取れない状態で

「ガハッ！」

鳩尾に膝蹴りを打ち込まれた。1発、2発、3発 と綺麗に入り、千雨は呼吸も出来ないまま？き、視界がブラックアウトしそうになるのを耐えていた。

「キサマに《幸せ》など来ぬ！ 《明日》も、《愛》も、《夢》も《希望》も来やせぬ！ そんな《奇跡》は起きぬ、そんなことは許

されぬわ！」

そう叫びながら千雨を樹木の幹に投げつける。千雨は空中で体制を立て直そうとするが、ダメージが酷く結局、背中を強く打ち付けてしまった。肺が悲鳴をあげながらも、千雨は反論する。決して譲れない《想い》の為に

「HA、HA……さつきから、聞いてりや……勝手な事言いやがって……アタシはな、不幸になる気も、誰かを不幸にする気も無い！ましてや希望を捨てる気はない！捨てない！奇跡が起きないなら、アタシが起こしてやる！……死んでもな。そう……誓ったんだ。《アイツ》の願いの為に……」

エヴァンジェリンは千雨の反論を『フン』と鼻で嗤った。そしてより打ちのめす為に、その思考そのものも侮辱した——この結果、近衛近右衛門の作戦が完全に破綻したともいえるが――

「ハア？『希望は捨てない』だと？『奇跡を起こす』だと？随分と幼稚は発想だな、安っぽい思想だな。性質の悪い生臭坊主にでも騙されたか？そんな幼稚な台詞、真顔で言えるのは『馬鹿』か『詐欺師』だけだぞ。もしそんな勧誘が来たら、とっとと追い出したほうが良いだろうな、きつと……」

「……！！」

エヴァンジェリンの挑発に千雨はビクツと大きく反応した。そしてピクリとも動かなくなり、只全身を震わせるだけだった。それを見たエヴァンジェリンは《長谷川千雨の芯》が圧し折れた、と判断した。もう少し注意深く見ると、違つと判つたのだろうが、これ以上見ていると、本当に《長谷川千雨》を殺しかねない。

「フン、やっと観念したか……茶々丸、火器使用を許可する、頭と心臓以外はスタボロにしてやってかまわん。どうせ後でジジイが治療——いや修復する予定だからな」

「……了解しました、マスター」

コイツの面を見るのも忌々しいとばかりに、最期の仕上げを絡繰に押し付け、帰る準備を始めた。絡繰はどこからとも無く取り出した自動小銃を構え、千雨に対して静かに警告した。まだ感情を表現出来ないはずなのだが、そこはかとなく申し訳なさを感じられる口調で告げる。

「……それでは長谷川さん、御覚悟を……統制射撃、開始しm……」

パスッ ピキッ

「ん？」

絡繰の発言が中断し、なにやら乾いた音がしたのでエヴァンジェリンが振り向くと……

「何！？」

目の前を高速で《何か》が迫ってくる。紙一重の処でエヴァンジェリンがかわすと——そこには

——《真紅の槍》があつた——

「馬鹿な！ この私の魔法障壁をいとも簡単に！」

どうやら二回目の音は、エヴァンジェリンの魔法障壁を突き破った音のようだ。先程千雨がやった構造上の弱点を突くやり方ではなく、指が障子紙を突くが如くあっさりと貫通したようだ。

「何だコレは！ 一体何処から……」

そういつて《槍》の来た方向を見ると……そこには絡繰がいた、絡繰から《槍》が伸びてきていた——いや正確には『絡繰のボディ』を突き破って《槍》が伸びてきたのだった……

「ちゃ、茶々丸!？」

そうエヴァンジェリンが叫ぶや否や、槍の穂先が カチッ という音と共に、底辺が50cm位の二等辺三角形へと変形し シュン といいながら縮んでいった。

「い、いかん避ける！ 茶々丸!!」

その叫びも空しく、《槍》の穂先が凶悪な返しとなって絡繰に迫り
バキッ!!

と激しい音をたてて《槍》が絡繰の腹部に消え、ゆっくりとゆつくりと《上半身》のみが倒れていく。絡繰は機械音とは思えない位、無念さと驚愕が滲み出た声で

「申し訳……ありませんマス……ター……機能保全の為、スリープモードに……移行します……おねが……いですマスター……早くにげ」

絡繰の上半身が ドスン と音を立てると同時に眼から光が消え、それからピクリとも動かなかった。それを見ていたエヴァンジェリオンは地獄の閻魔も逃げ出す程の容貌で

「……よくも……よくも茶々丸をやってくれたな！！ 長谷川千雨！！ 只で済むとは思うなよ！！」

と、未だ立ったままの絡繰の下半身——その向こう側にいる千雨に告げる——これからお前を 殺す、と。

千雨の方は、エヴァンジェリンの宣告も気にならないのか、俯いていて表情は伺えない。数秒後左手に握っているモノ——微かに光る卵型のアクセサリーを握り締め、その紅い暖光を見せつけるように翳し、静かに呟いた。

「パパ、ママ、ゴメン……アタシやつぱ長生きできそうにないや……」

そう言葉を発するや否や、千雨の内部から湧き上がるエネルギー総量が増大した。今までは炎の如く、燃え拳がったり鎮火しそうになったりしていたモノが、只純粹な熱エネルギーとして——まるで太陽のように——揺らぐことなく静かに増大していく——禍々しい位に。

クイ 千雨は顔を挙げてエヴァンジェリンを睨み、どこか調子の狂った声で話し始めた。

「被告——エヴァンジェリン」

この訳の判らぬ発言にエヴァンジェリンは眉を顰める。そして千雨の独唱は続く

「被告——絡繰」

ニツ と嗤い千雨はエヴァンジェリンと目を合わせる。ゾクリエヴァンジェリンは千雨の眼——狂信者のそれと同じ——に一瞬背筋が凍った。そこで攻撃主体の思考から防御主体の思考に切り替えた。

その事に気付いたのか否か、千雨は嬉しそうな声で高らかに宣告した。目を血走らせ、犬歯を剥き出しにし、『どっちが吸血鬼かわかんねえよ!』という位壮絶な表情で、高らかに吼えた。

「判決は……………死刑!! 死刑————!!」

そう千雨が叫ぶや否や、左手のアクセサリーから数十本に真紅の《槍》が飛び出し、エヴァンジェリンに向かっていく。そのブチ切れた表情は、どう見てもアノ大司教猥下になしか見えなかった。

「テメエは《アイツ》を侮辱した。だから死ね!!」

それら《槍》達はいとも簡単にエヴァンジェリンの魔法障壁を突き破り

「テメエは《まどか》を嗤った! 《アイツ》の覚悟を嗤った! 《アイツ》の願いを嗤いやがった!!」

エヴァンジェリンはダメージを最小限に抑えようと、急所への攻撃のみ捌き、あとは避ける、それも無理なら戦闘に支障が出ない部位で受けようとした。だがその《槍》の刺突は強烈で、捌いた腕にも多大なダメージを与える。

「だから死ね！ 実を結ばぬ烈花のように死ねー！」

かわした、と思った攻撃も《槍》の縁が鋸状に変形し、エヴァンジェリンの皮膚を遠慮なく切り裂いていく。

「蝶のように舞い 蜂のように死ねー！！」

突き刺さる穂先はドリル状に変形し、エヴァンジェリンを深く抉っていく。

——この様子を遠くから眺めていた龍宮が『やはりアイツ、やれば出来る子だったんだ……』と言ったかどうかは本人のみ知る事であった――

千雨は、エヴァンジェリンにダメージが与えられたのを確認し、《槍》を消し去った。そして、これまでの恨み辛みも込めて言い放つ。

「今のアタシの攻撃が32発。テメエがアタシに与えたダメージはパンチ3発 蹴り9発 頭を叩きつけられたのが6発に、投げが3回。端数は切り上げて……計1000発！ 当然倍返しだからエヴァンジェリン！ 残り1968発、凹らせてもらっぞー！」

千雨のボツタクリにも反応せず、エヴァンジェリンは傷だらけの身体を精神力で奮い立たせ、悠然と千雨に立ち塞がった。立ってい

るだけで、体力を激しく消耗しているのだろうが、自らの誇りと矜持にかけて、千雨に弱みは見せたくないようだ。

圧倒的に不利であることを理解しつつ、一步も引く事無くエヴァンジェリンは千雨に問いかける――強者が弱者に問うが如く――

「長谷川千雨！ キサマは人に非ず、死人にあらず、魔法使いに非ず、無為の人間にも非ず！ 一体キサマは《何者》だというのだ！
」

千雨はその問いに興味無さげに答える。

「《何者》か？ …… ねえ、アタシが聞きたいくらいだ…… だが」

そう言つて千雨は左手のアクセサリーを掲げ、後ろにジャンプしてエヴァンジェリンと距離をとる。

着地する瞬間、アクセサリーが光の粒子と化し、千雨はその淡い光に包まれた。星の如く、ミラーボールの如く瞬き、その輝きが収まった時には、真っ赤なコスチュームに身を包んでいた。ルビーのような石を埋め込んだ槍を持ち、その切っ先を静かにエヴァンジェリンに向け、雄雄しく啖呵を切った。

「生者に非ず、死者に非ず、長谷川千雨に非ず……」

佐倉杏子にも非ず　そう聞こえないように呟き、話を続けた。

「そんなアタシに残った、たった一つのモノは何か？　そう問われれば、こう答えてやる……」

魔法少女と。

そうして千雨は槍を分離して鞭状にし、乱気流を起こすように振り回しながら、決めの台詞を吐いた。

「そう！ アタシは魔法少女！！ 魔女に喰われ、路傍に屍晒すが本望！！ さあ来いよエヴァンジェリン。今度はこっちのターンだ！！」

それは皮肉にも、美樹さやかが最期に綴った想いと同じモノであった……

《鹿目まどか》とは何だ、と聞かれれば？

美樹さやかにとっては『色々あったけど大事な親友』であり

巴マミにとっては『かわいい後輩であり、自分達の希望』である

暁美ほむらにとっては『唯一で最高の親友』となる……若干粘着質ではあるが……

それでは、佐倉杏子にとって《鹿目まどか》とは何なのか？——それは唐突に聞こえるかもしれないが、そのものズバリ《神》と言ってもいいだろう。

元々彼女は信仰心の深い少女だった。だが、信仰した神と自分の《祈り》に裏切られ、孤立無援になってからは、誰にも心開かず、誰も信じず、もう救われない、と諦めていた……そして《鹿目まどか》と出会った。

《鹿目まどか》は杏子に心開いた。杏子の想いを信じた……そして、幾つかの繰り返しの後、自分達魔法少女全てを救った。自身身の命と存在を引き換えに……

その結果、彼女の信仰心が全て《鹿目まどか》に傾向していったのは、それ程不思議な事ではない。まあ運良くと言ってもいいか判らないが、普段の《鹿目まどか》と接する機会が少なかったのも原因の一つだろうが……

感謝が敬意になり、敬意が親愛になり、親愛が信仰となり、信仰が……狂信へと昇華していったのが、今現在の佐倉杏子である。

《鹿目まどか》が聞けば『恥かしいよ』やめてよ杏子ちゃん』
と言っただろうが、佐倉杏子の心理状態をストレートに表現するなら

『我等は《まどか》の代理人 《奇跡》の地上代行者 我等が使命は 我が《まどか》に逆らう愚者をその肉の一片までも殲滅するこ
と—— エイメエエエエー——！』

CVはOVA版ヘル■ングの某神父（但し前半のまだ声に張りがある状態のモノ）で再生してください

となる。結果、知らぬ事とは言え《まどか》の事を『幼稚』だ『馬鹿』だ『生臭坊主』だ『詐欺師』だ『デブ』だ『鈍亀』だと言っ
てしまったエヴァンジェリンに《死刑》が下されるのは当然の判決
といえよう。

まるで、イ■ム教徒の聖地メツカに、村上隆が巨大な美少女フィ
ギアを作り『僕の考えた《アツ■ーちゃん》です。可愛いでしょう
？』と言っが如く——

まるでガッチガチの律ちゃんファンの前で『アイマスは2のほうが
面白いね』とか『何オープニングでアイドルのコスチューム着て踊
ってんだよwこのババアw』と言ったが如く——

——裁判長自身が『楽に死ねると思うなよ……』と宣告しても可笑
しくない状況であつた。

求めても求めえぬもの

望んでも望みえぬもの

狂おしいまでの渴きが、叶わぬ想いが、殺意と闘志を生む

心に地獄を持つ者同士の 不可思議なる同意が 壮烈なる対決を生む
次回 『虜』

流される己の血潮で渴きを癒す

装甲騎兵ボトムズ予告より

「長谷川流超魔槍術 奥義 覇咂圈停諏戸於流！！」
はーけんでいすーる

高ヶ度から振り下ろされた千雨の槍撃が衝撃波となり、エヴァンジェリンに襲い掛かる。

「チッ、そう何度も喰らうか！」

相変わらず魔法衝壁は破られているが、エヴァンジェリンはその一瞬のタイムラグを上手く使い、致命傷を避けている。とは言え、最初のダメージが後を引いているのかエヴァンジェリンの動きは鈍く、徐々にではあるが傷は増えていつている。

千雨としては早期決着を目指し、畳み掛けるように攻めていく。

「天覇絶槍！！」

そう叫ぶや否や槍が二本に分裂し、左右の手に其々持つ。そして二本の槍を、ワン・トゥーとパンチを撃つように、超高速で突く、何度も突く、目にも止まらぬ速さで突き続ける。

「長谷川流超魔槍術 奥義 双撃千峰塵！！」

魔法によって強化された槍撃が、エヴァンジェリンに壁のように立ち塞がり、嵐のように吹き付ける。

「くっ！ どれもこれも無茶な技だな！！」

エヴァンジェリンは鉄扇を使って防御しているのだが、全てに対処出来るわけも無く身体のおちこちを削っていく。悪態をつき、攻撃を捌いていたが、それで精一杯なのか踵までしっかりと踏みとどまり、とても回避行動をとれる余裕はなかった——千雨が待ち望んでいたのはこの状態だった。

「勝機！ 布璃射^{ふりすべんと}図鞭戸！」

千雨はそう叫ぶと、片方の槍を地面に突き刺した。槍は地中に埋まるとエヴァンジェリンに向かって突き進む。地表に衝撃波が吹き出るほどの速度でエヴァンジェリンの手前までくると、穂先が地上に顔を出した。その直後、穂先が複数に別れ紐状になってエヴァンジェリンに絡みつき、完全に拘束していく。

「糞、長谷川の奴、どうするつもりだ！？」

エヴァンジェリンは眼前で拳法っぽい構えを取っている千雨を睨む。千雨は残った一本の槍を投げ、こう叫ぶ 『長谷川流超魔槍術 奥義 弩羅虞^{どろくれつだー}烈墮^{あどべんと}亜 阿弩鞭戸』 と。するとその槍は輝きながら形を龍に変え、千雨の周りを静かに漂っている。

「長谷川流超魔槍術 奥義 譜逢^{ふあいなるべんと}鳴鞭戸！！」

千雨はそう叫ぶと空高く舞い上がり、回転と捻りを加えながら体勢を整える。

「断じてそれは槍術とは言わんぞー！」

エヴァンジェリンが『確かに』と皆が思うツツコミを入れたその時、中空に巨大な魔方阵が発生した。千雨はその魔方阵を足場として《蹴りつけ》超スピードでエヴァンジェリンに向かって行く。その間も《弩羅虞烈墮亜》^{しゅうぐれつだー}は千雨の周りを螺旋状に漂い同じくエヴァンジェリンに向かって行く。この様子を見た特撮ファンならこう言うだろう——『まるで龍騎のファイ■ルベントみたいだ、と』——当にその通りである。

「なんだその無駄に派手なエフェクトはー！！！」

そう叫ぶエヴァンジェリンの声も空しく、千雨の《蹴り》と《弩羅虞烈墮亜》^{らぐれつだー}の突きが同時に刺さり、エヴァンジェリンは彼女を拘束していた槍ごと、木々をなぎ倒しながら50メートル程吹き飛ばされた。

千雨が《全力全解》を開始した頃、それを傍観していた者達は混乱の渦中にいた。最初は『魔法無しにしては良くやっている』との評価だったのが、いきなりエヴァンジェリンを半死半生にして、尚且つ変身までした……どう考えても《魔法》で。

驚愕する者、畏怖する者、そして……

『これで、超からの特別ボーナスは確定だな……』

そう考えるのは勿論 龍宮真名である。彼女は超に『この戦闘の一部始終を記録して欲しいネ』と依頼を受けていたのだ。また『面白いモノが撮れれば別にボーナス着けるヨ』とも言われていた……が、まさかこんなモノが撮れるとは想像だにできなかったが……

「た、龍宮……何が起こっているんだ……」

桜咲はかなり動揺しており、龍宮の腕を掴んでプルプルしながら揺すっていた。流石に千雨と戦っても、相打ちに持ち込むことすら難しいとなれば、近衛を護りきることなど不可能。不安になるのは判るのだが……

『あんまり揺らされると画像の質が……』

そう思った龍宮は、桜咲が静かになるように

「落ち着け桜咲、お前が慌てても仕方なからう」

と諭したが、桜咲はかなりテンパっていた。

「だ、だがな龍宮！ も、もしアイツがこ、このちゃんに牙を剥いたら……」

「餌付けしとけばいい。これでもう大丈夫だ、問題ない」

「そ、そやけどウチラ味付けが京風やから、コッチ育ちのアイツの口に合うかどうか……」

あーもうやってられねえ　そう思った龍宮は、目で高畑に助けを求めた『何とかしてくれ』と。それを見た高畑は『ヤレヤレ』という表情で、桜咲を嗜めた。

「刹那くん、もう少し長谷川君を信じてあげてくれないかな？　彼女は無闇矢鱈に暴力……は兎も角、無抵抗の人に牙を剥くような人ではないんだから……」

龍宮は何気に評価の低い長谷川の事を晒しつつ、全然動揺してない高畑先生が気になり

「高畑先生は、余り驚いていませんが、この状況を予測しておられたのですか？」

と聞いた。この質問に桜咲は目を輝かせ、何か期待する目で高畑を見た。高畑は苦笑しつつ

「いや、正直長谷川君には驚かされたよ、封印されているとはいえ、エヴァを圧倒しているし。純粋な戦闘力なら、僕といい勝負かもしれない……」

一旦話を止めた高畑先生に、続きを促すよう龍宮は問いかける

「だが、負けはしない、と？」

龍宮の感想に肯定も否定もせず

「最初の頃の戦い方は良かった。自分の限界を理解し、出来る事をしっかり積み重ねていく……だけど変身してからは合格点には届かない。完全に《力》をコントロール出来ていない……もしかすると、

あの状態での戦闘は初めてなのか？　と思えてしまう」

なにより　と高畑は話を続ける――それらの話に桜咲は一字一句聞き逃さないよう耳を傾けていた。これで綺麗に撮影できると、龍宮は内心ほくそ笑んでいたりもする。

「最初の一撃以降、攻撃力が落ちている、明らかに手を抜いている……いや消耗を恐れていると言った方が良い。だとすると、長谷川君の《力》には何らかの制限がある……時間か、魔力かは判らないが……だが」

高畑は遙か遠くの戦場を見つめ、残念そうな表情をして自分の分析を語った。

「その手はエヴァに対して悪手に他ならない。彼女が《闇の福音》として怖れられたのは、何も強大な力だけではない……遙か昔より圧倒的に不利な状況でも勝利を収めてきた、その戦闘経験を忘れてはいけない。恐らく、今はエヴァが不利に見えるかもしれないが、あの戦闘をコントロールしているのは間違いなくエヴァの方だ。おまけに……」

高畑は煙草に火を付け、静かに紫煙を吐く。その煙が心情を表しているかの如く空しく漂う。

「戦闘開始前、学園長に『最悪のケースを鑑みて、封印解除の用意をしておく様』申請し、それが了承されたのだから……」

形だけの喫煙を終え、煙草を握りつぶしながら、高畑は結論を述べた……苦々しい表情で。

「この戦い、長谷川君の勝機は……ゼロだ」

千雨は先程の攻撃を『威力でかいが隙もデカすぎ』と自己採点しながらも、幾度目か忘れたが心の中でこう叫ぶ。

『またか!!』

圧勝中にしか見えない千雨だったが、内心では苛立っていた。『画竜点睛を欠く』の如く、全ての攻撃が肝心なポイントで外されている——100点満点中85点を確実に積み重ねているが、肝心な処の15点が奪えない。柔道という処の『効果』は積み重ねているが『技あり』以上が取れていない。

また千雨自身の心境にも変化が起きていた。《まどか》を愚弄された怒りはまだ癒えていないが、《殺意》は徐々に薄れていつている。これはエヴァンジェリンをフルボッコにしたことで溜飲が下がったのが一つ、それに加え《長谷川千雨》はまだ童貞を卒業（殺人を経験）していなかったのが大きい。意外というか当然というか、《佐倉杏子》は兎も角、千雨はまだその境界線を超えていなかった。

『自分のような《か弱い》少女を襲おうとした奴に人権は無い！そんな奴等には長谷川流魔体術 奥義 《過^{かあちゃんきつく}亜張蹴》をお見舞いするぜ！』

がモットーの修行時代でも精々重傷者止まりであった——精神的ダメージは兎も角——修行相手にプロシユートのアニキはいなかったし、伊達師範の組事務所がブラジルのストリートギャング位悪逆で

はなかったのも原因と言える。

だが今、千雨を一番迷わせているのは、やはりというか『ソウルジェムの侵食による、破滅への恐怖』であろう。

千雨は感じていた。自分のソウルジェムが消耗している事を、まるで秒針が時を刻むように少しづつ、確実に進行している事を。

蓄 濁

蓄 濁 と。

最初にエヴァンジェリンを攻撃した時には、そんなことは何も考えていなかった。相対死上等！ 死中に活あり、と全力でぶちかましていた。その後、想定外の事態が発生した……しかも4つも。どれも良いニュースのようであったが、同時にマイナスの効果もデカかった。

一つはエヴァンジェリンの《力》が予想よりも低かった事、拘束、もしくは封印でもされているのか？ 原因は不明——千雨には判断できない。

二つ目は魔法少女になってからの攻撃力が想像以上であったこと、三つ目はソウルジェムの侵食が予想より緩やかであったこと。

最期に、ソウルジェムの汚れ具合を感覚的に把握できたこと、である。

初めの3つは千雨の心に余裕を与え、最期の一つは千雨の歩みを遅くする。

初めの3つで千雨は《生》の可能性を思い起こし、最期の一つで千雨は《死》を常に意識してしまう。

——結果として千雨の『決死の思い』は薄れていき、魔力の行使に躊躇してしまう、それが更に必要以上の消耗を招いてしまう事となる——好事魔多しとはよく言ったものだ。それが《ある者》の誘導であつたのだから始末におえない。

この煮え切らない事態を打破すべく、千雨はエヴァンジェリンに攻撃を畳み掛けようとした——その時、森の奥で《何か》が湧き上がった。

見える訳ではないのに、確かに何かの《力》で溢れているのを千雨は感じる。全身の毛穴が開くのを感じながらも、汗を一滴流す余裕も出で来ない畏怖の念——エヴァンジェリンの魔力が爆発的に増大した——おそらく封印が解けたのだらう、と千雨は直感する。

溶けた鉄がこちらに流れてきたかの如く、むせ返るほどの熱気……正確には冷氣だが……が千雨を襲う。

「おいおい、何回パワーインフレのシーソーゲームが続くんのだ？ BLEACHでも二ヶ月は持たせられる展開を、たった一晩で消費するとは……なんとも勿体無い話だぜ」

そういいながらも千雨の瞳には、消えかかった闘争心が再び燃え始めた。もう油断も慢心も何処かに消え去り、覚悟完了の四文字が頭の中に浮かび上がってきた。

千雨の準備が整つたのと同時に、森の奥からエヴァンジェリンが

静かに近づいている。

ヤル気に溢れた千雨の表情を見たエヴァンジェリンは、何とも表現しがたい複雑な心境を顔から滲み出す。どの位複雑かといえば『驚愕40グラム、納得25グラム、憤怒15グラム、照れ隠し5グラムに闘争心97キロで彼女の表情は錬成されている』……当然の事ながら『照れ隠し5グラム』は嘘である。

少し思案するとエヴァンジェリンは天を見上げ、怒気を含ませた声で叫んだ。

「ジジイ！ 余計な手出しをするな！ ……今度舐めた真似をしたら、只ではすまさんぞ！！」

そして暫くすると、エヴァンジェリンの魔力は霧散していき。戦闘前の状態と並んだ。とはいえ今まで与えたダメージも消滅しているようなので、千雨が不利であることは変わりなかった。

「デメエ、何考えてやがる？」

何がどうなっているのか判らない千雨は問いかける。エヴァンジェリンは当初の怒りは何処に行ったのか、穏やかな口調で答えた。

「ん？ 大した事ではない。此方は貴様が『死人』だと勘違いしていた。だから身体ごと消滅させて、成仏させてやろうと思って……憂さ晴らしも兼ねて隙あらばと狙っていた。それを中止しただけだ」

エヴァンジェリンはぶつちやけて言い、尚話を続けた。

「一応『学園長』からは『殺すな』と言われていたのだがな、『死体を殺すな』など訳判らん！　と思っただら……何とそんな不細工は状態とは言え、キサマは『生きていた』と気付いた。生きている以上『女子供は殺さぬ』よ。私の矜持に懸けてな……」

かいつまんで説明すると、学園長としては

- ・何かと凶暴な千雨への警告と威力偵察
- ・他の魔法関係者が抱えている不安の払拭
- ・出来れば裏側への勧誘（無理なら記憶調整）
- ・エヴァンジェリンのガス抜き（これ重要）

と何かと欲張りな計画だったらしい……ぶち壊しにしてやったがな！　エヴァンジェリンとしては

- ・憂さ晴らし（本音）
- ・好き勝手やっているコイツ（千雨）に、この《世界》の仁義を叩きこんでやる
- ・死体が生きて喋って動いている。ムカつく、藁のように死ね！
- ・コイツ（千雨）の全てが気に入らない。絶対める
- ・某塾長への私怨

がこの仕事を請けた理由らしい……聞くんじゃなかった……

「で？　この後どうするんだ？」

という千雨の問い掛けにエヴァンジェリンは『はあ？　なに言っただ？』という顔をし、さも当然と言いたげな口調で答えた。

「決まっているだろう——これからは此方のターンだよ！」

全身から闘気を滲ませ、エヴァンジェリンは構えた。

「やっぱりそうなるのかよ！　コンチクショー！！」

やけっぱちに叫びながら千雨も構えた。その場に緊張感が高まっていく中、ふと思いついた疑問を千雨は問う。

「っていうか、ヤル気だったら何で封印を元に戻したんだ？　あのままの方が楽だったろうに？」

エヴァンジェリンは不満げでいて、少し嬉しそうな口調で答えた。

「エヴァンジェリンA・K・マクダウエル——この名は、裏の世界では特別な意味を持つ。それは『悪』であり『厄災』であり『恐怖そのもの』ともいえよう……事実、封印され力が発揮できなくとも、周りの怯えが無くなることは無かった……だが」

千雨を見据えて話を続ける。

「キサマはその《本来の私》を見ても怯まなかった……逃げようとしなかった。そんなキサマを全力で斃したとしても、私の銘が廃る、見ている連中に舐められる。だから今の状態、封印された状態でキサマを斃す！　×る！　そうして初めて我が名誉は回復し、我が銘を恐怖と共に刻み付けることが出来るのだ！　……それにな」

エヴァンジェリンはニヤリと勝ち誇ったかのような、計略が成功した軍師のように自慢げな笑みを見せて、言い放つ。

「実際、勝って尚且つ生き残る為なら、この状態の方が勝率が高かったから、な」

は？ 千雨の意味わかんね？ という表情に対し、エヴァンジェリンは上から目線で丁寧に説明していく。

「私が本気になれば、キサマに勝ち目はない……相打ちに持ち込まない限り、な。だが他に選択肢が無くなれば、キサマは捨て身になるのも厭わない。それがシンプルで唯一の答えだからだ……だが」

クライマックスで全ネタバレしようとしている悪の親玉の如く、エヴァンジェリンの話は続く

「今の私ならどうだ？ 命を懸けなくても、全力を出さなくても勝てるのではないか？ 少なくとも今、オマエはそう考えていたはずだ……そしてそれが『選択肢』となり『迷い』に繋がる……魂を代償に魔法を使うキサマなら特にな」

「……！！」

千雨の驚愕も余所に凶悪な笑顔でエヴァンジェリンが独白していく。

「最初キサマは、何も考えず純粹な『怒り』で攻撃してきた。もしそのままの状態で戦っていたら、もう勝負はついていただろう……キサマの『勝ち』でな。だが『怒り』では爆発的なブーストが懸かりはすれど、威力を持続させる事は出来ない……『憎しみ』や『悲しみ』または『愛』でもない限りな……そして私を『弱い』と感じた。『勝てる』と思った！ 『生きられる』事を意識した！ 意識してしまった！！」

千雨はもう何も喋らない。只誰からみても動揺しているのが判る。

「結果、死への恐怖が心を侵食していき、キサマは自分を縛り、自分を限定していく。100の力を出せば勝てる処を、無意識に90で善しとし、魂の損耗が80にまで抑えてしまう。そして一度折れてしまった心は、そう簡単には戻らない……まあこれはキサマのせいではない、悪いのはそんな欠陥だらけのシステムを作った奴だからな」

いや、実は良く出来たシステムなんだよ、ある意味ではね……千雨はそう考えながらも口には出さない、いや出せない——此れまでの戦闘で腑に落ちなかった事が全て繋がったからだ——目の前の女が立てた作戦がようやく理解出来たからだ

「デメエ……イカレてやがる……」

この言葉もエヴァンジェリンにとっては賞賛のようなものらしく、誇らしげに嗤っていた——千雨に見えていたものは《逆》だったのだ。エヴァンジェリンは『致命傷にならないように』避けていたのではなく、『千雨の戦意が維持される程度』斬らせていたんだ、と——確かに避けきつたり、完全に防御していれば、より強い攻撃を、と考えていただろう……だがどう考えてもマトモじゃない。とかどう考えてもクレイジーな作戦である。だからこそ今までバレなかったのだとすれば、ルルーシュ顔負けの策士（藁）と言うべきか

……

そうやって精神的に不安定にしておいて、一瞬の隙を突くつもりだったのだろう。事実千雨は完全に萎縮していて、迷いが生じていたのだから……そして皮肉な事に、学園長によるエヴァンジェリンへの支援が、結果的に千雨を助けた事になる……いや、恐らく学園長による『もういいかげんに止めね?』というシグナルなのだろう。まあ一応学園長の顔を立てるというか、アリバイ作りの為か、千雨

はエヴァンジェリンにお伺いを立ててみた。

「ちなみに、学園長はもう止めるよって言ってたが……それでもヤルのか？」

その問いにエヴァンジェリンは苛立ちも露に吼える

「ジジイが何と言おうが知ったことか！ もうこれは私の面子の問題だからな、せめてキサマを、茶々丸と同じ目に遭わせなければ気が済まぬ！！」

「それされると、普通ならアタシが死ぬんだがな……」

千雨のツツコミにもエヴァンジェリンは皮肉たつぷりに答える。

「キサマが《普通》ならな。案外『エイリアン2』のビジョップのように生きていられるかもしれんぞ？」

「最終的には死んでんじゃねえかよ！」

と言いながら千雨は 勘弁してくれ と言いたげにオーバーアクションで身体を右に捻り、天を仰いだ。が、次の瞬間には身体の捻りをバネ替わりに、フィギアスケートのトリプルアクセルの如く華麗なジャンプを披露し、エヴァンジェリンとの距離を縮める。不意打ちとしては百点満点の流れだろう。

そして 先手必勝！ とばかりにエヴァンジェリンに突きを入れる。その流れるような動作は不自然さを一切感じさせず、その槍は瞬きをする間もなく、心臓を抉っているだろう……相手がエヴァン

ジエリンでさえなかったら……

裏をかいたとは思わない、だが絶え間なく攻撃することで、エヴァンジェリンの魔法をある程度封じることが出来るだろう。そう思った千雨は避けられる事を覚悟の上で高速攻撃を繰り返す。

だがその攻撃は一体の乱入者によって妨げられる。

「ケケ、間一髪ダツタナ、ゴ主人」

千雨とエヴァンジェリンの間に割り込んだのは、北斗の拳に出てくるような刺々しいナイフを持った人形であった。千雨の突撃をナイフで捌きながら、カウンターを入れる為か間合いを詰めてくる。千雨はそれをかわす為足を止めざるを得なかった。

「デメエ！何しやがる！！」

怒る千雨の声も無視して、その人形はケケケと笑いながら、隙なくエヴァンジェリンへの路を塞いでいた。

「チャチャゼロ、一分でいい時間を稼げ。さっきの魔力回復時に、それだけの力は与えたはずだ」

「マカセナ！ ダケド時間ヲ稼グノハイイガ……別ニ《アレ》ヲ倒シテシマツテモ構ワンノダロ？」

「堂々と、死亡フラグ吐いてんじゃねえぞ！」

そう言いながらも千雨は、この不利な状況に焦りを感じていた。間違いない先程のネタ晴らしは、この為の時間稼ぎだ。最初の方で

やっていたプロレスみたいな『相手の技を受けて尚勝つ!』と同様、エヴァンジェリンは千雨より一步先んじて策を練り、それを悉く成功させている。そんなエヴァンジェリンが《一分》かかる《何か》をやるうとしている……マズイ 大変マズイ 千雨は何とか阻止しようとするのだが、チャチャゼロがそうはさせじと動き回る。

「ホラホラ、余所見シテイル場合力?」

チャチャゼロの鋭い斬撃を、千雨は槍で防ぐ。自分より速く小さく、使い魔より悪辣な動きをする相手は初めてなので上手く対処できない。槍では間合いの内側に入り込まれれば不利になる。

「クソツタレが!、舐めんなよゴルア!」

千雨はそう叫ぶや千雨は槍を投げ捨て、懷からマグナムスチール製のナックルサックを取り出し、肉弾戦で対処する事にした。

そうしている内にエヴァンジェリンが懷から魔法薬を10本程取り出して、呪文を唱え始めた。

「ウェニアント・スピリトウス・グラキアーレス……」

千雨は『間に合わなかったか!』と心の中で叫んだが、目はチャチャゼロから離さず、ジャブで牽制しつつぶちのめすチャンスをとっていた。

「ナンテコツタイ! コイツ、インファイトモ出来ルノカヨ」

チャチャゼロのばやきも慰めにはならず、千雨はナックルでナイフを受け止めつつ、アッパー、フックを織り交ぜて、徐々にチャチ

ヤゼロとの間合いを取りだした。

エヴァンジェリンの方も下準備が終わったのか魔法薬が氷に、否とてつもない凍気の塊と化していた。それを掲げて再度詠唱を始めた。

「スタグネット・コンプレクシオ……」

それと同時にエヴァンジェリンの肉体が徐々に変わっていく。《ヒト》から《人型のエネルギー》へと変質していく。

まだだ！ まだ焦るな！ 千雨は心の中の焦燥を隠してチャチャゼロと対峙する。チャチャゼロの方も打撃戦におけるウェイトの差がジワリと出てきたのか、インファイトからヒット&ウェイに変更しようとして千雨から間合いを取ろうとした……この瞬間を千雨は待っていたのだ！

「喰らえ！ 鶴足回拳！」

千雨の爪先から ジャキッ と刃物が飛び出しそれを蹴り上げてチャチャゼロを斬ろうとする。

「ナンダソレハ！ クソツ、オレモソレ欲シイゼー！」

その斬撃をチャチャゼロは身体を捻ってかわす。千雨の作戦が失敗したかに見えたが……千雨は足を高々と上げ、上半身を捻り『溜め』を作っていた。そして足を降り下ろし、重心を移動させながら『溜め』を全放出してフィニッシュブローを放った。

「長谷川流超魔体術 奥義 超弾動ジェット・ソニック・マッハ・

パンチ!!」

多少の防御や回避など問題とまらない規模の衝撃波がチャチャゼ口を吹き飛ばし、地面や木々ごと抉り飛ばしていった。

この様子を見てもエヴァンジェリンは、眉をピクリとさせるだけで詠唱を続けていた。

「させるか!!」

千雨はナツクルを投棄し両手で鶴嘴千本を取り出し、エヴァンジェリンに投射しようとした、その時

「サセルカー!!」

チャチャゼ口は叫びつつ千雨に向かって突進していった。持てる力の全てを振り絞ったスピードに千雨は対処できない。当に捨て身の攻撃である。

千雨は状況を考察する。

時間は切羽詰っている。両手は鶴嘴千本で塞がり格闘に対処できない。

今投射してもチャチャゼ口がナイフを投げて妨害可能……却下

先にチャチャゼ口を排除してもタイムオーバー……却下

鶴嘴千本を捨てても結果的には同じくタイムオーバー……却下

……なら!!

「タマ取ツタゼー!!」

グサリ

チャチャゼロのナイフが千雨の腹部に刺さる。追加でダメージを与える為、チャチャゼロはナイフを グリッ と捻り、より肉を抉ろうとした。

千雨はかつて伊達師範にもこうするように教わったが、効果の程は今回初めて実感できた。痛い、というより熱い。灼熱の鉄棒を突っ込まれたような感覚だ……だがこれも計算の内

「ドウダ！ マイツタカ……ガアアアア！！ テ、テメエ！！」

千雨は左手にもった鶴嘴千本をチャチャゼロに突き刺し、身動きがとれないようにして、右手の鶴嘴千本をエヴァンジェリンに投射した。

「マズイ！ ヨケルンダ、ゴ主人ヨ！」

エヴァンジェリンは詠唱を止める事無く最小限の動きで避けようとした……のだが、2本だけは避け切れなかった。実はこの2本は特殊で、他の鶴嘴千本の影に入るよう投射され、視認されにくいよう細身になっていた。

ザク ザク

……その2本が刺さってもエヴァンジェリンは一切動揺せず、呪文を詠唱しきった。

「……アルマティオーネム！」

そう唱えた直後、エヴァンジェリンが変質していき、身体に謎の

紋章が浮かび上がっている。『闇の魔法』による強力な魔法の装填が完了し、全体的な強化が行われたのだ。最初使っていた《魔法の矢》の攻撃など、今のエヴァンジェリンによる打撃一発分にもならないだろう。

たとえ封印により魔法が射出出来なくても、こうすれば弱体化した今の状態でも強者と渡り合えるようになるのだが……

ズブリ

エヴァンジェリンは刺さった鶴嘴千本を2本とも引き抜いた——それぞれ咽喉と右目にささったモノを——

カラン

抜いた鶴嘴千本を投げ捨て、エヴァンジェリンは首を傾げたり、肩を廻したりして、身体の調子確かめていた。その後、千雨の方を見て言い放つ。

「いい判断だったな。投射が後一秒遅かったら、無効化されていただろう」

ガス欠になったチャチャゼロを放り投げ、腹部の傷を鋼糸で縫いつけて応急止血した千雨は、悔しそうに尋ねる。

「畜生……刺され損かよ」

「いや、咽喉のは兎も角、右目は暫く使い物にならない。70%だった勝率が60%に下がったぞ……ククク、やってくれたな！」

実の所、右目のダメージはデカかった。今でも絶叫したい位の激痛が走っている。だが、千雨の奴が腹を刺されて平然としていたので、意地でも音を上げなかった——千雨も同じような事を考えていたと知れば、どんな反応をしたのかは興味がある。

「この闇の魔法の効果時間はおよそ30分。凌ぎきつたらキサマの勝ち。ダメだったら私の勝ちだ！ さあ！ のるかそるかの大勝負！ この私がここまでしたのだから、簡単にくたばるなよ、長谷川千雨！！」

「独りでマスかいてんじゃねえぞ！ このズベ公が！！」

双方共に退路を断ち、只、目の前の怨敵を叩きのめす事のみ考え衝突する——この戦いは最終局面に達した。

「ハア——！！」

「うりゃ——！！」

両者叫びながら突進していく。そして衝突すると

ガッッ

と首四つに組み合い、押し合いが拮抗している——いわゆるロックアップの状態である。そのまま力比べになるかと思いきやエヴァンジェリンは力を抜き千雨の懐に入り、首投げの要領で投げ飛ばす。

「クソッ！ 矢張り経験や判断力じゃ勝てねえか……」

千雨が背中から叩きつけられると、その上からエヴァンジェリンが覆いかぶさるうとしている。恐らくそのままマウントポジションに持ち込み、ボコボコにするつもりだろう……だが

「させるかー！」

千雨は叫びつつ両腕を地面に叩きつけ、海老反りになった反動で身体を浮かび上がらせる。千雨の顔はエヴァンジェリンの眼前まで近づき、エヴァンジェリンの驚いた表情もはっきりと確認できる。千雨としてはそれで終わらせるつもりも無く

「ふん！」

と海老反りになった状態から反動と腹筋を使い、エヴァンジェリンの鼻先に、千雨は頭突きを御見舞いする。

メキッ

「！！」

エヴァンジェリンが声にならない絶叫を発した隙に、千雨はエヴァンジェリンを上空に蹴り上げる。本来なら空中で体勢を整えたり、浮遊魔法を使えば空中で制止出来るはずなのに、エヴァンジェリンは混乱した様子で空を漂っている。

「まだまだ！」

千雨はエヴァンジェリンに向かってジャンプし、再度頭突きをかまして更に高く、エヴァンジェリンを打ち上げる。それを何度か繰り返し、このまま落ちたら只では済まない高度まで持って行った。

タネを明かせば千雨が頭突きの際、魔力も一緒に打ち込みエヴァンジェリンの三半規管を麻痺させ、上手く対処出来ないようにしているのだった……全ては最期の大技の為に。

「覚悟しろよエヴァンジェリン！ 長谷川流超魔体術 奥義 ハセガワリベンジャー……！」

そう言っただけ千雨はエヴァンジェリンの所までジャンプし、身動きが取れないよう各関節を固めて、そのまま落下していく——その真下には押し折れた巨木が、落下してくるものを串刺しにしようと、杭のように待ち構えていた。

余談ではあるが、同様の技として《ハセガワスパーク》というものもある……残念ながら《ハセガワインフェルノ》は修得できなかったらしい……そして、これらの技は比較的余裕がある時に使われる。絶体絶命の場合なら《ハセガワローリングクラッシュ》《必殺暗黒流れ星》と言った技を使っただけ……

ガガガッ……！！

そのまま落下すると、折れた巨木のささくれ立った棘が、エヴァンジェリンに刺さり全身がズタズタに切り刻まれ、肩、腰、首、各関節に尋常ではないダメージを与えた。

「オラ！ 寝てんじゃねえぞエヴァンジェリン……！」

そう言っただけエヴァンジェリンの髪を掴み、畳み掛けるように攻撃しようとした……のだが

「ハハハハーハーセーガーワー！！ 痛いじゃねえか！！」

全身血まみれで悪魔のような容貌のエヴァンジェリンが、髪を掴もうとした千雨の手を撥ね付け

「おいたが過ぎるぞー！！ 長谷川！！」

バシン！！

千雨の顔面にフルスイングのパンチを打ち込む。千雨はそのまま20メートルほど吹き飛ばされる。

「畜生！ まだまだ元気じゃねえか！ あのアマー！！」

千雨は口元の血を拭い、立ち上がろうとすると

「ハーセーガーワー！ もっと楽しませろよ！ キサマもヒイヒイ喘がせてやるからよ！！」

暴力と理不尽を具現化したような存在となったエヴァンジェリンが、間髪置かずに千雨に向かって瞬動で接近してくる。《闇》に呑まれ完全にリミッターが振り切れているようだ。

「デメエが言つとアロク聞こえるんだよ！」

千雨は叫びながら《槍》を具現化しエヴァンジェリンを迎撃する準備に入る。穂先をエヴァンジェリンに向け、絶好のタイミングを計りつつ待ち構えた……後3メートル 2メートル 1メートル
今だ！！

「長谷川流超魔槍術 奥義 武羅津禰素俱羅斐弩」
くらつみすくろふいす

そう技の名を叫びつつ千雨は槍を突く。手首のスナップを効かせ、捻るように突く。技としては単純であるが、それに魔法を上乘せすることで、槍が当たらなくても衝撃波で多大なダメージを与えられ、カウンターで使うと効果は絶大である。

エヴァンジェリンは避け切れなかった。直撃はかわしたようだが、槍が近くを通った顔左半分と左肩をズタズタに切り裂かれて……も尚、千雨に向かって突き進む——どうやら『避け切れなかった』のではなく『避け切らなかった』ようだ。突撃のスピードは一切衰える事無く千雨の懷に飛び込んだ。そして左掌を千雨の胸に叩きつける。

パン

思ったより軽い音に千雨は安堵する。身体へのダメージも軽微のようだ、と安心してエヴァンジェリンの様子を見た時——千雨の顔から血の気が引いていた——エヴァンジェリンは右掌を振りかぶり、打ち付けようとしたのだ——自分の左掌の上に。

マズイ！ これは…… 鎧通しだ！！ そう思った時

ボウン！

鈍く響く音がした時、千雨の身体は全身が震え、よろめく様に2・3歩後ろに下がっていく。

エヴァンジェリンとしても会心の攻撃で、これで勝負がついたと思っていた。と言うよりもこれ以上の戦闘は困難である——事実右

目に続いて左目もダメージを受けてしまい、千雨の位置がぼんやりと判る程度の状態となってしまうた。

「むあ、ば……だまだ!!」

だが、千雨は気合で踏ん張り、槍を鎖状に変化させエヴァンジェリンに絡ませ、そしてそれをハンマー投げの要領で回転させる。

「軍神ムロフシよ！御照覧あれ！！　は、長谷川流超魔槍術　おう……ぎ！　大秩父山　おろし！」

吐血しながらも千雨は手を緩めず、その回転は徐々に速度を上げ、同時に威力も増していく……そして

「粉碎！」

ドゥーン！　横回転だったのを腕力で無理やり縦回転にし、地面に叩き付ける。

「爆砕！」

ビシリ！！　槍を通常の形態に戻すことにより、高速で近づいてくるエヴァンジェリンを、カウンター気味の打ち下ろしで地面にめり込ませる。

「大・喝・采!!」

ズブリ！！　千雨は渾身の力を込めて、槍をエヴァンジェリンの腹部に突き刺す　槍は完全にエヴァンジェリンを貫通し、槍を持つ千雨の手がエヴァンジェリンに触れる位、両者は接近していた。

「まさか……ここまでやるとは思わなかったぞ……さっきの鎧通しで、肋骨が肺はおるか心臓にまで刺さっているとゆうのに……キサ

「マ本当に人間では無いのだな……」

「う、うるへえ……んなことは、言われなくても……分かって……グフッ！」

エヴァンジェリンの驚愕に、千雨は血を吐きながら答える。顔を血に染めながらもエヴァンジェリンは話を続ける。

「実はな……さっきタイムリミットは30分、と言ったが……ありや嘘だ。本当は10分……もうそろそろタイムアウトだよ……」

「なんだ？ 負け犬の泣言か？」

千雨の挑発にも煽られずエヴァンジェリンは淡々と喋る。この態度に訝しむ千雨は、少し距離を取ろうとしたのだが

ガシッ

エヴァンジェリンに上着を？まれ離れられない。

「……おまけに目も見えにくくなっているから、密接していないと攻撃を当てられない……こんな風にな！」

「デ、デメエー！」

千雨は激高し、エヴァンジェリンの首を両手で絞めた。このままだと1分もせず窒息か、頸の骨を圧し折られただろう……だがこれは今回、悪手だったといえよう。エヴァンジェリンはフリーになった右手に魔力を集中し、只一点を抉る——千雨の胸のアクセサリーを——

千雨はその瞬間、何が起こったのか理解できなかった。だがソウルジェムが身体から剥がされ、変身が解け、魔法の加護が薄まるにつれ、溜まっていたダメージが一気に千雨に襲い掛かった。

「嗚呼アアアーーーー！！」

先ずは激痛に襲われた。千雨は身体を痙攣させ、手足を縮こまらせる。最早戦闘どころではない。

その様子をエヴァンジェリンは只見つめている。ソウルジェムと千雨の繋がりを絶つ為、ソウルジェムを魔力の籠った氷で覆いつくそうとしていた。

ガシ

千雨はエヴァンジェリンの足を掴んだ。最早魔力の加護も無く、おまけに弱りきった女の子の力で握り締める。弱い 非常に弱々しい力——だが自分に残された全てを込めて握り、訴える。

「かえせ……ソレを……アタシをかえ……せ！」

千雨の言葉がエヴァンジェリンにどう聞こえたのかは、本人にしか判らないが、表情は何一つ変えず、まだよく見えぬ目で千雨を凝視し、ソウルジェムを凍らせていく。

「ちくしょう……かえ……」

カチン

千雨の最期の叫びが途切れたと同時に、ソウルジエムは完全に氷で封印された――戦いの、辺り一体に与えた被害と比べて、余りにも呆気ない終焉と言えよう。

「チャチャゼロ、何処だ？」

「コツチダゼ、ゴ主人」

目の見えないエヴァンジェリンは、声のした方向でチャチャゼロの位置を把握し、回収する。チャチャゼロを頭の上に掲げ、話しかける。

「まだはつきりと見えぬ。だからオマエがナビゲートしろ」

「了解ダゼ。シカシサツキノ戦イ、ハジメテ会ツタ頃ヲ髭髯トサセル、シブトイ、イイ戦イツプリダツタゼ」

「……………そうか」

「ソレニシテモアノ餓鬼、戦イ方ガ筋肉馬鹿ソックリダナ……………マサカ娘ジャネエダロウナ？」

「それは……………無いと思うが……………」

二人の会話の最中、タカミチがやって来た。千雨の状態を見て顔色を変えたが

「安心しろ、コイツの本体はこつちだ」

エヴァンジェリンはそう言って、凍ったソウルジェムをタカミチに投げる。そして追加の説明を続けた。

「身体のほうは修復……いや治療した後しっかりと保存しておけ。その《本体》の封印がとければ無事復活するだろう……多分」

エヴァンジェリンの言葉にタカミチは眉を顰めるが、特に何も言わず、千雨を安全な処に運ぶ準備を始める。

「じゃあな、後は任せたぞタカミチ」

エヴァンジェリンはそう言い残し、茶々丸を回収して帰路についた——その後姿に、勝者の歓喜も威厳も存在していなかった——

自宅への帰路、エヴァンジェリンは無言だった。体格的にも茶々丸を背負って帰るのはかなり辛い事なのだが、マスターとしての意地なのか、一切表情に出さず、黙々と歩いている……だがチャチャゼロとしてはこんな重い空気の中、とても間が持たないと

「ゴ主人、随分ト御機嫌ナナメダナ？」

随分とストレートな質問をした。エヴァンジェリンも、付き合いの長いチャチャゼロ相手だと素直に答える。

「……ああ、まさか……たった十年で、ここまで墮落していたとは

な……」

エヴァンジェリンは自分の600年にも及ぶ人生、その殆どを占めていた戦闘経験に絶対の自信を持っていた……だが

先程の戦闘は全く話にならない出来だった……敵を見くびり、窮鼠に噛み付かれるなど、昔の自分だったら憤死ものの醜態である。

「結局、私も……このぬるま湯のような世界を満喫していた、ということが……」

自嘲気味に独白するエヴァンジェリン。チャチャゼロもこれ以上は、と話題を変える。

「ソレニシテモ、アノ餓鬼……アノママ　クタバルナンテ事ハ　無イダロウナ？」

「わからん。かなりの消耗が見て取れたが……」

事実、千雨の《ソウルジェム》はかなりの穢れを溜め込んでいた——総量の約4割弱——つまり後2回、同じことがあれば……

エヴァンジェリンは自分の予想に希望的観測が含まれていることを知りつつ、楽観論を唱える。

「だが流石に、何らかの回復手段はあるだろう……そうでなければ……」

《人》としての常識を元に、ネガティブな思考を否定した。

「……死なせる為に、あんな身体にするなど……意味がない」

結果としてエヴァンジェリンの予想は当たっていた——良い意味でも、悪い意味でも——

数日後、明石教授が《ソウルジエム》を解析した結果を、学園長等に報告した。その結論を要約すると

・長谷川千雨がこのまま魔法を使い続けると、魂が消耗または変質する

・その際、莫大なエネルギーが発生する——その総量は概算で

——《魔法世界》を数百年、維持可能である——

第11話

The Final Decision We All Must

予告

昨日の夜、訳も分からず、悲惨な雨に濡れていた

今日の昼、命を的に拳で憂さを晴らしていた

明日の朝、チャチな真義とちっけな保護欲が麻帆良の街に嵐を呼ぶ

2年A組は学園長の創ったパンドラの箱。魔法が使えりゃ何でも出来る

次章 『S i s p u e l l a m a g i c a !』

明後日？ そんな先のことは分からない

幕間巻

極武髪で死守

上野国立博物館の門前に、千雨は立っていた。大きく掲げられた看板を見て、頬を引き攣らせながら呟く。

「まさか本当にやっていたとは……桃の奴、正気か？」

その看板には

『中国武術の至宝！ 敵娜亜羅と梁山泊展！！』

と書かれていた……来る途中で買ったチョコバナナを、思わず落とすことになる。

態々千雨が重い足を引き摺って此处に来たのには理由がある。それは例の懸賞金を何とかしようと、知り合いを頼ってここまで来たのである。

約6000万円もの賞金は、身の危険を感じるには充分な額である。狙撃、毒殺なら何とかなるが、家族や知り合いを人質に取られては如何ともし難い。

だから知り合いを通じて、中国武術界に話をつけてもらおうと考えたのだ。

この問題の核心は長谷川千雨が《日本人》である、という点が《中国人》の面子を潰している事だ。だがもし長谷川千雨の師匠等上位存在が《中国人》だったら？ 多分《中国人》の面子は何とか保たれる事になる……この場合には『だったら何で中国人が習わなか

「つたんだ？」等の疑問は無意味である……必要なのは『やつぱ俺ら中国人suggee!!』と思えるかどうか、なので事実はこの次となる……」

という訳で此処に来ている中国武術界の重鎮——巖娜亞羅の大僧正と梁山泊の首頭から話を付けてもおうか、と思い入場券を買い中に入ろうとしたら

「おお、千雨ちゃんもここに来たアルカ!？」

……何故かというか、まあ当然というか古菲が並んでいた。話を聞いてみると

「武術家として一度は見ておかないとネ……これは当に中国武術の至宝ネ! 本国でも見ることは難しいのに、ワタシ幸セアルヨ」

と、はしゃいでいた。

ちなみに千雨と古菲の関係だが、千雨が諸事情により登校出来なかった際、高畑先生が『身内の方が病気になったので、看病の為帰宅している』事にしたらしい。

古菲はそれを聞いて『なーんだ千雨ちゃん、口ではあんな事言ってもホントは良い人ダタネ』と壮絶な勘違いをしてしまい、あれよこれよという間に『千雨ちゃんは朋友ネ!』という関係になっていた……バカには勝てないようだ。

それに千雨は結構押しに弱かったりする……まさかこんな形で『中学校で友達何人かできるかな?』作戦が成功するとは予想だに出来なかった……まあ実際つき合ってみると、真っ直ぐない奴で一

緒にいて気持ちいい。やはり盾代わりに使い捨てにしないで正解だった。

千雨が此処に来た理由を聞いても「ふーん、千雨ちゃんも大変ネ」と自分が懸賞金を貰える事など、考えてもいないようだ……どこぞの守銭奴とは大違いである。

「と、いうことは千雨ちゃんはココの方々と知り合いなの力？」

目を爛々に輝かせて聞いてくる古菲に、千雨は『ああ……』と答えるしかなかった。

博物館の中に入ると、思ったより入館者は少なかった。千雨達は少し疑問に思いながらも関係者を探す。一人梁山泊の関係者っぽい係員を見つけ『泊鳳に会わせる』と言ったが『身分を証明する物を見せてもらわないと……』とやんわり断られる。

千雨としても他の人を探すのは面倒なので、身分を証明する何かを考えている内

「ああ、アレがあるじゃん」

と思いつき ジャッキン！ と蛇轍槍を取り出した。周りがドン引きする中、係員は真っ青に成りながらも「し、首領たちはこちらです！」と態度を変え案内してくれた。矢張り彼らにとって《伊達臣人》は最重要人物であり鬼門であるようだ。

「千雨ちゃん、もしかして……毎日ソレ持ち歩いているアルカ？」

蛇轍槍を指差し、やや探るように聞いてくる古菲。千雨は気にし

た様子も無く答える。

「まあな、もしマツポに見つかっても『これは菜切り包丁です』で逃げ切るつもりだけど……」

「イヤ、流石にソレは無理じゃないカ？」

古菲のツツコミも気にせず千雨は歩いていくと、視界に見覚えのある顔が並んでいた。

「おい、朱鴻元、泊鳳、久しぶり」

千雨が声を掛けると

「おお千雨か！ 久しぶりだな」

そう真面目に答えたのは巖娜亜羅の朱鴻元大僧正

「千雨かー！ 背は伸びたようだが、胸はデカくなったか？」

……このふざけた事を言ったのは梁山泊の首領 泊鳳

最初の方はガチガチに緊張していた古菲を紹介したり、他の連中が今何してるのかと話したりしていたが、話が千雨の懸賞金の話になると、二人とも真剣な顔で考えだした。

「とりあえず、王大人には話をつけたんだが、出来れば二人からも働きかけてくれれば、こっちも安心できるんだけど……」

千雨の言葉に二人は頷きつつ

「まあ、こちらとしても、お前を助ける事に異論はない。手を貸そう」

朱鴻元のこの発言に千雨は頬を緩ませたが

「とはいえ……そうなると千雨にはもっとワシ等との絆を深めてもらわんと」

泊鳳の言葉に千雨は首を傾げる。

「だから千雨よ、ワシと結婚しよう!」

「400m以内に近寄るんじゃないねえ、このロリコンが」

泊鳳の申し出を千雨は拒否した。

「ならば千雨よ、蔽娜亜羅の秘術である肉毬跳砲を会得してくれ」

「乙女にナニをさせる気だ、この糞野郎」

朱鴻元の提案を千雨は拒絶した。

二人は千雨の発言を気にせずに

「ならば、知恵を貸して欲しいのだが……」

千雨としても何かしてやりたい気持ちはあるので「力になれるなら……」と承諾した――後で後悔したが。

要は来客数が予定より少ないのを、どうにかして挽回したいということだ。

「で、原因は分かるのか？」

千雨の問いに、朱鴻元が答える

「うむ、ここに来るまでに見たと思うが、国立西洋美術館で開催されている『ギリシャ12神と古代拳闘展』が盛況のようで、其方に客が取られているようだ」

「……『ギリシャ12神』か、あんまり聞かねえ名だが、何者だ？」

「噂によると淤凜葡繡十六闘神から分離した連中らしく、拳闘中心のスタイルと言われている」

朱鴻元の説明に泊鳳が続く

「兎に角、展示物が派手でのう……なんでも目玉として『紀元前より移動用として愛用している黄金のヘリコプター』も展示しているらしい」

くらっ

千雨は思わず眩暈がした。

「真顔で言つてのける奴等が酷いのか、気付かない奴等が馬鹿なのか……」

色々と言いたい事があつたが、現実には千雨の想像以上に狂ってい

たようだった。

「我々も只、指を咥えて見ていた訳ではない。来客数UPの為、アイドルユニットを結成したのだが……結果としては逆効果だった……」

「なん……だと？」

とても聞き逃せない名詞が出てきたので、千雨はスルーすること
も出来ず、思わず突っ込んでしまった…… 厳娜亜羅と梁山泊、両者
とも女っ気は皆無だったはずだが……

「おう、梁山泊が結成したのは『RZP48』というユニットでな、
48人それぞれが奔馳旋裂球と跳蚤器をつけてクルクル回ったりピ
ョンピョン跳ねたりしていたのだが…… 全員不慣れだった為、目を
廻してぶっ倒れたり、むち打ちになったりと、散々な結果に終わっ
てしまった……」

「駄目じゃん……」

千雨はこう言うしかなかった。

「厳娜亜羅からも763（ナムサン）PRO ALL STARS
というユニットを結成した。12名の囀笑法師が、座禅を組んだ状
態で踊ったりしてたんだが…… 子供が泣き出したり、お年寄りが救
急車で運ばれたり、トラブルが続出してな……」

そりゃあそうだろうな…… 千雨はその状況を想像しただけで、
寒気がしたのだから、現物を見ちゃったらトラウマものだろう……
だがとりあえず……否、何よりも先ず言わずにおれない事を千雨は

突っ込んだ

「そこは13人で逝けよJK……」

「と、まあこの通り、此方としても一発逆転を狙いたい。そこで千雨よ、其方のお嬢さんとアイドルデュオを組んで欲しいんだが……」

「……先ずはアイドルから離れた方がいいんじゃないか？」

千雨の最もな意見を聞き流し、泊鳳は続いて話す。

「千雨も黙ってりや可愛く見えるし、そちらのお嬢さんも初々しくてプリティじゃし」

「『黙ってりや』だけ余計だ」

千雨はきつちりツツコミを入れて

「そ、そんな……プリティだなんて……照れるアルネ！」

古菲は満更でもない表情で照れた。何と無く嫌な方向に進んでいくのを察知した千雨は、細かい問題点を挙げていき中止にしようと企てた。

「第一、今から準備を始めても開催期間中に仕上がるのか？ 衣装は？ 曲は？ 振り付けやら舞台やら準備だけで終わっちゃうんじゃないか？」

千雨の問題提起に誰も反論できなかったが

「それには及ばないネ……」

自分達以外の誰かから、思わぬ発言が飛び出た。

「む、何方かな？」

「おーこれまた華のある子が来たのー」

「超デメエ！ 何しに来やがった!？」

誰一人気付く事無く、その場に登場したのは千雨達のクラスメイ
ト 超 鈴音——片手で在りもしない髪を掻き揚げる仕種は妙に似
合っていて、何故かム力つく。超は千雨の攻撃的な視線も気にせず、
話を続ける。

「こんなこともあるつかと、アイドルデビューに必要な一式、全部
揃えて来たヨ」

「……オマエが普段何考えているのか、気になって仕方がねえよ…
…」

色々と言いたい処だが、千雨的には超に首根っこを押さえ
られている以上、従うしかない。

千雨としては不本意であったが、知己への助力の為、懸賞金消滅
の為、期間限定アイドルユニットとして《大宮小町》はスタートし
た。

「みんなーーーーー！ 《大宮小町》の千世子でーーーーー！」

そう叫ぶのは超。噴水前に集まった沢山の暇……観客にマイクで挨拶する。こんな大勢の前で堂々と振舞う姿に、リーダーとしての貫禄を感じる。

「来てくれてアリガトネ！ れ、麗子アルネ！」

若干照れ気味に話すのは古菲。それでも慣れてきたのか、笑顔を振りまいたり手を振ったりと、アイドルらしく振舞っている。

「きょくはー みんなに会えてDeath子 チョく嬉しいDeath子！」

三人ともアイドルらしいフリフリのドレスを着て、武術経験者らしいキレのある踊りとステップで観客を魅了する。

千雨は最初、このネーミングとキャラ設定に殺意を覚えたが、やっている内に慣れていった、癖になった、『何か』に目覚めてしまった。この千雨ノリノリであった……

「それじゃあ私達のデビュー曲を聴いてくだサーーイ！！ 『千世子・麗子・Death子』」

♪千世子・麗子・Death子！ 千世子・麗子・Death子
千世子・麗子・Death子 千世子・麗子……Death子♪

何処のパフォームだよ！ と突っ込みたくなる歌詞にテクノっぽい曲調が当然会う。この後『漢女よ大志を抱け！！』を歌って午前の部は終了となった。

昼食を兼ねた休憩時間中、ふと我に返った千雨は鬱な気分になって呟く。

「……死にたい」

と言いつつも、態々持ってきた精養軒のハヤシライスを流し込んでるのは流石である。

「千雨ちゃん、何事も諦めが肝心ネ」

このような事態にした張本人が平然と言い放つ。千雨の脳内で『フラッシュ・ピストン殺虫パンチ』が炸裂している最中、急に外が騒がしくなった。

「……何だ？」

イラつきが最高潮に達した千雨が、忌々しげに呟いた時、泊鳳があわただしく入室してきた。

「千雨大変だ！！ ギリシャ12神の奴等が殴りこんで来た！」

事態は予測不能なレベルとなつてく……

「……………何でさ？」

流石に訳が判らなさ過ぎなので、簡潔に理由を聞いてみると

「どうやら、人気が上がってきたワシ等が気に入らなかったみたいだ。ウチの展示物を滅茶苦茶にしてやる、と息巻いてやがる。それに元々奴等は東洋武術を馬鹿にしていたからな……………」

「なんて沸点の低い奴等だ！」

自分の事を棚に上げ、千雨は言い放つ。そして徐々に機嫌が良くなっていく。

「真に不本意ではあるが！ 偉大なる中国武術に降りかかる厄災は例え我等のような若輩者であつても身を挺して立ち塞がらなくてはならないのだ！」

「……………で、千雨チャン本音ハ？」

「サンドバックが態々来てくれるんだぞ！ 凹つてやるのが礼儀つてもんだ。ククク……………」

超の問い掛けに、千雨は思わず本音をぶちまける。そのヤル気満々の眼差しを見て、泊鳳が呟く。

「……………千雨つてホント、兄貴にそっくりだぜ……………」

「ん？ 山艶だったっけ？ よせよ、泊鳳、いくらアタシでも、あ

あゆつ美形にゃあ叶わねえぜ」

千雨の満更でもなさそうな返答に、泊鳳は何も言い返さなかったらしい……

上野国立博物館入り口に、最終防衛ラインとして朱鴻元が立っている。その眼前、道路を挟んだ向こう側で乱闘は続いていた。運が悪いくことに今回は展示が目的だった為、腕の立つ者は少なく、乱闘は押され気味である。

「かくなる上は……この私が！」

焦りを隠しきれない言葉が出た時、何処からとも無く声がした。

「おい朱鴻元！ 未だ終わってないだろうな！？」

どう考えても『手段』の為に『目的』を選んでいない発言である——当然これは千雨の声だ。

朱鴻元は ああつ と答えて眼前を指差す。それを見た千雨はニタァ と嗤い思わずジオン軍中佐のような台詞を吐いた。

「ククク……より取り見取り……」

そう言いつつ千雨は道路を一足飛びで横断し、とりあえず西洋人っぽい奴を蹴り飛ばした。

「ひっさーっ！ D e a t h子 長渕キーーーーク！！」

蹴られた奴は、後ろにいた数名を巻き込みながら吹っ飛んでいった。千雨が着地すると同時に パシャ パシャ パシャ とシャッターを切る音が響く。残っていた暇じん……ファンの人達が写真をとっているのを見て千雨は

「中国武術に仇なす者は、達磨大師に代わって……お・し・お・き・よー！！！」

例の美少女戦士っぽいポーズで千雨は決め台詞を言う。可愛いように見えても、指は鞞家兜指愧破なので物騒な事この上ない。

おーー！ と言う歓声と共に パシャ パシャ パシャ と再びシャッター音が耳に入る。

「D e a t h子さーん 視線御願いしまーす！」

こんな掛け声が聞ける程、緊張感が薄れていた。

「ふざけた真似したがって！」

そう怒鳴りながら、殴りかかって来る奴もいたが千雨は

「ふっ………兜指関節砕！」

と叫び、カウンター気味に親指を、相手の肘関節に打ち込む。

メキッ

肘が逆方向に曲がり、余りの痛みに絶叫している敵に対し

「失せな三下！ 圓明流 旋^{つむじ}」

千雨は連続回し蹴りをかまし、敵を10メートル程吹っ飛ばした。最期にフラメンコのようなポーズを決め、千雨はカメラ目線でドヤ顔を決めた。

Death子！ Death子！ Death子！

周りに響くDeath子コールが更に千雨をドヤ顔や絶頂に導いていく——コイツは癖になるぜ——千雨は心の中で叫ぶ。

「台東区一かわいいよ——！」

なんてコールすら聞こえてくる程、異様な空気が満ちていた。

「うわー 千雨チャン、トンでもない事になったアルヨ」

そう話す古菲に、超は何も反応せず

「……ここでコスプレに目覚めるとハ……これが、歴史の修正力な
の力？……」

この呟きは誰の耳にも入る事は無かった。

戦いの趨勢は千雨側に傾いていたが、敵の首魁らしい男は、まだ

平然と佇んでいる。

「敵将ゼウス！ 討ち取ったりー！」

そう叫びながら敵娜亜羅の拳士が掛かって行っただが

「ふっ……雑魚が死にに來たか！」

嘲笑を浮かべて叫ぶゼウスは指に《何か》をはめ、拳士に向かって拳を向ける——只それだけで拳士は動けなくなつた。

「貴様の様な下郎には勿体無いが、我等ギリシャ12神の秘宝に平カイザーナックル伏すがいい！！」

「拙い！」

ゼウスという男の拳から滲み出てくる《魔力》のようなモノに危機感を覚えた千雨は、メリケンサックを付け、ゼウスの前に割つて入った。

「喰らえ！ マツハ・パンチ！！」

放たれた千雨のストレートに

「ふん、無駄な事を」

千雨の行動を嘲るかの如く、ゼウスは只、拳を合わせた。二つの拳がぶつかり合うと

パリーン

……千雨の、マグナムスティール製のメリケンサックが粉碎された。

「……な！」

「だから言っただであろつ、無駄な事だと！」

驚愕する千雨に対し、さも当然の如くゼウスは言い放ち、仰々しく構えて渾身のフィニッシュブローを撃つ。

「喰らえ！ ゴッドインフェルノ！！」

BACK O O O O N！！

一見普通のアップパーカットに見えるが、神々しいまでのオーラが拳に纏わりつき、触れてもいない千雨を天空まで舞い上げる。

「ガッ！！」

まさに『車田ぶっ飛び』で吹き飛ばされた千雨は、空中を錐揉み状態で飛んでいき、遙か後方、国立博物館の本館に落下した。

ドーンー！

コンクリート製の天上を突き破って落ちた千雨は

「……くっそー！ 死ぬかと思ったぞ！！」

——言うまでもない事だが、普通は死んでいる。千雨は自分に冷静になるよう念じ、事態の打開方法を模索する。

「さて、このままじゃあ勝ち目が……」

あの《カイザーナックル》をどうにかするには《魔法》が不可欠である、だが今の《ソウルジェム》の状態では、とてもじゃないが使う訳にはいかない。何か良い手は……ん？

千雨がそう考えていた時、コンクリートの瓦礫の中に、ポツリとある《刀》が目止まる。その佇まいから滲み出る清らかさと、《魔力》とは違う《霊力》と言うべき《力》に目が吸い寄せられる。

千雨はふらっと《刀》を手に取り

チャキッ

親指で鯉口を切り、右手でゆっくりと鞘から抜き、眼前に掲げる。その刀身から溢れ出る《凄み》は傍若無人が服を着ているような千雨さえも圧倒する。

「こいつは……スゲエ……」

勝てる！ これなら勝てる！ サンクスまどか！ こんな所に《刀》を置いてくれて！ そう千雨は心の中で叫ぶ……当然それは、まどかのした事ではない……

「桃に抜刀術のイロハを教わつたという良かったぜ……クククあの毛唐、10倍にして返してやるぜ！」

千雨は納刀してベルトの左側に差し、ダッシュで戦場まで戻って行った。

ゼウスそして朱鴻元・泊鳳 この三人は博物館前の道路を挟んで対峙していた。

「どうした、二人掛かりでもかまわんぞ」

ゼウスの挑発にも二人は動じず、朱鴻元は静かに答える。

「馬鹿を言え、そんな事をしたら『アタシの獲物を横取しやがって！』と怒鳴られてしまっわい」

「そうじゃの、アイツときたら塾長のように無茶するし、アニキのように執念深いし……」

同意するかのように泊鳳が韜晦する。すると

「泊鳳、テメエ悪口言ってんじゃねえだろうな！」

と叫びながら《誰か》がやって来る。当然千雨である。

バサッ

勢いにつて千雨は高さ3 m程の植込みを飛び越え、ゼウスの横に着地する。腰溜めに構え、左手で刀を固定し、右手を柄に添える――居合いの構えでゼウスを睨みつける。

「避けれるモンなら避けてみな！ 飛天何とか流 三頭龍閃！」

そう叫び千雨は、超高速の抜刀術でゼウスに斬りかかる。

「無駄な足掻きを！この《カイザーナックル》の前ではいかなる……」

ゼウスは余裕の見える顔で、右ストレートを放つ。千雨の斬撃を《カイザーナックル》で打ち砕こうとしたが

キーーーーーン

《刀》は打ち碎かれる事は無く、双方の攻撃は拮抗している……否、千雨の馬鹿力の分《刀》の方が押しているといえよう。

「ば、馬鹿な！」

初めて驚きの表情を見せるゼウスに、千雨は ニヤリ と嗤い、こう言い放つ

「調子に乗り過ぎたな！ その程度の武器なんざこの国じゃ、そこから辺に転がってるんだよ！！」

断じてそれは違う。

「うーりゃーーーー！！」

千雨の雄たけびと共に刀が振り抜かれ、ゼウスは体勢を崩す。

カーーーーーン

それと共に《カイザーナックル》が吹き飛ばされ、地面に転がる。

「し、しまった！」

「オラオラ！ 余所見している暇はねえぜ！」

ゼウスは動揺するが、それを見逃す千雨ではない。

ブーーン

刀と同じスピードで《鞘》が迫ってくる。

「くっ！」

当たれば只ではすまぬ、とゼウスはスウェーバックで回避する。
千雨もそこまでは予想済み、と

「最後の一発！」

ゼウスはそれを聞き、次の攻撃に備えた。 右か？ 左か？ それとも…… そう考えた時、目の前の千雨がいきなり 消えた。

「……！？」

いや、良く見てみると、千雨がその場で前宙をしたただけであり、頭の位置に脚が来ただけで…… 上か！

ガシン！

そしてゼウスは十字受けで、千雨の踵落しを耐えようとする。 『

これを！ これさえ凌げば……』 そう考えてゼウスは足を踏ん張り
衝撃を受け止める。『よし！ これから反撃だ……』 そう考えたゼ
ウスに

ゴン！

という衝撃が頭頂を襲い、そのまま意識がブラックアウトしてい
った………

「ふっ…… 『最後の一発』が一撃だけだと誰が決めた！（きりっ」
…… タネを明かせば『最後の一発』が《千雨圓明流 斧鉞》だった
ということだ………

「………」

「………」

「………」

「さすがだな千雨、みごとにあいてのうらをかくこうげきだ………」

朱鴻元が棒読みの賞賛を送った。

他の3人の『これっていいのか？』という視線にも気付かず、千
雨は勝利のポーズで撮影会を開始した。

中国武術界との話し合いは問題無く纏まった。重鎮とも言つべき
3人からの提案に加え、デカイ口を叩いていた《ギリシャ12神》
をぶちのめした事も大きく、懸賞金の一部が厳娜亜羅、梁山泊に後
進の育成という名目で譲渡されたりもした。

「まあ今回は色々あったけど、トータルで大儲けできた、かな……」

千雨の儲け分は

・戦利品のカイザーナックル

・新たな趣味

・拾った刀

となる。

「しかし桜咲の奴、この刀の鑑定を頼んだ途端に卒倒して寝込むなんて……もしかしてコイツ妖刀なんて事はないだろうな？」

まあ、その辺は後日考えよう　そう思った千雨は、一つ風呂浴びようと浴場に向かった。BGM代わりにかけていたラジオをそのままにして……

これは長谷川千雨の平凡な一日、『嵐』が訪れる前の貴重な日常の一コマである……

『……続きまして、先日上野公園で発生した大乱闘の際、紛失したと思われる『童子切安綱』の行方は……』

幕間巻

極武髪で死守（後書き）

ミタキガハランジョークその2

F市のNGO広報担当A氏

アニメ製作会社Sの版權担当B氏

B「それではお使いになられるキャラクターは、こちらのKでよろしいですね？」

A「その予定なのですが……ウチ的に犯罪行為とかNGなんです、この子大丈夫ですよ？」

B「いえ、どちらかと言うと、窃盗の常習犯でして……」

A「それは不味いな……それじゃあこのSって子の方は？」

B「ああこの子は、通りすがりのホスト殺害の容疑がかかってますね」

A「……それじゃあこのM（巨）の方は？」

B「M（巨）はこのKを殺してますね」

A「……M（虚）は？」

B「M（虚）はM（巨）を殺しました」

A「……このHって子でいいです」

B「この子は消防法違反と銃刀法違反に無免許運転、米軍基地から重火器等強奪、爆破事件の実行犯……ついでにM（虚）も殺してますね」

A「これって……魔法少女もののアニメですよ？」

B「ええ、そうですか？」

A「……Kで御願います……」

第12話 S l e e p i n g . . . B e a u t y ?

もう夜中の10時だというのに、麻帆良学園は休む事無く活動している。その中心とも言える理事長室で、独り高畑は佇んでいた。

「さて、どうなるのやら……」

高畑の独白は、この事態を《知る》者全ての想いである。色々と問題があったとしても、《長谷川千雨》の実力を把握し、場合によっては交渉を行う……ただそれだけだったのに、今では世界の趨勢すら揺るがす問題へと発展した。

『全て無かった事にしたい……』それが高畑の偽り無い気持ちだった。だがそういう訳にはいかない、それは許されない——大人として、担任として。

ドン！

激しい音を立てて扉が開く。本来入室を許可されていないのだが、本人はそんな事一切気にせず応接セットに腰掛け、茶菓子を貪る。

「おい！ あのパカの調査に何時までかかるんだ！！」

知らぬとはいえエヴァンジェリンは、世界レベルの重要機密を『さっさと言え』と乗り込んできたのだ。戦闘の傷跡が顔の左側に残っているのか、左目を中心に包帯が巻かれていて、右目も本調子では無いのか眼鏡を掛けている。それでも苛立ちを滲ませ『さっさと吐け』と圧力を掛けてくる。

「エヴァか……茶々丸くんの容態はどうなんだい？」

「超が言うにはまだ暫く掛かるらしい。今日も徹夜だと嘆いておつたわ……それよりも奴の方だ！これ以上掛かるのなら、私の方で調査するぞ！？」

そう言つてエヴァンジェリンは指から爪を シュツ と伸ばす。
どうみても素手で解剖する気満々である。

『勘弁して欲しい』と高畑は考え、数秒もしない内に『まあ、いか』と諦めた。どうせ黙つていても、無理矢理聞き出すだろうし、早い内に『こちら側』に引き摺りこんで損は無い。

そう考えた高畑は理事長の机に回り込み、引き出しの中から、孫のお見合い相手の写真を取り出す。怪訝そうなエヴァンジェリンを余所に高畑は写真を『剥がす』と、その写真の裏側には何枚かのレポート用紙が付いていた。高畑はそれをエヴァンジェリンに渡す。

エヴァンジェリンは何も言わずレポートを読み始める。彼女も『これは只事ではない』と気付いたようだ。

・長谷川千雨の肉体には《魂》が存在しない。《魂》は卵型のアクセサリー（以降これを甲と呼称する）に移されている。

・長谷川千雨の肉体は甲からの指令の受信機能と、脳内の記憶、戦闘用に強化された身体能力のみ残されている。

・長谷川千雨は甲に内蔵されている《魂》を触媒として《魔法らしき事象》を起こせる。

・《魔法らしき事象》は詠唱不要で、攻撃および防御力の上昇、武器の具現化と変形などが確認されている。

- ・《魔法らしき事象》を行使することに《魂》または精神力を消耗し、その度合いは甲の色彩で確認出来る。（黒い淀みとして）
- ・上記の消耗が限界を超えると最悪『死』に到ると予想される。

「ふん、この程度ことしか解明出来なかったとは、明石の奴、妻に先立たれて腑抜けたか？」

エヴァンジェリンの言い様に、高畑は不快感を露にし

「それは彼女について問い合わせがあった際、公表する『表向きの』回答だよ。本当の調査結果は……」

高畑はそう言い、エヴァンジェリンの持っているレポート用紙を掴み、こう詠唱する。

『最重要機密閲覧申請・申請者——タカミチ・Ｔ・高畑』

そうするとレポート用紙が変色していき、書かれている内容も変わっていく。

「……そこまでの程の事なのか？」

やや食傷気味に呟くエヴァンジェリンが、新しく浮かんできた文章に目を通す……

- ・長谷川千雨に施された施術、改造等は一切解析不能である。現存する術式に該当、類似するものは無い。
- ・よって、長谷川千雨を普通の状態に戻すことは現状不可能である。

・ 甲は《魔法らしき事象》だけでなく、心労、ストレスなどでも消耗していく。

・ 甲の淀みは自浄することではなく、外部から何らかの処理を行わない限り、溜まっていく一方である。

・ 甲の淀みが限界まで達すると、甲は劇的に変化する。

・ 甲が限界まで達すると、淀みが《魂》を触媒として高純度のエネルギーへと昇華する。

・ そのエネルギー量は天文学的なものとなり、やり様によっては《魔法世界》を数百年維持可能と思われる。

・ 甲からエネルギー発生後《魂》は消滅又は変質し、最早長谷川千雨としての容や思考、記憶は消滅すると思われる。

これらの調査結果から判断すると、長谷川千雨に施された処置は、戦闘を目的としたものではなく、エネルギーを発生させる事が目的で、その為に戦闘等させて消耗を促すという、極めて非人道的な処置であると言わざるを得ない。

「……何とまあ、特攻兵器だと思っていたら、実の処使い捨てカイロだったとはな」

エヴァンジェリンはあんまりな寸評の後、気になったことを高畑に尋ねる。平然としつつもレポートを握る手は微かに震えている……恐らくは怒りで。不死者として、命を狩る者として、この《命》の扱い方はとても許容出来るものではない。

「処で、ジジイは何処行った？　こんな時だっていうのに顔も見せやしない」

「学園長なら、明石先生の所にいつているよ……」

高畑の回答にエヴァンジェリンは首を傾げ

「何の為だ？ 再調査でもするのか？」

エヴァンジェリンの問いに高畑は首を振り

「いいや……………記憶消去の為だ」

その答えにエヴァンジェリンは ハツとし、何かを思い出すように頷く。

「成る程……………奴はお前以上に《向こう側》との接点……………それも妻との関係上、諜報関連の知り合いが多いからな。おまけに本人は実直な性根だから……………直ぐに怪しまれる、と？」

エヴァンジェリンの答えに高畑は頷く。

「このレポートを持ってきた時も……………そりゃあ酷い有様だった。その道のプロじゃなくても直ぐに気付く『重大な何かを隠している』と。そうなりやもうバレたも同然だよ……………」

エヴァンジェリンはレポートを読み直して納得する。『非人道的に『極めて』と付けるとは感情移入しすぎだ。教授のくせにこんな書き方では『可』は貰えないだろうに……………

だが心情は理解できる。自分の妻が命を懸けて守ろうとした《魔法世界》を救う手段が出てきたのだ……………自分の娘のクラスメイトを生贄に差し出せばだが……………エヴァンジェリンとしても責める気はない、多少蔑むかもしれんが……………

「それじゃあこの事を知っているのは？」

「つい先程、僕と君そして学園長の3人だけになった」

正確にはあと二人……超と葉加瀬が、この眼鏡に内蔵されたカメラ越しに見ている筈だ。あの二人はこの情報の収集と検分で『徹夜する』予定になっていた。まったく、『速やかなる茶々丸の修復』が条件とはいえ、とんでもない仕事を引き受けてしまったな……エヴァンジェリンは少し己の短慮を呪った……まあこんな事態を予想出来る方がおかしいのだが。

と同時に超がこれを知ってどうするか？ が気になってきた。喜ぶだろうか？ 苦しむだろうか？ 恐らくは後者だろう。長年悩み、決断し、色々と切り捨てながら此処まで来て、今更『新たな希望』など性質の悪い皮肉にしか感じない。『決心』した後に揺らいだら、先日の長谷川千雨のような無様をさらす事になる。超はその位は分かっているだろう、だがそれでも悩まずにはいられないのが今回の事象の悪辣な処だ。エヴァンジェリンが帰りに超の顔を覗いておこう、と思った時

ギイ

と音がして扉が開き、学園長——近衛近右衛門が帰ってきた。

「学園長、明石先生はどうなりましたか？」

「うむ、問題なく終わったよ……高畑君、明石君からの伝言じゃ『一人逃げる事になって済まない。僕が言えた義理じゃないが、長谷川君の事を頼む……裕奈の次位で良いから』とな」

ふん！ とエヴァンジェリンは気色ばむ。テンパっている奴のジ
ョークなど笑えやしない、と。

「なんじゃエヴァ、来ておったのか？」

と学園長が尋ねたが、エヴァンジェリンはそれを無視して詰問す
る。

「それよりジジイ！ あのバカをどうするつもりだ？」

もし舐めた扱いをするようなら……と怒気が滲み出る声にも一切
動揺せず、学園長は言う。

「別に如何こうする積もりは無い。只学生らしく学業に邁進してく
れば、それで充分じゃ」

余りにもあっさりした答えに、エヴァンジェリンは呆氣に取られ
る。

「……因みに聞くが、もし《あのバカ》の件が《向こうの》奴等に
バレたら、どうなると思う？」

探るようなエヴァンジェリンの問い掛けにも、学園長は忌憚なく
話す。

「まあ最初は『引渡の要求』から始まり、言うことを聞かぬとなれ
ば……《関東魔法協会》への宣戦布告もありうるのお……」

「……そこまで判っていないながら、庇うというのか？」

『本音はどうなんだ?』と言いたげなエヴァンジェリンの視線に苦笑しつつ、学園長はこの問題の複雑な点を打ち明ける。

「もし長谷川君を《向こう側》に引き渡したとすると、今度は《関西呪術協会》が黙つとらん。『生徒を生贄に差し出す学校に、次期当主を預けられない』と木乃香の引渡を要求されるだろう……そうなればムコ殿でも抑えられぬ……ここに来る事に賛成した手前、木乃香はムコ殿から離されるのは間違いない。その結果は……」

その言葉にエヴァンジェリンが続く。

「関東vs関西の旗頭として、オマエの孫娘が担がれる……か」

つまりどちらに転んでも争いは避けられない。ならば『このまま知らん振り』というのも《関東魔法協会》のTOPとしては正しい判断とも言える。

「いつその事、全て無かった事にしたらどうだ?」

聞く者によれば『悪魔の誘惑』のように聞こえる提案を、学園長は『否』と答える。

「もう手遅れじゃよ。学園の魔法関係者全員の記憶操作など、やった処で矛盾と歪みしか生み出さぬ。それに超君達が全力で阻止しようとするじゃろう……違うか?」

学園長はエヴァンジェリンの顔を覗き込む。その目を見た彼女は『ちっばれていたか……喰えない狸め』と心の中で悪態をつく。

もつと本音を言えば、学園長達にはまだ《希望》の種とも言える人物がいたので、生徒をスケープゴートにする気はさらさら無かったのであった……エヴァンジェリンに言う事は『まだ』できなかったが……

「とは言え、このまま放置するには、あの力は危険過ぎる。彼女のとなりも刹那的すぎる。まあその辺はこの後、話し合ってみなければ、決める事はできないじゃろう」

そう言つて学園長は《ソウルジェム》を取り出す。まだエヴァンジェリンの《氷》に包まれているが徐々に封印が解けているのか、最初の頃に比べて輝きが増していた——だがその中に漂う黒い《淀み》が、見る者の心を沈ませる——

3人は揃つて地下の治療室に向かっている。長谷川千雨が学校を休むようになって早5日、『親の看病の為』と高畑が誤魔化してきたが、それも限界になってきた。彼女と話し合つて『これから』の事を話さないといけない。

フーイン

自動ドアをくぐると、そこは十畳程の個室になっていた、空気がヒンヤリとし、小さな蛍光灯が一つのみで、薄暗い印象を拭う事は出来ない中、生命維持装置に括り付けられた《長谷川千雨》が静かに眠っていた。見た処、外傷らしきものは見当たらなかった……上手く治療出来た様だ。

生命維持装置のポンプ音のみ響いている中、3人は彼女を観察する。診察用の患者衣を着ているが、彼女の心電図は反応していない――それもその筈、心臓が動いていないからだ。このままだと肉体が壊死してしまうだろうが、身体中に備え付けられたポンプが、血液と酸素の循環を促していた。

学園長は《ソウルジェム》を取り出し《長谷川千雨》の傍に置いた。《ソウルジェム》を包んでいた氷が急速に溶けていく。

「……本当にこれで生き返るんじゃないかな？」

未だピクリとも動かない《長谷川千雨》を見つめながら、学園長はエヴァンジェリンに聞く。静かに目を閉じ、当に『眠れる森の美女』と言える雰囲気《長谷川千雨》から漂っている。高畑は『ホントに喋らなきゃ可愛い娘なのになあ……』と心底思った……絶対口には出さなかったが。

「知らん。ダメならダメで《アイツ等》も諦めがつくだろう……」

かなり無責任な事をエヴァンジェリンは言い放つ。流石に二人が呆気にとられた時、《ソウルジェム》の氷が溶け、一部が剥き出しになった。

その直後、《長谷川千雨》の貌に サァー と赤みが差し、眼をパチリ と覚ます。

それを見ていた3人が驚いているのを余所に、千雨は眼をキョロキョロと回し、大体の状況を把握するや否や

「霸ツ―！！！」

そう気合を入れ、身体のパネだけでベットから飛び上がる。それと同時に身体中の管を切断し、針を引き抜きつつ3人から離れた所に着地する。その眼光は鋭く、3人の一挙手一投足を見逃さないだろう。

「待ちなさい長谷川君、落ち着くんじゃ……」

学園長がそう声を掛けようとすると、千雨は ガクン と跪き、今にも倒れそうになった。

明らかに衰弱した様子を見た高畑が『大丈夫かい?』と声を掛けようとしたその時、千雨の呻くような叫びが聞こえてきた。

「クツ! 血だ……血が足んねえ……何でもいい! じゃんじゃん食いモン持って来いや!!」

この時『結構余裕あんじゃねえか?』と3人の意見が一致した。

第13話 情無用、命無用の魔法少女 この命、熱量30億J也

「ひひは、ふいほんでふはへふほほふはほ！（いいか、食いモンで釣られると思うなよ！）」

出された料理をガツガツ食いながら千雨は反論する。当にカリオストロの城のルパンを彷彿とさせる喰いつぷりは、見ている者を感じさせるが、おさんどんをさせられている高畑にしてみれば『なんで僕が……』という気持ちは拭えない。

舟皿を掲げ、たこ焼きを口に流し込む。表情は一応、満足そうだ……どうやらこれがデザートだったらしい……頬をリスのように膨らませ、モグモグさせている様子を見てエヴァンジェリンは『一寸萌えるかも？』と思った事は内緒だよ。

千雨が落ち着いてきたのを確認した学園長は、静かに話しかける。

「先ずは今回の件、謝罪させてもらおう……すまなかった」

そう言って学園長は立ち上がり、頭を下げた。

「ん？ ああ気にすんな、喧嘩売ったのは其方だが、判つてて買ったコツチにも責任はある」

千雨はそう答えた。これで今回の件については手打ち、という事になる。とはいえ、学園長にタメ口の中学一年生というのも若干問題であり、担任である高畑は頭を抱えている。

見た目と違い人格者なのか、千雨の口調を気にする事もなく学園

長は莞爾と笑う。だが千雨としては一言言っておきたい事があった。

「学園長はああ言っただけ、その奴は謝意とか反省しているようには見えないんだが……どうなってんの？」

そういつて千雨はエヴァンジェリンをちらつと見る。それに気付いたエヴァンジェリンはピクツと額に血管を浮かせ千雨を睨みつける。

「いや、エヴァに責任はない。全てはワシの軽拳が原因じゃ」

学園長のような年長者にそこまで言われれば、流石の千雨でもこれ以上は非難できない。

「まあ、じゃあそういう事で。でも気を付けた方がいいぜ、ペットの放し飼いは、飼い主の責任になるんだから」

ピキピキ

エヴァンジェリンの米神に血管が浮き上がり、表情も険しくなる。千雨もそろそろ頃合と思い、からかうのを止め

「で、アタシにどうしろと？」

と3人に問いかける。向こうの手の内を見ておかないと、『どこまで』情報を晒して良いのか判断できないからだ。

「先ずは、お互いの状況を理解し合うことじゃな。こちらの状況を話すと……」

そういつて学園長はこの世界の有様、学園の正体、魔法の基本知識、そして《向こう側》の魔法世界について話した。内容はばかりしているが、魔法世界が《エネルギー不足》であり、《ソウルジェム》を手に入れる為なら戦争すら起きかねない、と聞いて千雨は青褪めるが、学園長から自分の扱いを聞いて少し落ち着いた。只の情から匿われるのではなく、実利に基いての判断である事が彼女を安心させる。

全面的に信用する事は出来ないが、自分が眠っている時に、何も身体に仕込まれていない事が警戒心を薄れさせた。

「成る程……其方の状況は理解できました……態々気を使っていただき有難う御座います」

千雨は『信頼関係が少し築けました』という意思表示として、敬語で感謝の意を表す。やや安心して二人に対し、エヴァンジェリンは『うわ！ キモッ！』という顔をしている……ヤロー憶えている……だが綻んだ顔を再び引き締め、千雨は問いかける。

「順番として此方の話を進めたいのですが……その前に」

学園長を少し睨みつけて放しを続ける。

「《グリーンフシード》を返して頂きたいのですが……ああ《グリーンフシード》とは、この位の大きさの玉に、串が刺さっているような形状のモノで……」

千雨が《グリーンフシード》について細かく説明すると

「おお、すまない。眼が覚めてからのドタバタで、すっかり忘れて

おったわ」

学園長はそう言つて懷から《グリーンフシード》を取り出し、千雨に手渡す。千雨はそれを受け取り、疵等が無いのを確認すると安堵の表情を浮かべ、胸元でギュツと握り締めてからポケットに仕舞う。

学園長達は、この少女がするには珍しい年相応の表情と《嘆きの種》（グリーンフシード）という縁起でもないネーミングから不吉なモノを感じたが、この後の説明がややこしくなると思い、黙っていた。

「では改めまして、此方の説明をさせていただきます……」

そう言つて千雨は自分達の『正体』について大まかに説明した——幼い頃事故に遭つた際《自分以外の誰かが》自分に溶け込んだ事——その《自分以外の誰か》は此処とは違つ世界で《魔法少女》になつていた事——《魔法少女》とは謎の生物と契約した者の事——その契約は『一つの願い』と引き換えに《魔女》や《魔獣》と戦う義務を背負う事になる——だが実際は肉体そのものを改造され、尚且つ《魔女》を効率良く倒さないと《ソウルジェム》が濁り《グリーンフシード》へと変貌し、その結果《魔女》になつてしまうという怖ろしい、逃場の無い契約であつた事——《キュウベえ》の目的は『十代女性の希望と絶望の相転移の際、発生する感情エネルギー』の回収で、それを使って宇宙を活性化させていたという事——《ソウルジェム》の回復は《グリーンフシード》のみで行える事——などを話した。

だが《円環の理》については話さなかった。万が一《魔法世界》の連中に捕まつたとしても『エネルギーを発生できる』なら、その粗略には扱われないだろう。しかし『エネルギーを発生する前に消

滅』するのならば、誰も遠慮はしない。追い詰められた者は如何なる悪行も許容する。最悪、実験材料が研究用のモルモット扱いになるだろう。その辺は保険として押さえておかないと安心できない。

3人は話を聞き終わり、呆然としていた。まさか異世界の話が出てくるとは思わなかったようだ。その内、年の功かエヴァンジェリオンが『何を考えているのかは判らないが』険しい表情で千雨の方を睨む。その次に学園長が恐る恐る尋ねる。

「それでは……君の持っている……《グリーンフシード》はもしかして……友達の……」

『モノ』と言いそうになり慌てて言葉を濁した。千雨はその辺の機敏には気付かず

「いえ……そこまで仲は良くなかったんですが……」

やや語尾が震えていた。『やはり地雷を踏んでもうたかの……』と反省する学園長を余所に、エヴァンジェリンが質問する。

「おい長谷川、オマエは一体どんな『願い』でそんなカラダになったんだ？」

この質問を聞いて、千雨の表情は能面のように固まる。『オマエ空気読めよ!!』という二人からの視線を無視し、エヴァンジェリンは眼で『吐け』と追い込む。

千雨は何かを思い出すように視線を上げ、宙を見つめて答える。

「さあな……ガキの頃の話だから、もう覚えてねえや……」

千雨は黙秘権を行使した。それなりにヘビーな話をさらっと話す気にはなれないし、『同じ痛み』を分かち合えない者に気安く話す気にもなれない。不幸を売物に生きるには、『佐倉杏子』のプライドは高すぎるのだ。その事を察したエヴァンジェリンは質問を変えた。

「それじゃあ最期の質問だ……こうなった事をオマエは後悔しているのか？」

その質問に千雨は『何を今更』という表情で答える。

「もうそんな時期は終わっちゃったよ……とはいえ、まだ『過去の記憶』になっちゃあいない。今でも時々傷口が開いて出血しやがる……」

千雨の表情に自嘲が浮かぶ。だが話を続けていくと徐々に、彼女の瞳は強い意志を浮かべていく。

「でもなあ……『無くしたモノ』を無かった事にはしたくねえ。『踏みにじったモノ』を見なかった事にするのは許されねえ。そしてどんなにバカげた判断だろうが、どんなに稚拙な妄想だろうが、決断したのはアタシだ、アタシの意志だ。アタシが其れを受け入れなければ何も始まらない。それを愚かだった、と。幼稚だった、と。自分以外の誰が言っただって気にしない——アタシは其れに答えてやる、何万回でも答えてやる——その通り、だと」

偉大な革命家の如き雄雄しさで千雨は答える。その『答え』というより『表情』に満足したのか、エヴァンジェリンは矛を収めて大人しく黙る。だが『面白い玩具を見つけた』といったげな表情を浮

かべ、瞬きもせず壮絶な笑みを向けてくるエヴァンジェリンを見て、千雨は『ヤベエ……何か地雷踏んだかな?』と考える。

「それじゃあ結論を言わせてもらうと、長谷川君に特に望む事はない。色々と手を貸して欲しい事はあるかもしれないが、君に命を削れ、と命じる権限など我々にはない。だから大人しく生活していて欲しいのだが……まあ江田島君の関係者に自重を求めるのも……無理な話かもしれんのか……」

「……塾長をご存知で?」

聞きたくねー と思いつつ千雨は問い掛ける。気のせいかエヴァンジェリンの表情が曇っていく。

「彼は色んな意味で有名人じゃよ。教職者としても武道家としても……おまけに昔エヴァと一悶着あったしのう」

学園長はあっさりとバラす。「ジジイ! 貴様!」エヴァンジェリンはそう叫ぶが、高畑に羽交い絞めにされていては止める事も出来ない。

「一体何があったんです?」

千雨は真面目そうに質問する。だが口元が緩んでいるのは誰の目にも明らかだ。嫌な奴の弱みを握れる、と興味津々なのである。学園長もノリノリになっていき

「それがのう、勝負を挑んで勝ったまでは良かったが、調子に乗って血まで吸ってしまいおった」

「プッ」

学園長のカコバナを聞いて千雨は噴出す。大体オチは想像出来るが、続きを促すように学園長に眼を向ける。学園長も、『ジジイ黙れ！』とか『言うなー！』と絶叫しているエヴァンジェリンをチラ見した後ネタ晴らしをする。

「すると江田島君の精力が強すぎたのか、鼻血が止まらんようになって、そのまま卒倒したらしい。結局眼が覚めるまで江田島君が看病しておったそうな……」

「……………プッ！　そ、それは……………クッ……………」

肩を震わせ、俯きながら千雨は言葉を詰まらせる。「きーっ！ー！」とか「キサマラー！ー！」とか顔を真っ赤にしたエヴァンジェリンが叫んでいて、それを学園長が諫めていた。

「まあまあエヴァよ、そんなに興奮すると……………また鼻血ぶーになるぞ」

「プッ！　ギャハハッハー！ー！ー！　ダメだ！　我慢デキネー！ー！」

千雨は学園長の一言を耐える事ができず、机をバンバン叩きながら抱腹絶倒で転げまわっている。絶対確信犯で言ったのだろっ、学園長はニヤニヤとしているだけだった。

「あんなモンに食欲湧くとはゲテモノすぎるwww ブリテンよりも悪食とはw ひー！ 腹筋がぶちきれるww」

ゲラゲラ大笑いしている千雨に対し、エヴァンジェリンはもう一言も喋らなくなり『もういつそ殺してくれ』と言いたげな表情をしていた……

千雨の笑いが収まるのを待つて、学園長は話を続ける。

「話を戻すが、長谷川君の事を外に洩らす積もりは無い。じゃがのう……秘密が漏れないという保証はない。だから此方としては君自身の身の安全は、自身で守ってもらいたいのじゃが……」

「そうは言いますが、此方の魔力には上限がありますので、そこを突かれて延々泥試合となると、此方も周りの被害とか手段とか選んでられなくなります……」

千雨は暗に『お前らも手貸してくれよ！』と訴えるが

「じゃが此方も人手不足でな、定期的に回せる人員がおらんのじゃ」

学園長は『無理』と返答した。『面倒なことになりそうだな……』と言いたげな表情を浮かべる千雨に、学園長は彼女の食指が動くような提案をした。

「長谷川君の《ソウルジェム》を調べて分かった事が一つある。《魔法》を発動させようとした時、《ソウルジェム》が《魔力》を収

集しようとする。大体其の時には君の身体の中には《魔力》が存在していないので、《魂》を消費して《魔力》を絞りだそうとするよ
うじゃ」

学園長の言葉に千雨は興味なさげに『で？』と言いたげな表情で
答えた。

「じゃがもし、君の身体に《魔力》が漲ったたら？ おそらく《ソウルジェム》の消耗は抑えられる筈だ。大技なら兎も角、通常戦闘時の消耗は理論上、無くなると思われるんじゃないが？」

「……アタシは《魔力》を創る事が出来るのか？」

恐る恐る聞く千雨。その表情には微かながらも期待が浮かんでいた、が

「無理じゃろっ」

あっさりと学園長に打ち砕かれた。

『余計な期待させやがって！』とイラつく千雨に対して

「じゃが、君の身体に《魔力》を宿らせる方法はある……《ミニステル・マギ》（魔法使いの従者）というのじゃが……」

そういつて学園長は説明を続けた。

「……ってえことは、その《ミニステル・マギ》っていつのになれば、魔法使いから《魔力》がガバガバ流れ込んでくるってか？」

「……じゃが君の場合は、必要とされる魔力量が大きすぎて、一般の者では一瞬で魔力が枯れてしまうじやろう」

「アンタか、高畑先生か、フルパワーのエヴァンジェリンレベルじやなきや駄目だっつつうこと？」

千雨の問いかけに学園長は頷く。そして善は急げと

「じゃあアンタでいいから、さっさと仮契約とやらをしようぜ」

興奮している為か、口調が元に戻っていた。彼女を落ち着かせる為、宥めるように学園長は説明する。

「まあ落ち着きなさい。その為に《仮契約》（パクティオー）には……」

学園長の話を聞いた千雨は顔を真っ赤にし、直ぐに真っ青になった。そして少し考え込んだ後、虫ケラを見るような眼で学園長を睨み

「テメエ……可憐な美少女の唇欲しさに、そんな嘘までつくとは……」

ゴゴゴゴ とオーラを纏い、指をワナワナさせて千雨は学園長の方を向く。どう見ても臨戦態勢に入っているようだ。

「お、落ち着くんじゃ長谷川君。君は知らんようだが、これは魔法使いにとっても常識であって……」

「本当なのか、エヴァンジェリン!？」

弁解する学園長の話を第三者に確認しようと、千雨はエヴァンジェリンに問い質す。が

「知るか……オマエなんか、ジジイとディープキスして死んでしまえ……」

エヴァンジェリンは未だやさぐれたままだった……

「やっぱりジジイ……テメエは！」

「誤解じゃよー！」

この騒動は、高畑が間に入るまで続いていく……

「断る！！ 乙女の唇は安かねえんだよ！」

そう断言する千雨。

「じゃがのう……そうしないと君の身体も……」

そう翻意を促そうとする学園長。千雨は何か思い出したように

「アンタの孫娘じゃあ駄目なのか？ マジパネエ魔力があった筈だが？」

「木乃香はのう……ワシもあの子の父親も《こちら側》には関わらせぬ予定じゃからのう」

千雨の提案に、学園長は眉を顰め『遺憾の意』を表明した。それを見た千雨は皮肉げに

「へえー アタシとはエライ違いだなあ……流石に孫は可愛いってか？」

「違う……とは言えんが、木乃香は血縁的に色々不味い面があつてのう……あの娘を関わらせると、それだけで死者が出かねんのじゃ。それにのう……」

そう言つて千雨を見つめる。

「刹那くんも其れに賛成しておるから、もし木乃香にそういう目的で近づこうとしても……」

「一戦交えなきゃいけない……か」

千雨としても其れは御免蒙りたい。桜咲を見ていると『美樹さやか』を思い出す——最近は特に。強そうで、弱そうで、そして

儚さそうで。

アイツの想いを踏みにじつて目的を達成するなんて、想像しただけで総毛立つ。千雨としてもその案は却下となる。

『仮契約はしたいが、おっさんとキスしたくねえ……』そう考えた千雨はふと、思いついた事を口に出す。所謂『私に良い考えがある』である。

「だったらアタシの条件としては……」

その内容に大人二人は難色を示すが

「よかるう、その条件でいい」

なぜかエヴァンジェリンが答える。どうやら何とか立ち直ったようだ。

「エヴァよ……何を勝手に……」

学園長は窘めようとしたが

「良いじゃないか、本人も覚悟の上だろう。どうせ学園内への侵入者は、我々が対処するべき問題だ。もし学園内の連中がコイツに牙を剥いたとしても、総がかりじゃないと倒せやしない」

そう言つてエヴァンジェリンは千雨を睨む。

「という訳で長谷川、オマエの好きにすればいい……ただし、『こちら側』の人間とそれなりに交流はしてもらう。オマエも『こちら側』の常識や知識を知らないと、今後生きてはいけんぞ。そして……」

ニヤリ と嗤いながら提案する。

「オマエの『ソウルジェム』を定期的に調べさせてもらうぞ」

ガタン と千雨は立ち上がりエヴァンジェリンを睥睨する。

「まあそんな顔をするな。これは万が一、《魔法世界》の連中にバ
レた場合に、提出する情報を作る為だ」

「つまり、『アタシを差し出せ』と言われた時に、そのデータを差
し出して時間を稼ぐってか？」

千雨の問いに、エヴァンジェリンは 是 と答える。千雨として
も其れは悪い話ではない。渋々ながらもそれらの条件を了承して自
室に帰って行った。

「ジジイ、これで良かったのか？」

長谷川の提案を聞いた学園長の表情から、この案を受諾する必要
がある——しかも千雨に怪しまれずに——とエヴァンジェリンは判
断し、あのような横槍を入れて一芝居打ったのだった。

「……まあ仕方なろう。彼女が受け入れられる条件がアレだけな
らば……」

だが学園長は建前のみの返答を返す。エヴァンジェリンにその理
由を話すつもりは無さそうだ。高畑もさっきからずっと考え込んで
いて、会話に参加しそうにない——どうやらこれ以上、情報の入手
は出来そうに無かった。

「……まあいい、今日はここで帰るとしよう……だが！ 近い内に
『その辺の処』を細かく説明してもらおうぞ——」

エヴァンジェリンは舌打ちしつつ引き下がり、自宅に戻っていた。

帰り道でエヴァンジェリンは千雨の出した3つの条件を思い出す。明らかな遅延行動——仮契約の時期を遅らせる為の無茶な条件——それを善しとした学園長の真意が気になる。

- ・膨大な魔力を有している。
- ・社会的にしっかりとした地位を持っている。

この2点は理解できる。まあ当然とも言えよう。だが最後に1点
が、結果的に上記2点を足枷へと変化させ、千雨の仮契約を妨害する事になる。

「判らん」

エヴァンジェリンはそう言い、この件については一時保留とした。事実この謎を解き明かす事が出来るのは、今現在3人しかいない——近衛近右衛門　タカミチ・T・高畑　そして『未来情報』を持っている超鈴音だけである。この条件を聞いた超は乾いた笑みを浮かべて呟く

「コレは……長谷川サン、鴨が葱背負ってやって来たようなものネ……相手がネギ坊主だけに」

仮契約成立には足枷のように見えて実の処、絶妙に逃げ道を自ら塞いだ条件——それは

・自分より年下であること

第13話

情無用、

命無用の魔法少女

この命、

熱量30億TJ也

(後書き)

「タカミチ君、さつきからずっと考え込んでいるようじゃが、一体どうしたんじゃない？」

二人だけになった理事長室で、学園長は尋ねる。

「ええ、実は気になる事がありまして……長谷川君の話に出てきた交通事故のあった日なんです……同じ日なんですよ」

高畑は少し間を置き、話を続ける。その内容に学園長は驚愕し、この事象が只の偶然である事を祈った。

不可解そうに高畑が紡いだ言葉それは……

——ネギ君の村が襲撃された日と——

第14話

アタシは魔法少女…紙切れよりも薄い己の命…燃え尽きるのに僅か

「いらっしやいませ イカ野郎」

ここはオープンしたばかりの『超包子』 営業用のスマイルにしては、かなりドスの効いている笑みで千雨は接客している。膝上なんてレベルじゃない丈のチャイナ服を纏い、人差し指一本で料理を支えつつ、不承不承な顔でホール対応していた。

だが一寸待つてほしい——長谷川千雨である、ホールである、接客係である——ケンコバでなくても『正気ですか!?!』と言いたくなる『敵材敵所』と言いたい配置である。核ミサイルの上でロデオをする位イカレた行為といえよう。マ■ケル・ベイもクライマックスに取って置く位ドキドキハラハラのシチュエーションだ。事実、一時間に一回は客が『飛んでいく』のが目撃されている……イラッときた千雨の『可愛がり』が原因で……ナヨナヨした評論家気取りに向かつて『お客様、バットを買ってまいりましたので……試しに殴らせる』こう言い放ったと、麻帆良の都市伝説が出来た程だ。この件について朝倉がインタビューした事があつたが、千雨は『何で人をブツ飛ばすのに一々バットを買う必要があるんだ? そんな事をしていたらバイト代じゃあ追いつかねえ』と供述し、それが証明されたので、この一件については無実とされた……あれ?

このようなアカギクラスの狂気の沙汰が何故発生したのか? その原因は千雨がクラスに復帰した一日目から始まる……

「それでは! 『長谷川さんの御両親快気祝いパーティー』の開始で

「――す――！」

何故か朝倉の音頭で始まったこの宴会、よく見てみるとザジ、エヴァンジェリン、絡繰、桜咲、超、葉加瀬の顔は見えないが、まあその辺は何時もの事と考えられる。そう考えている間にも、千雨に色々な奴が絡んでくる……初っ端から鳴滝姉妹がやって来て、恐る恐るだが指をパッチンするトラップ付のガムを差し出した。こいつが通過儀礼だと理解した千雨は

「おお！　ありがとう」

と言いつつガムを取ろうとして　パチン！　と指を挟まれる。

「いてー！　お前ら何しやがるー！」

千雨はそう言いつつ二人を追い掛け、「キヤハハ」とか「わーい引っ掛かった」とか言って逃げ回る鳴滝姉妹と楽しそうにはしゃいでいた。

周りはそれを見て安堵の表情を見せる。一応クラスが抱えていた問題が片付いた事になるからだ。

うつすらと漂っていた緊張感も無くなり、宴会らしい空気になっていく。千雨としても少し溶け込めた気がして、頬が緩んでいた……とはいえ相変わらずな、カオスでクレイジーな雰囲気慣れる事には無かったが……因みに早乙女を脅して『瀬流彦×高畑』の薄い本を出させようとしたのだが、早乙女曰く『そのカップリングはもう枯れたジャンルなんで、あんまり売れないっすよ……』らしい。コイツ等どんだけ未来に生きてんだ……

「長谷川サーン 本当はイイ人ダタネ」

パーティーも酣の頃、古菲が御機嫌な表情でからんできた。古の何時もと違う様子に、怪訝そうな表情を見せる千雨だが

「ん？……オイ酒臭せーぞ！ 誰だ酒持ってきた奴は！！」

原因に気付いた千雨は、周りに注意を促すが

「うゝん」

「ひゃひゃひゃ」

「せつちゃゝん……」

「ZZZZ……」

もう手遅れだった……

1年A組の良心と言うべき2名も、雪広はダウン、那波はニコニコしながら一升瓶を持ち、コップにグビグビと注いでいる。

『ダメだこりゃ……』

この状況に対して匙を投げた千雨は、さっさと逃げ出そうとしたのだが

「長谷川サン……イヤもう千雨ちゃんと呼ぶネ！」

そう言つて古菲は千雨の首をガツシリと掴み、千雨のコップに紹興酒を注ぎ『飲むネ！』と眼で訴える。

日頃の行いからは想像出来ない位、押しに弱い千雨としては断り辛いらしく、渋々とチビチビと口にする。

本来アルコール度数18%前後の紹興酒なら、悪酔いしにくい筈なのだが……ある者の工作により度数98のスピリタスがチャンポンされた為、かなりキツイ酒になっている——スピリタス、そうあのスピリタスである。よって……

「一番！長谷川千雨！火を吐きます！！」

……こうなってしまう。

ヘベレケに泥酔した千雨は、そう言つてポケットから黒い粉の入った瓶を取り出し、その粉を呑みこんだ。そして静かに息を吐く、その黒い息に向かって鶴嘴千本を交差させて

「長谷川流魔体術 咆竜哮炎吐！」

と叫ぶ。すると鶴嘴千本の切っ先から火花が散り、それが黒い息に広がる。そして轟々——！！と巨大は炎となって天井を焦がしていく。

おおおー！とか すごー！とかいう歓声に、千雨は自慢げにガッツポーズをとる。

「おおー！ 千雨ちゃんそんな大技も修得シテタなんて、スゴイネ！」

純粹に賞賛の眼差しを送ってくる古菲に照れつつ、最初『こんな大道芸紛いの技、何時使っただよ！』と思いつつ修行したこの技を、千雨は始めて習得して良かったと感じた。

これに気を良くした千雨は、酒を飲みつつ隠し芸的な技を披露していき、拍手やお捻りを浴びていく……

サバトのような宴会も終わった夜中の2時、宴会場には誰一人動く者はいなかった。動ける者、友達が元気だった者は、何とか自室に戻りベットでぶっ倒れている。ここに残っているのは

・寝起きに関わりたくない危険人物

・どう見ても爆睡中

と見なされた千雨と古菲の二人だけだった。このまま朝まで放置される……と思っていたのだが……

「長谷川サン、このままだと風邪引くネ」

と声を掛ける者がいた。その問い掛けに対し千雨は

「うーん もう食べられないよ……」

とベタな寝言で返した。

その様子を見て『今がチャンス』と思ったのか、懷から書類を出し、千雨の目前に翳す。

「長谷川サン、此処ニサインするネ」

「ん？ 何だ？ 外泊許可書か？」

「……まあ、そんなモノネ……」

泥酔していて早く寝たかった千雨は、特に考えもせずサインし、再び夢の中に戻っていった。

その受け取った書類を――超 鈴音は懷に仕舞い、この場を離れようとした時

「いいのか、そんなやり方で？ ソイツが大人しく受け入れる訳が無かるうに」

そう声を掛ける者――エヴァンジェリンが問い掛ける。それに対し超は静かに答える。

「その時ハ、その時ネ。天佑が無かったと諦めるヨ」

エヴァンジェリンはこの『世界にすら抗おうとした』超鈴音の神妙な言葉に眉を顰めた。『長谷川千雨の本質』を見間違えているのか？ と思ってみたが、そうでもなさそうだ。

「最悪の場合、私はどちらの弁護をすればいい？」

「もちろん長谷川サンの方ネ、何しろ彼女ハ『被害者』なのだから」

「覚悟の上か……」

超のこのやり方は、千雨の身柄を押さえる方法としては最悪の手段と言える。幼少の頃、騙されたも同然で契約して『あのような』身体にされた千雨にとって、本人の了承を得ない契約など、良くてシカト、最悪刃傷沙汰に発展しよう。

『いや……10中7、8　そうなるだろうな』

エヴァンジェリンは千雨の日頃の行動と、赤字解消の為とはいえ、生徒同士で殺シアムさせた『あの男』の影響を考えると、穏健な処理をとると思えない。説明した直後にブスリも在り得る。

「いいのか？ちゃんと説明すれば力を貸してくれるかもしれんぞ？」

エヴァンジェリンは翻意を促すが、超は首を振る。

「そうすると状況次第で、長谷川サンを後ろから撃つ事になるかも知れないネ……なら最初から敵対的だった方が気は楽ネ」

それを聞いたエヴァンジェリンは超の覚悟の程を理解した。

「『悪』には成れども『外道』のは成らざる、か」

「それは違うネ。クラスメイトの《魂》を狙う段階で充分『外道』ヨ。ただ『罪状の低い外道』に成りたいだけネ……そうすれば地獄に堕ちる確率も減少するし」

超の自嘲が葛藤の深さを滲ませる。この降って湧いたようなイベ

ントを、どう処理していいのか未だ決めかねているのだろう。

「結果……長谷川を賽の目代わりに運試しか……己の命をチップにするとは、何とも豪気なことだな」

最期にエヴァンジェリンは『骨は拾ってやる』と言い残し去っていく。

一人残された超は千雨の顔を一瞥する。このボンヤリとした寝顔から、あの戦闘力は想像しにくい、明日間違はなくソレは自分に向けられる……最凶の表情で……

「とはいえ……此方も只やられる訳にはいかないネ。悪足掻きはさせてもらっ……」

翌日、千雨に突きつけられたのは

『絡繰さんの修理費用の代わりに超の店で2年程働いてネ？ 心配しなくてもバイト代は別にあげるヨ』

という通達だった。普通、中学生にこんな書類突きつけても、法律上無効になるのは当然で、一々相手する事もないのだが……ここが『麻帆良』である以上、こんな無茶も通じかねない。とはいえ千雨は、こういう仕打ちを許容できる程、人間が出来ていない。

「態々トラウマづくりしてくるとは……望みどおりブツ刺してやるぜ！」

と、超と千雨の交渉は『超 絶体絶命』の状態からスタートした。

「さあ、テメエの罪を数えろよ……但し、その時にはアンタを八つ裂きにしているだろうがな!!」

「長谷川サン……色々混ぜ過ぎネ……」

喉元に穂先を突き付けられた状態で、超は突っ込んだ。千雨が超の部屋に扉を『ぶち抜いて』入ってくるなり、この有様である。

『壁をぶち破つて来なかっただけマシ、問答無用で刺されなかった以上、この博打に勝てた』と超は心の中で呟く。千雨としては『さつさと殺つちまえ』と彼女の中のゴーストが囁いているのだが、今一步踏み込めない……殺人への禁忌もあるが、何より『何故こんな暴挙に出たのか』が気になるからだ。それを聞き出すまで殺るのは保留だ。その辺を問い質そうとすると、その前に超は話しかけてくる。

「先ずハ、時給について話すケド……」

ブチッ!!

千雨はキレた。コイツ舐めてやがる、と完全に頭に血が上った。

「ああ……一文銭6枚でどうだ! 今すぐ叩き返してやるがな!!」

そう言つて千雨は少し間を取り、槍を引いて溜めを作る。腕の本か、片目か、どちらを奪おうか思案し始めた時

ギイ

誰かが入室してきた——良い匂いと共に——やって来たのは『対長谷川用絶対防御システム』……四葉五月であつた。

緊迫していた空気も気にせず、四葉はもって来た賄……酸辣湯と肉まんをテーブルの上に人数分配膳した。

ゴクリ

四葉がいる手前、大人しく席に着く千雨は、目の前の料理に唾を呑む。畜生、嵌められた！こんなトラップがあつたなんて！だが目を逸らせない……そうこうしている内に

「五月、今度千雨チャンがウチのホールの入ってくれるネ」

超が馴れ馴れしく名前で呼び、もう確定事項であるかの如く外堀を埋めようとする。千雨は『一寸待て』と言おうとしたが

「ささっ、早く食べないと冷めちゃうヨ……千雨チャン」

ピキピキ

千雨の額に血管が浮き、テーブルの下で拳をブルブル震わせていた。嗚呼この拳をアイツ（超）の顔面にぶち込んでやりてえ……やりたいんだけど

にっっ

そう笑顔で此方を見ている四葉に、毒気を抜かれていく。嗚呼
心に暖かいモノが満ちていく……もうどうにでもなれ、と千雨は肉
まんを掴み、一口齧る。

うまい……

想像以上に中の餡がジューシーで、皮の部分との相性は抜群であ
った。だが勢いで3口4口と進んでいくと、どうしても口の中がぱ
さつく。

口中を潤わす為、酸辣湯を啜る……たまらない！

酸味が広がり唾が滲み出てくる、それを酸辣湯のとろみが軟らか
く包んでいく……それでいて具の触感が、口の中でハーモニーを奏
でている！！特に千切りにされた絹ごし豆腐の柔らかな、とろけ
るような触感がもう！！

「ぶはー」

至極満足という表情で千雨が唸る。他の二人の暖かい視線——超
の方は『獲物が罠に引っ掛かった』ような——に気付くと顔を伏せ、
身体をフルフルと震わせる。

「お……」

千雨の中で色々な思いが渦巻いていく……『お前ら！いいかげん
にしろ！』『オドレ等、タマ取ったるか！』と言いたかった、言う
べきだったかもしれない……と千雨は後日悔述する。結局、顔を真
っ赤にして発した言葉は

「お、おかわり……」

長谷川千雨 完全敗北の瞬間であつた……とはいえ流石の千雨も
猛省したのか、三学期初めに提出された書初め『今年一年の抱負』に

《禁酒》

と書いたらしい……後日高畑先生が、職員会議で吊るし上げを喰
らつたそうだが……

「……で？ 舐めた真似されたにも関わらず、ここでニコニコバイ
トするとは……情け無い奴だ……」

客として来ていたエヴァンジェリンが、蔑むような眼で千雨を見
る。それを感じ、不快そうな顔をして千雨が注文を取る。

「何言つてやがる、アタシのスマイルを見た以上、自動課金で代金
50円アップだからな。コッチは忙しいんだから、さっさと注文し
ろ。でなければ帰れ！」

どこぞの司令のように言い放つ。

「ほほう……どうやら、客に対する口の利き方になってないようだ
な……しっかりと調教してやらんな」

そう言つてエヴァンジェリンは立ち上がり、千雨にガンを飛ばす。
それに怖気づく千雨でもなく、平然と言い返す。

「五月蠅え……喋んな、息すんな。空気が江田島臭くなんだろうが……」

ピキッ　ピキッ

エヴァンジェリンの形相が鬼のようになる。どうやら逆鱗に触れたようだ。

「あんましチョーシこいてると……ひき肉にすつぞ……」

とエヴァンジェリンは、特攻の拓のマー坊のような口調で悪態をつく。

「デメエこそ、吐いたツバ飲まんとけよ……」

対して千雨はビーバップのような口調で啖呵を切る。

二人の間で激しく火花が散り、緊迫した空気が漂ってくる。周りの客も目を合わさないようにしたり、この場から逃げ出そうとする者も出てきた時

「ハイハイ、二人とも落ち着くネ。二人に暴れられたらココラ一带壊滅スルヨ……それに」

そう言つて超は厨房の方へ視線を向ける。

「うちの裏ボスが、ご機嫌斜めになるかもネ」

その視線の先では四葉が、怒ったような表情で暴れん坊の二人を

見つめる。それを見た千雨は真っ青になり

「勘違いっすよ、四葉の姐さん！ アタシと、この平八っばいチビはもうマヴダチっすから！」

そう言いつつエヴァンジェリンと頬を合わせ表情筋総動員でスマイルを作る。そうしつつもエヴァンジェリンの後頭部を掴み、アイアンクローをかましているのは、お約束ともいえる。

「そうだぞサツキ、この脳筋チンピラとは友誼を結んだ処だ」

そう言つてエヴァンジェリンは千雨の背中に手を回す……その手で千雨の背中をぎゅっ と抓っているのも、同じくお約束と言えよう。

緊迫感は薄まり、代わりに滑稽さが漂う中、四葉は ほっとした表情を浮かべ厨房に戻っていった。

「ホント二人とも、似た者同士ネ」

この超の言葉に二人は反応し

「「どこが！」「」

と見事なユニゾンで叫ぶ。このギャグのようなコンビネーションが二人から毒気を抜いていき

「……トマトジュースでいいのか？」

「誰がそんなベタなモン飲むか。ジャスミン茶でいい、それとゴマ

団子のセツトだ」

エヴァンジェリンは注文の後、ここに来た目的を果たそうとする。

「それとジジイからの伝言だ『今度の土曜日に魔法関係者を紹介するから、昼には麻帆良の教会まで来てくれ』との事だ」

それを聞いた千雨は眉を顰め

「もうかよ……それに教会か……」

その表情を見たエヴァンジェリンは、ややトーンを落とし問い質す。

「何だ？ 教会に嫌な思い出でもあるのか？」

「まあ……色々と……な」

千雨は言葉を濁す。エヴァンジェリンは敢えて突っ込まず話を続ける。

因みに千雨の事は『幼少の頃、交通事故に遭い、その時近くにいたモグリの魔法使いによって、身体を改造された。魔法を使うが、同時に生命も消耗するので、長期間の使用は不可』と皆に説明された。

「まあ、これはしょうがない。何しろ学園の要注意人物と交友を持つてしまったんだからな」

「『友』なんて持った憶えはねえんだがな。こんな共■党幹部みた

いな腹黒女とは……」

千雨は腹に据えかねる表情で答える。エヴァンジェリンは『言いえて妙だな』と笑いつつ

「オマエがそう言おうと、他の者が心配する。ジジイもいろんな意味で心配なのだろう——だからあんな《護衛》もどきが付く事になったのだろう」

そう言い、顎で近くの席を指す……そこには飲茶を頬張っている龍宮がいた。

「そういう事だ。毎日、という訳にはいかないが、お前に付いて護衛兼監視をする事になった」

龍宮はそう言い、茶を啜る。手に持った月餅セットを鞆に入れ、レシートを手帳に挟む——絶対アレを経費で落とす気だ。

「護衛？ 監視？ 蝙蝠の間違いじゃねえのか？」

千雨の皮肉にも何処吹く風で

「それは学園長も承知の上での契約だ。だから長谷川、お前の依頼も引き受けやれるぞ……金額次第だが」

龍宮は平然と言放つ。千雨はそれを聞きポケットから500円玉を取り出し

「じゃあ龍宮、テメエ売店行ってパン買って来いよ……ダッシュだぞダッシュ……！」

「……このパンでいいか？」

P A M ! P A M ! P A M !

「デメエ！ 殺す気か！？」

このように和気藹々（？）と会話が進んでいくと、流れるに『今此処にいない』相棒——桜咲刹那のの話題が出てきた。

「そっぴや龍宮、オマエの相棒が最近変なんだが……一体どうしたんだ？」

千雨の質問に、龍宮は若干顔を顰め答える。

「この間の怪獣大戦争を見て以来、色々と思い詰めているようだな……まあ、どこぞの脳筋が自重しなかったのが原因だよ」

「人をゴジラ扱いするなよ……」

という千雨に対し

「どちらかと言うとジーラっぽいネ」

「確かに、マグロばかり喰ってそうだしな」

超とエヴァンジェリンが酷い事を言っている。

「デメエら……」

千雨が再びヤル気になってくる前に、龍宮が提案してきた。

「桜咲が気になるんなら、今夜の巡回に付き合わないか？」

千雨はその案に躊躇したが、意を決して

「別にアイツの事が気になる訳じゃねえが……まあいいさ、付き合
つてやるよ」

その台詞をきいて『素直じゃないネ』と超が呟く。そこまで言う
なら素直になってやるよ！ とばかりに千雨は

「それじゃあ肩慣らしに2、3人舐めた客をブツ飛ばしておくか！」

と無慈悲な宣言をして接客に戻る。

「照れ隠しで、お客様に手出さないで欲しいネ……」

そう言う超の顔は、少し引き攣っていた。

日も暮れた頃、千雨は学生寮の前で二人と待ち合わせしていた。
人通りが無くなり、星が瞬くようになった頃に龍宮と桜咲が現われ
た。千雨の姿が目に入ったらしい桜咲が、顔を引き攣らせながら龍
宮を睨む。龍宮はそれを気にせず、千雨に『待たせたな』と口にし
る。千雨は『問題ない』と頭を振り、挨拶する。

「今日は宜しく頼むぜ、先輩方」

腰に手を当て、ふんぞり返っているので、謙虚さの欠片も無かったが……

そのまま特に会話もなく学園内を巡回していく。間が持たないと、余計な話題を振ろうとする程、可愛げのある連中ではないが、千雨としては、桜咲の様子が気になってしょうがない。何というか『入れ込み過ぎ』なのである。全体に力が入りすぎていて動きが硬い。『こんなんで戦闘になっても大丈夫か？』と心配になる……そしてその予感は的中する。

「斬岩剣！！」

桜咲の斬撃が鬼のような化物を両断する。龍宮がフォローするように銃弾を放つ。当に鎧袖一触と言えるが……

「なんかキメエ……」

千雨はこの戦いっぷりが気に入らなかった。二人の動きが噛み合っていないので、見ていて気持ち悪くなる……正確に言えば桜咲が暴走気味で、それに龍宮が無理矢理合わせていくという流れは、初めて会った時より連携が悪くなっている。おまけに桜咲の動きも直線的で軌道が読み易い、つまり千雨側からすると、避け易く当て易い。いくら等価交換的に攻撃の威力が上がっても、決してプラスにはならない。まるで確信犯的に千雨のトラウマを、ドリルで抉る光景に憤りを感じ

『どうなつてやがる！？』

千雨は目で龍宮に問い掛ける。戦闘の後片付けをしていた龍宮は、其れを見て『仕方がない』と言わんばかりに首を振る。

馬鹿野郎 仕方ないで済む問題か！ 千雨は激昂しながらジェスチャーで自分と桜咲を交互に指差す『交代してみるか？』と。

龍宮は再び首を振る。『そういう訳にはいかない』と言いたげに。

結局今回の巡回において、戦闘はこの一回だけであった。最期に寮の近くの森で解散、となる予定だったが

「桜咲、テメエ一寸ツラ貸せや」

千雨の一言が無人の森に響く。桜咲は無視して龍宮と帰ろうとしたのだが、いつの間にか龍宮は姿を消していた。

徐々に緊迫していく空気の中、千雨は言葉を続ける。

「なんださっきの戦いは！ 全然なっちゃいねえだろうが！」

千雨はそういいながらも、桜咲の心中を大方理解できていた。あの戦い方は『自分より強い相手と戦い、相打ちに持ち込む特攻』に他ならない。つまりは自分やエヴァンジェリンから、近衛を守る事を考えているのだろうが……その際、桜咲が死ぬことが確定なのは気に入らない。第一、その死に意味がない。この学園においては時間さえ稼げれば、何とかなる。自分なら時間切れでアウト、エヴァンジェリンなら学園外に出ればいい。二人がかりになったとしても、高畑先生と学園長に押し付ければいい。

千雨は桜咲が『死にたがって』いるのでは、と怖れていた。本当に『アイツ』を彷彿とさせる……

桜咲は平然を装いつつも、身体から滲み出る激情を抑える事が出来なかった

「五月蠅い！ 聞いたような事を言うな——この化物が！」

千雨は気にせずに言い返す——だが桜咲を改心させる為か、呵責なく心を抉るつもりで

「なーに言つてやがる…… テメエも《化物》の類じゃねえか！」

言った、言ってしまった。だが千雨は後悔はしなかった。今ここで桜咲の心中を露呈させないと、もう二度と心を開こうとしないだろう。怒りだろうが呪詛であろうが一度ぶちまけさせないと、只へド口のように堆積し、悪臭を放つようになるだけだ。

そう言われた桜咲は動揺していた、いやそんなレベルじゃなく驚愕している。身体が徐々に震えだし、涙目で自分を抱きしめ、か細い声で呟く

「な、何で判った……？」

「何と無く判るんだよ、《ソイツ》が人か否か……がな」

これは佐倉杏子の『祈りの力』の残照。かつて持っていた『幻影を司る力』のおまけとして得た力。巴ミミとの決別以降、消えてしまった力——『人が分かる力』

父親を分かつて欲しい、という祈りから生まれた『内面の強い想い』を察する力。それがこの学園に来て以来、徐々に復活してきた。最近では魔力の有無、魔法の取得済みか否か、まで判る。とはいえ

完璧に判る訳ではなく、神楽坂明日菜などは『何か違うような、違うな』としか判断できない。

暫くして落ち着きを取り戻した桜咲はポツリポツリと話出す。後で聞いた話では『自分の種族までバレて無かったので安心した』らしい。

「ああ、そうだ。私は人と妖怪のハーフだ。今はお嬢様の所で、人として振舞っている……」

何か吹っ切れたように桜咲は言葉を続ける。

「とはいえ、そんな生まれの私が、お嬢様の周りにいる事を快く思わない者もいて、隠れて色々言われたものだ」

この化物め！ と

桜咲の独白に千雨も眉を顰める。嘗て佐倉杏子が、父親に言われた事を思い出したからだ。

この魔女め！ と

「だから私は神鳴流を学び強くなろうとした……心も身体も。武術で心身共に磨き、強い精神力を身に付ければ、人として振舞えるのでは、生きれるのではないか？ そう思った……思っていた……あの戦いを見るまでは」

あの戦いは悪夢でしかなかった。《人》に在らざる者、武術を極めた者、その二名が繰り広げた戦いは、当に『暴虐』の一言であった。魔獣同士がお互いに貪り合う姿は、桜咲の夢と希望を打ち砕い

ていく——アレがオマエの本当の姿だ。オマエは人には成れない——心の中の薄暗い何かが囁く。誰にもぶつける事が出来なかった、暗い想いが浮上してくる。

「なあ長谷川、私は何を恨めばいいんだ？ 私を生んだ両親か？私を捨てた氏族か？ こんな歪みが許容されるこの世界か？……それとも私を『人に成りたい』と執着させる、優しく接してくれる方々全員か？」

千雨は答えられない。自業自得と割り切り、周り全てを切り捨てた《佐倉杏子》と違い、桜咲は『未だ』無くしてはいないのだ。だから失う事を怖れている。そんな苦しみを味わう位ならいっそ……と希望を捨てる事で、心の平穏を保とうとしている——千雨としては、修正をぶちこんでも性根を叩き直したいのだが、中学一年の少女に、この状況で頑張れと言うのも酷な話である、とも感じている。

「私が『人』には成れないのなら、只の一振りの刀に成りたい。このちゃんを守る為に振るわれ、そして朽ちていく……それでいい、それ以上は望まない……」

ささやかで、悲しい願いを口にし、桜咲は帰って行く。

それを悔しそうな表情で見つめる千雨に、隠れて見ていたのだろう、龍宮が声を掛ける。

「中々強情な奴なんぞな、ああも感情を殺されると、どうしようもない」

「殺しちゃあいねえよ、只感情から逃げてるだけだろうが……」

過去の楽しかった日々を糧に今を生きる。悪いとは言わないが、12歳の生き方とは言えない。第一『過去を想う』と『過去に縋る』とは違う。桜咲は後者だ、しかも末期的な程に。

「龍宮は兎も角、アタシ等は未だ餓鬼なんだ。餓鬼が感情をぶっ放さずして、何の人生だ!!」

「何故、兎も角なのかは兎も角……お前の場合にはぶっ放し過ぎだな」

千雨はウルセエ と小さく囁く。

何とかしたいと二人は思っているが、きつかけが難しい。

- ・桜咲の正体がバレる
- ・木乃香に魔法がバレる
- ・今の状態が原因で重大な問題が発生する

これらの条件が最低一つは発生しないと、心境に変化は生じないだろう……結論：そう簡単には変わらない。

「長期戦だな……」

「ああ……」

何時終わるか判らないが、見棄てるには忍びない。千雨は、難儀な課題を戦い抜く戦友に、持っていたうんまい棒を差し出し

「……食うかい？」

と言った。龍宮は千雨の心中を何と無く察し、それを受け取る。

恐らく桜咲に渡すつもりだったのだろう、もう一本のうんまい棒を取り出し、千雨はチビチビと齧る。これの賞味期限中に片が付かないと判断したらしい。

甘辛い筈のうんまい棒は、少しほろ苦かった。

そしてこの後一年と少し、千雨にとっては春のような騒がしい日々が続き、それを何だかんだと楽しんでいった。

この後、訪れる夏に備える為に――嵐のような夏に備えるかの如く。

佐倉杏子の『祈りの力』についてはこのSS独自の設定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9244v/>

あんこたっぷり千雨ちゃん（魔法少女まどか マギカ×魔法先生ネギま！+魁

2011年10月30日16時04分発行